

263.3

342



0049730-000

263.3-342

新制尋二書方の新指導

水島修三・著

明治図書

上

昭和9

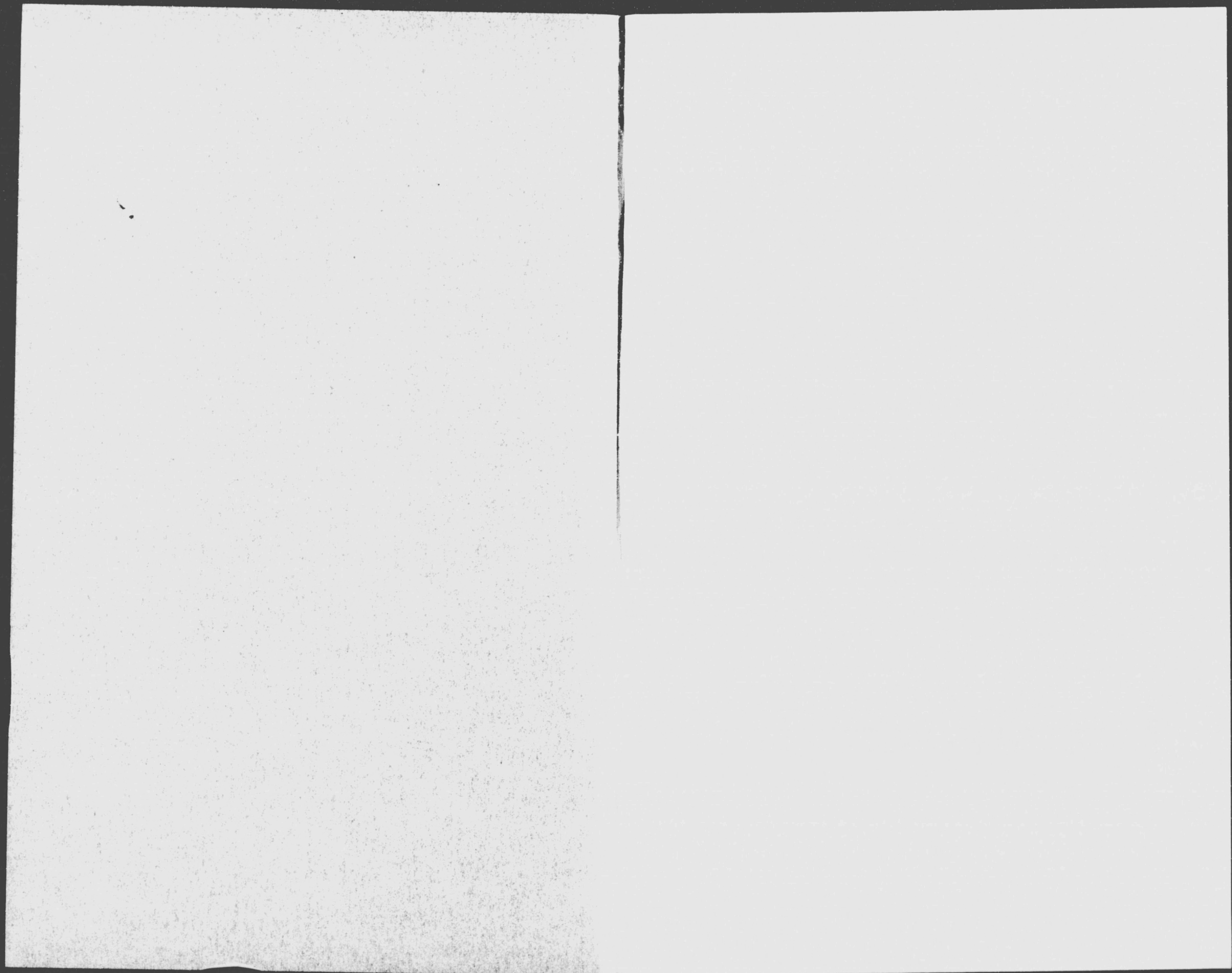
AHJ

この著作物は、著作権者不明のため、著作権法  
第67条の規定に基づき、平成12年5月15日  
付けで文化庁長官の裁定を受け使用するものです













東京高師附屬小學校書方科擔任  
全國中等學校習字協合理事

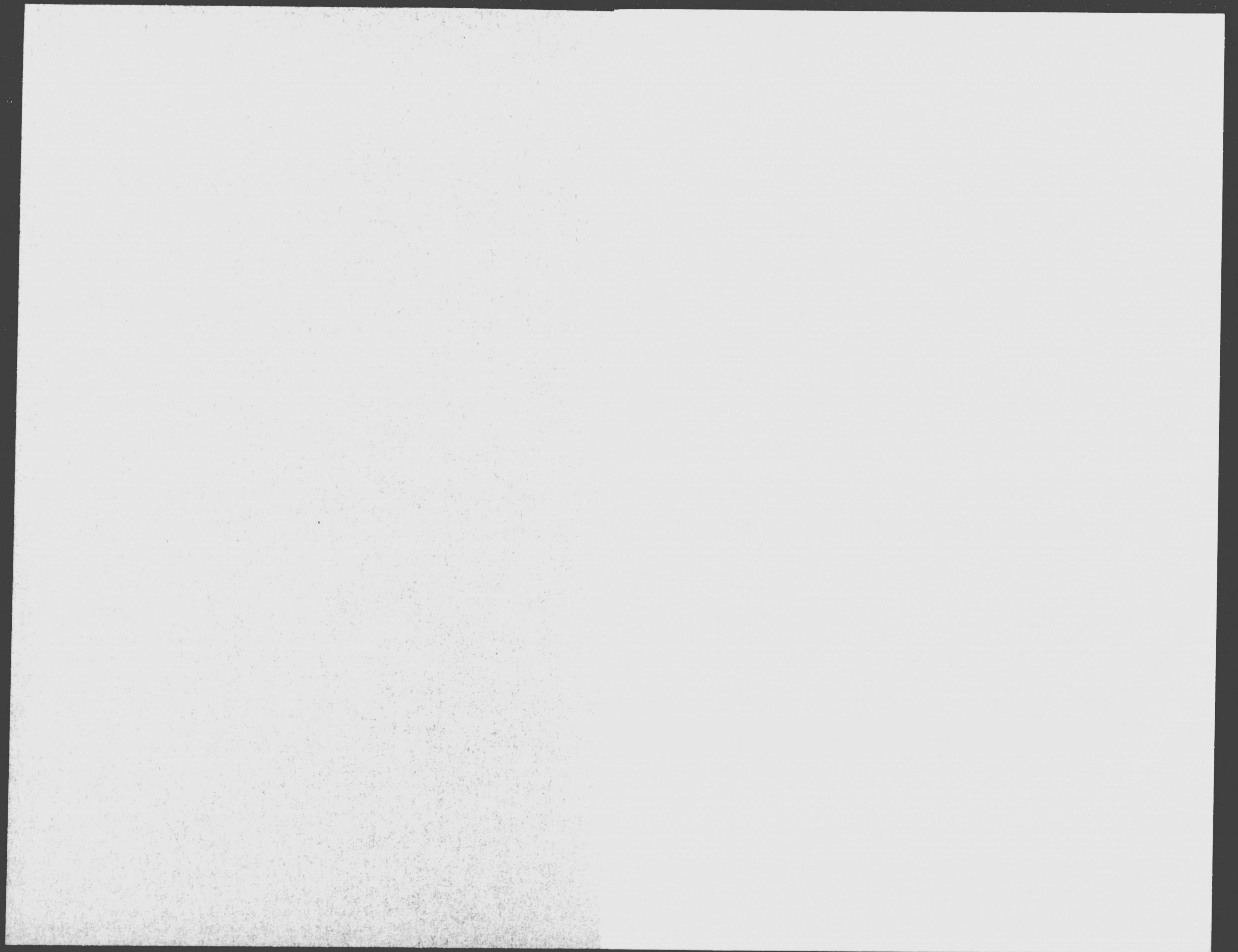
水島修三著

書方の新指道上



東京 明治圖書株式會社







孔子廟堂碑 虞世南書(唐)

書表瑞濟濟焉洋  
宇宙而洽幽明動  
潤江海斯皆紀乎



孔子廟堂碑 唐虞世南書(武德九年)

凡千三百年前のもので、品位を以てすれば古來第一等と稱されて  
ゐる。王羲之の美韻を得、其字は内に剛を含みて外柔、如何にも穩  
かで落着があり、風韻絶妙である。只あまりに渾然としてゐるの  
で、初學者は捉へるに苦しむ體がある。



九成宮醴泉銘 歐陽詢書(唐)

形隨感變質應德  
效靈丕馬如響赫  
赫明明雜遝景福



九成宮醴泉銘 唐歐陽詢書(貞觀六年)

此碑は古來楷法の極則とされし文字にして、歐陽詢の代表的傑作である。率更令は書聖王羲之の力を得てゐると稱せられてゐて、整正にして峻拔なれども、概して襟度の狭き憾がある。然し此碑は其缺點少くして、實に堂々人に迫るものがある。



孟法師碑 褚遂良書(唐)

望青鳥之來翔以貞觀  
十二年七月十二日遺  
形而化春秋九十有七



孟法師碑 唐褚遂良書(貞觀十七年)

褚遂良の書は王右軍の情趣を得てゐると云はれてゐるが、此碑はガツチリした莊重な文字で、河南壯年の作として代表的のものである。清の近代の大家楊守敬は、方整和暢・飛行絕跡、皆規に應じ矩に入るより來ると稱しているが、實に凝遠古厚のもので、用筆正しくして骨力あり、而も品位と風韻を兼備し、正書の規範である。

國定書方手本の書法は、正にかかるものを基調としたい。





(一其) 法筆用本手種甲



## 永字八法

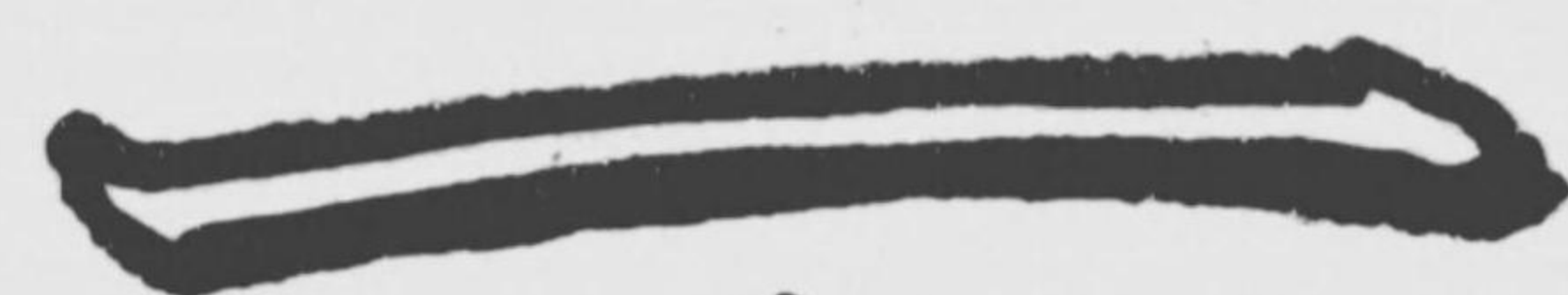
永字は古來千古不易といはれてゐる用筆法の根底を爲し、又間架結構の基調を爲すもので、其歴史極めて古く、東漢の蔡邕(約千七百五十年前)が嵩山の石室中にて、神人より授かりし筆法であるといはれてゐる。其後、鍾繇、衛夫人を経て、東晉の王羲之(約千五百五十年前)に傳はりしが、右軍は廿七年間偏に永字を研究したといはれる程、書道上大切なものである。

永字は第一筆より順次側、勒、努、趯、策、掠、啄、磔の八法を爲し、更に七十二筆に變化してゐる。其内最も大切な點畫につき概説すると、

側(點)はサット入れた筆を其儘右下へ引き、更に手前に押さへて左に反すのである。形は巖の墜つるが如くにして、臥せぬ様に作る事が大切だ。

掠(左撇ひ)起筆をシツカリ入れ、よく落着いたならば軸を少し左に倒し、穂先で紙を切る様にして、腕と共に拂ひ左に圓く抜くのである。





勒



側



垂針



努



掠



曲尺

趯



磔

(二其) 法筆用本手種甲



磔(右撇ひ、波法、捺ともいふ)起筆を軽く入れ、右下に押へ乍ら引き下げ、筆が一且沈着し穂先が開張してから、静に横にスウツト抜くのである。此時途中から筆の軸を立てる様にするると勁健となり、其儘で戦行さすと平清となる。共に收筆が下らぬ様に作る。

勅(横畫)筆を上より入れ、沈着したら右に引く。止つて穂先が隅々まで達したならば其儘左に返す。此時下に押すと痛が出来て品が悪くなる。稍右上りで中央が少し高い。

努(豎畫)筆を上から落してよく落着け、力を得て下にスウツト引き、收筆は其儘キチンと止めて上に返し、穂先が左に一寸出る様に作る。即勅筆を豎にして裏から見ると同様で、自ら少し彎曲する。

垂針(懸針)努の下を止めないで、直下に抜き放つのである。起筆をシツカリ入れ、抜く前に筆を一寸遅滯する様にして、緊張したまゝスウツト抜く。

曲尺(稜角)は横畫の終りをよく落着け、穂先が整つてから下に引く。其時穂

先は自然左上に一寸覗くのである。其時穂  
廻 豎畫の上から來た筆が其儘よく沈着し、左上に卷上げる様にして太くシツカリ押出すのである。





(一其) 法筆用本手種乙

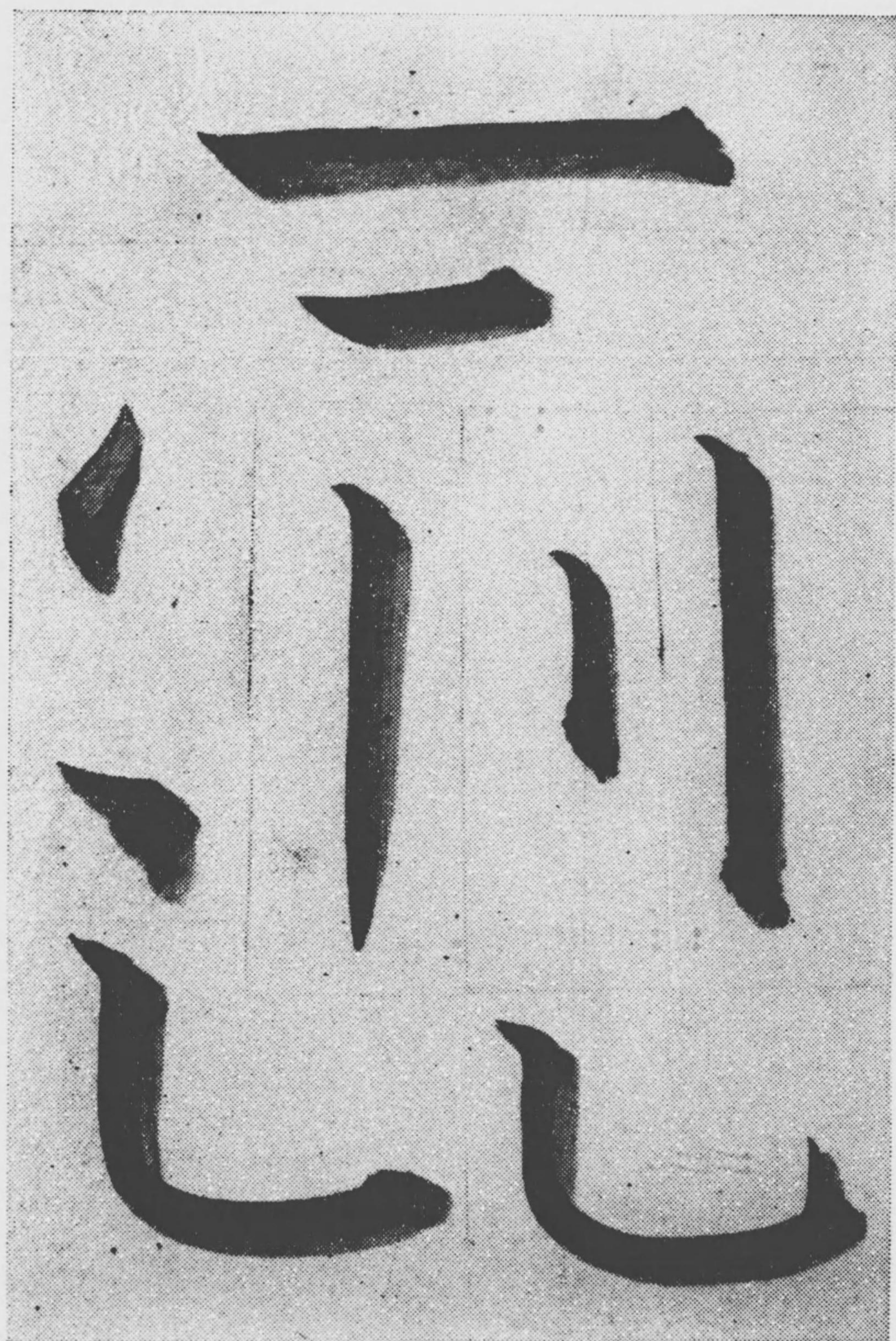


### 用筆法手本

これは筆の表裏を明瞭に現す爲に、特に淡墨にて揮毫したもので、濃き方は表即穂先の通りし跡で、特に黒き部分は、筆の重なりし處である。用筆法の根本は同一であるから、甲種手本の指導も之に準じて行へばよいのである。

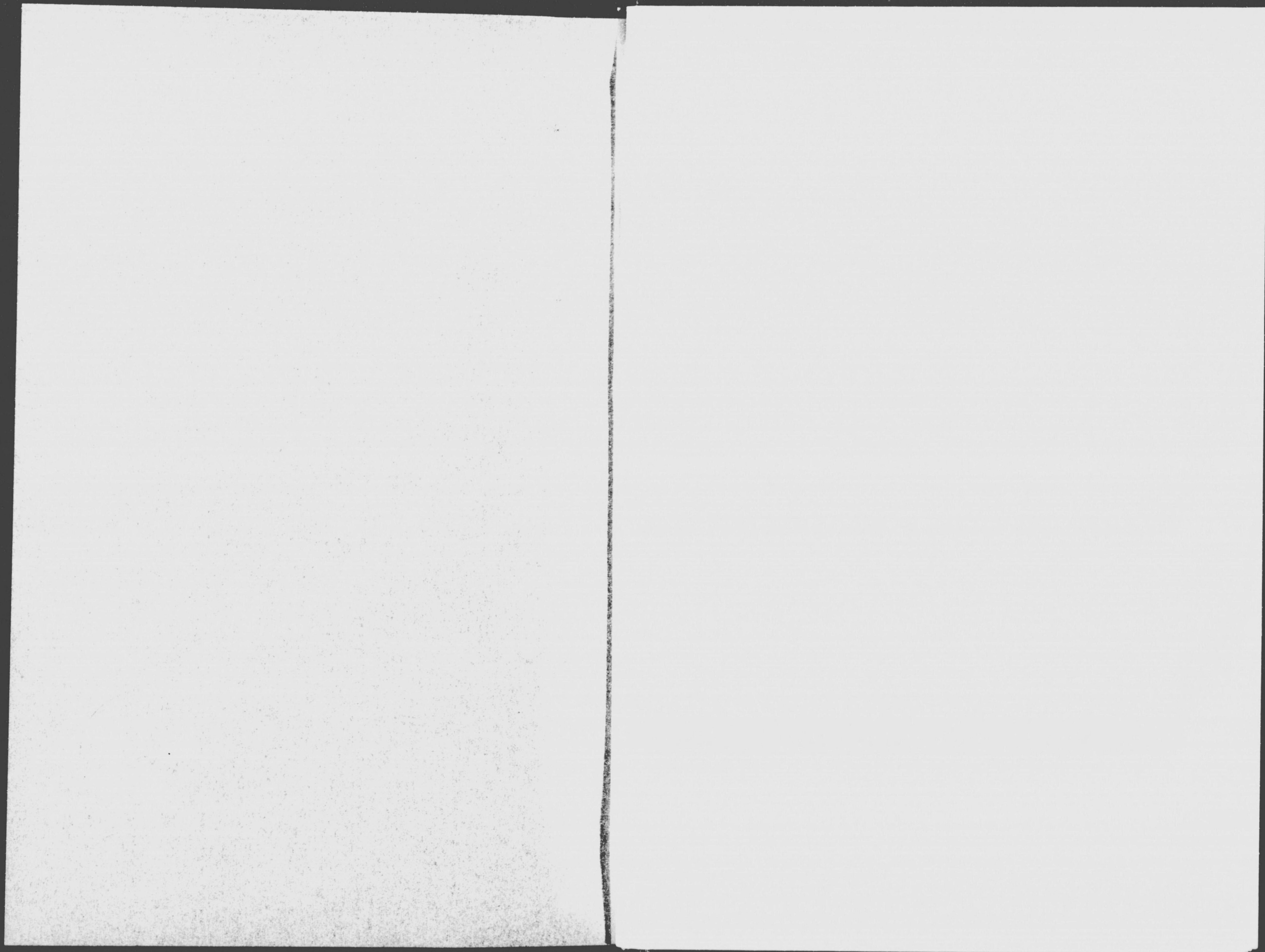
この寫眞は起筆、收筆は勿論、轉折の部分等、線の中に隠れてゐる用筆を明白に暴露してゐるので、毛筆書法上多大の参考になると思ふ。従つて一々の説明は必要がないから省略する。



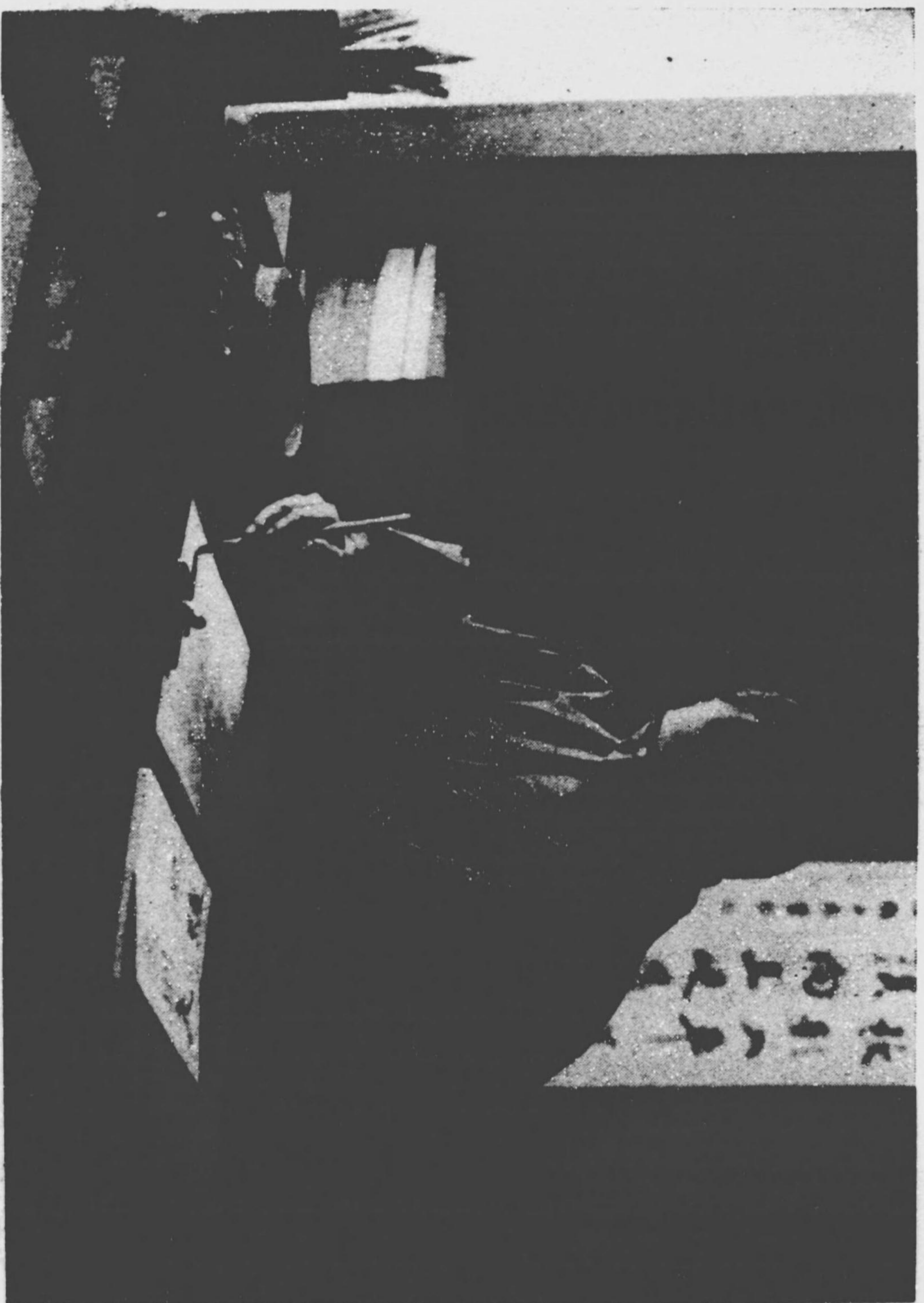


(二共) 法筆用本手種乙









毛筆書法姿勢寫真(著者)



263-342

## 序

此度小學書方手本尋常科第二學年用上が、尋常科第一學年用に次いで甲乙兩種共文部省から發行された。

私は書方教育刷新の要諦として、夙に國定書方手本の改訂を企圖し多年其貫徹に努力して來たが、今や其着々と實現しつつあるを見て衷心慶賀の情に堪えぬものがある。

新手本の甲種は漢字を背景とし、乙種は假名を基調とせる二人の筆者に依りて揮毫されてゐるが、何れも其特色を發揮して含蓄ある清新の書風を發表された。

そこで私は先づ文部當局者より詳細に其編纂方針を聽き、更に甲乙兩筆者につき親しく其用筆法を確め、更に私の希望を述べ理想を語つたのである。



かくて新に誕生したる手本が、廣く教壇上に於て最も有効に運用され、編纂者並に筆者の理想が正しく具現されん事を冀求して止まざる爲、明治圖書株式會社の望に従ひ本書の執筆に着手したのである。

素より淺學菲才の身であるから、出來上りしものは誠に貧弱ではあるが、多年書方教育に従事して得た理論と體驗を經緯として、銳意解説したものである。多少でも實際上の御參考とならば幸である。

尙私は兼てから、兒童の書方成績を向上せしむる第一要件は、優良なる教師にありと考へてゐるが、良教師たるには先づ眼識を養ひ技能を練磨せねばならん。この意味から本篇に於ては特に書道史を概説して、書道沿革の概要を述べると共に、鑑賞眼を啓培すべき先覺者の代表的傑作を、和漢共時代順に掲載した次第である。どうか此邊の事情を洞察の上著者の微意を汲まれ、斯道の爲に御盡瘁あらん事を。

昭和九年四月

著者 識

### 新尋二書方の新指導上 目次

#### 第一篇 總説

##### 第一章 書方教育の再建設

- 一 書方教育の歴史と法令の精神
- 二 時代思潮と書道の盛衰
- 三 書方教育再建設の必要

##### 第二章 國定書方手本の變遷

##### 第三章 書道の興隆と書方教育



- 一 科學の進歩が書に及ぼしたる影響……………五
- 二 民族精神の振興と書道……………六
- 三 物質文明と書道……………六
- 四 書の實用價值……………七
- 五 書方教育と情操陶冶……………七
- 六 書道の勃興と書方手本……………八

**第四章 國定書方手本の根本義……………九**

- 一 國定手本の具備すべき要件……………九
- 二 書方手本の基準となるべき諸大家……………九
- 三 學書の常道……………一〇

**第五章 新手本の研究……………一一**

- 一 筆者と其書風……………一一

**二 用筆法と結構法……………一二**

**三 總纂の趣意……………一三**

- (一) 分量……………(二) 章句
- (三) 假名……………(四) 漢字
- (五) 新字……………(六) 種類

**第六章 書方指導者としての教養……………一四**

- 一 書方教育不振の原因……………一四
- 二 書方科研究の必要……………一五
- 三 古法帖の研究……………一六
- 四 學書の方法……………一七
- 五 手本とすべき代表的法帖……………一九

**第七章 書道史概説……………二〇**



第一節 支那書道史

一 太古時代	三〇〇
二 夏・殷・周時代	三〇一
三 秦時代	三〇三
四 漢時代	三〇四
五 三國及六朝時代	三〇六
六 隋唐時代	三〇六
七 宗以後	三〇三
第二節 日本書道史	三五五
一 上代	三五五
二 奈良朝	三五八
三 平安時代	三六一
四 鎌倉時代以後	三二〇

第八章 書法

一 書法の價值	八三
二 用筆法と結構法	八四

(一) 間架

(二) 結構

第九章 毛筆書方の指導

一 姿勢	八六
二 毛筆の執筆法	八七
三 毛筆と腕法	八八
四 潤筆	八九
五 運筆	八九
六 手本の學習方法	九〇
七 指導方法と批正	九一



- 八 示範と練習……………九一
- 九 書方指導目標の段階……………九二
- 十 基本練習と初書……………九二
- 十一 毛筆書方と用具……………九三

第十章 硬筆書方の指導……………九四

- 一 鉛筆書方の手本と指導時間……………九四
- 二 硬筆の種類と其特質……………九六
- 三 鉛筆細字の目的……………九六
- 四 硬筆書方の姿勢……………九七
- 五 鉛筆の選定と其取扱……………九七
- 六 鉛筆の執筆法及腕法……………九八
- 七 鉛筆書方の用筆法と練習方法……………九八

- 八 鉛筆書方指導上の注意……………九九

第二篇 細 説……………一〇一

〔甲〕甲種手本による指導案……………一〇一

第一學期〔豫定凡十四週 一週二時 約二十八時間〕

- 第一週 第一時 本學年書方學習につきての諸注意と書話……………一〇一
- 第二時 山ザ……………一〇二
- 第二週 第一時 クラ……………一〇三
- 第二時 山ザクラ……………一〇六
- 第三週 第一時 日ノ……………一〇八
- 第二時 マル……………一〇三
- 第四週 第一時 ヒノマル……………一二四



第五週	第二時	タテ	.....	一五五
	第一時	ヨコ	.....	一三〇
	第二時	タテ・ヨコ	.....	一三〇
第六週	第一時	ムシ	.....	一三一
	第二時	ハネ	.....	一三六
第七週	第一時	ムシ・ハネ	.....	一三七
	第二時	村	.....	一三六
第八週	第一時	マツリ	.....	一四二
	第二時	村マツリ	.....	一四四
第九週	第一時	竹	.....	一四四
	第二時	トンボ	.....	一五〇
第十週	第一時	竹トンボ	.....	一五一
	第二時	長	.....	一五二

第十一週	第一時	イヒモ	.....	一五七
	第二時	長イヒモ	.....	一五八
第十二週	第一時	目耳	.....	一五九
	第二時	口手	.....	一六五
第十三週	第一時	目耳・口手	.....	一六六
	第二時	火・水	.....	一六七
第十四週	第一時	土・石	.....	一七三
	第二時	火・水・土・石	.....	一七三

第二學期

〔豫定凡六週 一週二時 約十二時間〕

第一週	第一時	三・四・五	.....	一七六
	第二時	七・八・九	.....	一八三
第二週	第一時	三・四・五・七・八・九	.....	一八四



第二時	オ宮	.....	一八五
第三週 第一時	ニトリキ	.....	一八九
第二時	オ宮ニトリキ	.....	一九〇
第四週 第一時	雨ガフ	.....	一九一
第二時	リ出ス	.....	一九六
第五週 第一時	雨ガフリ出ス	.....	一九六
第二時	タグレ秋	.....	一九九
第六週 第一時	ノ風	.....	二〇三
第二時	タグレ秋ノ風	.....	二〇六

— 補充教材 —

一	ナヘヲウエル	.....	二〇六
二	高イ空白イ雲	.....	二一一

〔乙〕 乙種手本の解説 ..... 二二五

一	山ザクラ	.....	二二六
二	日ノマル	.....	二二八
三	タテヨコ	.....	二三九
四	ムシハネ	.....	二三二
五	村マツリ	.....	二三三
六	竹トンボ	.....	二三四
七	長イヒモ	.....	二三六
八	目耳口手	.....	二三八
九	火水土石	.....	二三〇
十	ナヘヲウエル	.....	二三三
十一	オ宮ニトリキ	.....	二三五



十二	雨ガフリ出ス	二五
十三	夕ゲレ秋ノ風	二六
十四	高イ空白イ雲	二四
十五	三・四・五・七・八・九	二四

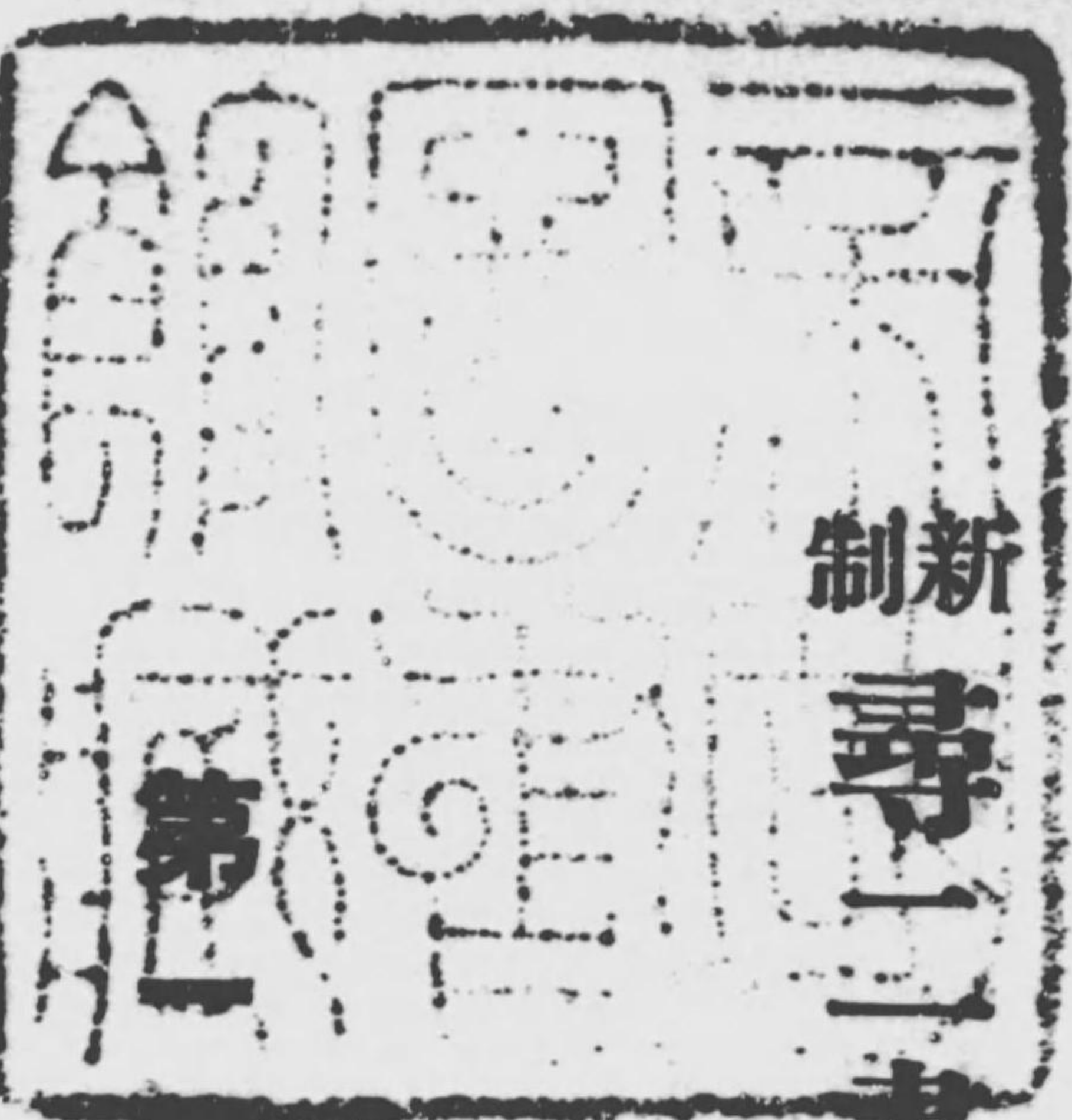
附録

教材配當表	二五
-------	----

—目次終—

新制 尋二 書方の新指導 上

水島修三 著



第一篇 總說

第一章 書方教育の再建設

一、書方教育の歴史と法令の精神

手習は明治以前には庶民教育の中心をなし、讀書算中珠算と共に最も重んぜられ、農村の子弟は之のみ學びし者もあつた。又士族の子弟は算術を輕んじ、漢籍と共に習字を勉強した。即ち書道は古來六藝の一として、上は帝王より下は百姓町人の末に至るまで、萬民舉つて學習せし課程たりしが、明治以後の教育に於ては歐



米の制度に倣ひ、新に各種多様の教科を課する事となつたので、自然従來程書方に力を注ぐ事が出来ぬ様になつた。それでも明治五年の學制には一週四時乃至六時を配當し、明治十四年の教育令でも、本課の成績を向上させようとした色々な苦心が窺はれ、明治二十四年に改正された「教則大綱」にも、従前通り獨立科目として重んぜられ、次の様な規定がある。

習字ハ通常ノ文字ノ書キ方ヲ知ラシメ、運筆ニ習熟セシムルヲ以テ要旨トス。  
尋常小學校ニ於テハ片假名及平假名、近易ナル漢字交リノ短句、通常ノ人字、苗字、物名、地名等ノ日用文字及日用書類ヲ習ハシムベシ。

漢文字ノ書體ハ尋常小學校ニ於テハ楷書若シクハ行書トシ、高等小學校ニ於テハ楷書、行書、草書トス。

習字ヲ授クル際ハ殊ニ姿勢ヲ整ヘ、執筆及運筆ヲ正シクシ、字形ハ整正ヲ尙ビ運筆ハ務メテ速カナラシメンコトヲ要ス。

他ノ教科目ニ於テ文字ヲ書カシムルコトアル時ハ、亦常ニ其字形及字行ヲ正シクセシメンコトヲ要ス。

其後明治三十三年の「小學校令」で、習字科は國語科に併合せられ、書方科と改稱して其一分科となつたが、本科の法令上の精神は、大體前記明治二十四年の規定を以つて解釋してよいと思ふ。

## 二、時代思潮と書道の盛衰

處が實際には書方教育は明治以來年と共に衰微に赴き、殊に近年ペン、鉛筆等の輕便な硬筆が普及せし結果は、毛筆書方を一層厄介視する様になり、且世を擧げて歐米風の偏知教育に走りし結果は、情操陶冶を重んずる在來の書方學習を輕視する様になつた。

然し其内に時勢は變つた。近時時局の影響による民族意識の擡頭と、國家觀念の旺盛とは、國粹文化に目覺めて日本精神の發露たる書道尊重の傾向を示し、又寫眞及印刷術の發達によりて、一般人士も古來の名蹟に接する機會を得たので、これに刺激されて興味を起す様になつた。且現代の焦心不安な物質文明に對し、精神の安定を得んとする修養上の見地から、社會一般に書道の必要と其價値を認識する様になり、最近頃に勃興の機運に際會した。



### 三、書方教育再建設の必要

其爲學校教育に於ても書方科振興の必要を認め、輿論の趨く處遂に書方手本の改訂となつたが、時代は低級なものでは満足出来なくなつた。吾々は晉唐奈良平安への復歸により、更に一段の研究を爲し、書方教育の再建設に着手せねばならぬ。即ち從來の情眼を破つて書道の本質的研究に着手し、手本文字の研究に就きても其據りて來る處を尋ね、更に深く精査し練磨し、斯道に對する素養と見識とを啓培せねばならぬ。尙教授の方法に就ても、十年一日の如き臨書一點張を改め、之が根本的研究に着手し、來るべき書道の復興に小國民をして參畫せしめねばならぬ。

## 第二章 國定書方手本の變遷

多年翹望せられてゐた國定書方手本の改正は漸く其緒に着き、鈴木翠軒高塚竹堂の兩氏に依りて尋一用甲乙二種の手本が揮毫せられ、高等科用には更に比田井小琴女子の手になれるものも出來た。現行の國語書キ方手本が創めて發行されたのは明治三十七年の事で、長三州氏の高弟日高秩父氏が文部省の委囑により唐

の四大家の一人顔真卿の筆法にて揮毫されたのである。其後明治四十三年には卷菱湖流の香川松石氏が乙種の手本を書き、又同派村田海石氏の高弟西脇吳石氏も大正六年乙種手本を書かれた。然し甲種手本は完成を見ぬ間に、日高氏が歿せられたので、同流の山口半峯氏が尋常五年以上を書かれたのである。

## 第三章 書道の興隆と書方教育

斯様な順序にて出來た國定手本も、其後二三十年を経過せし今日では、時代は移り書道界の趨勢は變つて、數年前から改訂手本の出現を要求する叫が強くなつた。

### 一、科學の進歩が書に及ぼしたる影響

即ち近時寫眞の普及と印刷の發達とは書道界にも活氣を呈し、全集に講座に雜誌に、古來の眞蹟、碑版、法帖類を滿載して普及せしめ、千古の名蹟傑作を極めて廉價に社會に送り出した爲に、一般の書道熱を翻り頓に勃興の機運に際會したのである。之は書道興隆の表面的な觀察であるが、裏面には更に深き理由のある事が察せられる。



## 二、民族精神の振興と書道

近時殊に國民意識が熾烈となり、國家觀念が旺盛となりし爲に、我傳統の醇風良俗を保持したいといふ念が一般に強くなつた。書道は實に其傳來以來千數百年間、我民族の好伴路として常に友となり師となりて、國民精神を培ひ育て、來たのである。されば書道の尊重は國民精神宣揚の一形式にして、西歐文化の滿喫に飽き日本教育建設意識の盛なる今日、我民族本來の眞面目たる日本的のものに立歸り、外交は勿論學問上に於ても、自主獨立其使命に邁進するの時、書道の興隆する事は勿論當然の事と信する者である。

## 三、物質文明と書道

更に明治以來物質文明の攝取に吸々たりし結果は黄金萬能の時代を作り、總てを功利的に打算して精神的方面の價値を没却する様になつた。其爲人々は純美なる精神生活を離れて物質生活の上のみ立つ様になつたので、世を擧げて焦心不安の渦中に投ぜられ、徒に末梢神經のみ尖り、此儘に推移するならば民心の破綻を來すかと思はるゝ程に息詰つて來た。そこで心ある人々は先づ精神の落着を

取り戻して其安定を計り、この逼迫せる現状を打開するには手習が最も良い事に氣付き、期せずして一般書道の隆盛を來す事となつた様である。即ち書方は物質文明の弊を救ふ安全瓣として價値ある事が認められたのである。

## 四、書の實用價値

其他實用上からも書に心得ある者は、其生涯に於てどれだけ利益だか幸福だか分らない。實用書としてのペン、鉛筆も、書道の素養があれば其揮灑は意のままであり、又中には毛筆でなくてはならぬ場合もある。例へば一片の履歴書や手紙によりて、其人の運命を左右するゝが如き事無きにしも非ず、學校教育中に於ける書方教育の不備を、實社會に出たから始めて痛感し、卒業後改めて習字を始める者が多くなつた。斯様な次第で社會一般が其必要を認識した爲、倉然として勃興の機運に向つたのである。

## 五、書方教育と情操陶冶

古來書道を精神修養の一手段として重んぜし事はあまりにも有名である。上は一天萬乘の大君より下は庶民に至るまで、習字を實用以外に魂の糧として尊び



來れり。殊に寫經とて佛典を淨書せしものが、今日尙多數に現存してゐる。古くは奈良・平安の昔から、白紙に罫を引きて墨色眼もあやに書き記され、或は紺紙に金泥銀泥等にて淨書されてあるが、今猶燦然として輝けるを見ては、當時の人々が如何に書を修養として尊びしかと察せられる。

これは現代の兒童に於ても同様で、彼等が白紙に向つて筆を下す時に如何に緊張してゐるか、又紙上に展開されゆく墨痕に對し、如何に感激し如何に興味を感じてゐるかは、書方教育に従事せる者の常に目撃せる處である。この瞬間こそ彼等の注意力が最も集中せし時で、一度が勝負の書方學習は、實に兒童の學習作業中に於ける意志の力を練る最もよき場面であるといへるであらう。

かくして書方教育の持つ意義、即ち實用的、功利的方面以外に、意志の陶冶、美觀の養成等、情操教育上の重要性が確認されねばならぬ。

#### 六、書道の勃興と書方手本

最近書道が復興せし結果、一般人士の技倆を向上させたのみでなく、其鑑識力をも養ひ、高級なる古法帖によりて啓發された眼は、低級なるものでは到底満足出來

なくなつた。即ち晉唐の劇蹟に接しては純古にして氣格高きに打たれ、奈良・平安の傑作を觀ては清麗溫雅に感じ、かゝる書道藝術の幽幻に啓培されし人々は、書方學習第一の要件たる手本の善美を冀求し、如何にもして書方手本の改正を實現し、たく感じたのである。

### 第四章 國定書方手本の根本義

#### 一、國定手本の具備すべき要件

さて國定書方手本の理想として、「かくあるべきもの」と思考される條件は、

第一、用筆法が正しく且明瞭で、習ひ易いもの  
 第二、書風が純正溫雅で品位あり、之を學習する事によりて精神の修養が出来るもの  
 第三、骨力あり、且運筆速くして實用書に都合よきもの

等である。

#### 二、書方手本の基準となるべき諸大家



今これを古人によりて例證せば、漢字では晉の王羲之、隋の智永、唐の褚遂良、歐陽詢、虞世南等を基準とし、平假名では平安朝の藤原行成、紀貫之等を骨子とせねばなるまい。即ち私の考を卒直に申述べると、晉唐奈良平安への復歸であり、古法への還元であるとも云へる。これは一寸考へると時代錯誤で、新時代に處する所以ではあるまいとも思はれるが、實は然らずしてこれこそ後世の俗書を正道に建直す事となり、書道振興の唯一の大道である。

### 三、學書の常道

總て書道に限らず繪畫彫刻等の藝術的のものや、倫理道德哲學等の規範的のものは共通的に、不世出の偉人の業績が人爲を超脱して、神人に通ずる不滅の光を放つてゐる。書に於ても書聖王羲之を始め唐以前の先覺者や、我朝に在りても空海を始とし、當時の大手腕家の傑作は、後世人の容易に企及すべからざる境地を開拓してゐるので、我々は先づ其偉業を觀て克明に研究調査し、先人の美點や長所を充分に攝取する處から學書の第一步を踏み出さねばならぬ。此等は何れも滾々として盡きぬ泉の如きもので、汲めば汲む程後から後からと清新なる情趣が湧出し、

自己の境地の進展につれ更に眼界の展開するのを感じるものである。

されば學書の方法は、模倣より入りて漸次に自己を形成し、最後に創造の天地に迄到達するのが常道である。

## 第五章 新手本の研究

### 一、筆者と其書風

此度發行された書方手本甲種の筆者は、著者の先師丹羽海鶴翁の高弟にして常に先輩とし長友として敬重せる鈴木翠軒氏といはれてゐるが、氏は唐の四大家（虞世南、歐陽詢、褚遂良、顏真卿）や、我朝の名手僧空海、藤原佐理、嵯峨天皇等の書風を深く研究され、高邁なる抱負を持ち清新にして雅健なる書風は、新興書道界の偉才として重きを爲す人で、現に書方檢定委員である。

乙種手本の筆者といはれてゐる高塚竹堂氏は、現代假名書道界の重鎮にして、平安朝の藤原行成、紀貫之等の優麗溫雅なる上代假名の研究家として、早くより一家を爲せる大家である。



尙高等科用の第二種手本の筆者比田井小琴女史は、現代書道界の權威比田井天來翁の令夫人にして、故阪正臣翁に師事せられて書と歌とを學ばれ、古筆の研究に没頭されて草假名に造詣深く、早くより女流の第一人者として令名高き人である。

## 二、用筆法と結構法

書方手本の文字は従來とても同様ではあるが、此度のものは特に吾々が平素考へてゐる様に古法を基調として揮毫されてある。而して學習の第一目標は用筆法の研究である。改定手本は大體唐朝の規格を經とし和様の溫雅を緯として、用筆は平易を旨とし簡明に直截に書かれてある。

これに就きては卷頭口繪に出てゐる甲乙兩手本の筆者の用筆法を示す基本點畫を御覽願ひたい。

尙間架結構に就きても代表的古法帖に準據して、整正穩健なる形態に揮毫されてある。然も兒童の心理に合する様、天真爛漫にして元氣のよい字を書くべく非常に努力されたのである。

## 三、編纂の趣意

編纂上に就きても兼々私どもの考へ且主張してゐた點が大體達成せられたので嬉しく思つてゐるが、此度尋一用に續き尋二が發行されるに當り、我校初等教育研究會より例により其解説書を出すに當り、文部省圖書監修官各務虎雄氏が編纂の趣旨に付寄せられた談話は誠に肯綮を得てゐるので、次に引用して御參考に供したい。

小學書方手本の第二學年用がこの四月から實施されることになつたのであるが、従來のものに比して著しく相違した點があり、實際教授に當られる側で疑念の起るおそれもあるから、該手本の編纂に携つた者として意のあるところを略説してみようと思ふ。

第二學年用上は、第一學年から第六學年に至る小學書方手本の一部として編纂したものであるから、編纂に關する根本の精神は、第一學年に就いて述べたものと變つてはゐない。(拙著尋一書方の新指導一二頁—一九頁参照) 随つて茲にさうした關係を喋々する必要はないのであるけれども、便宜上さうした方面にも觸れながら、叙述を進めてゆくこととする。



(一)分量

分量といふのは、枚数と字数とをふくめたものゝつもりである。まづ枚数からいふと、第一學年用と同じく十五枚、字数からいふとこれも同様で、四字教材九枚、六字教材六枚、合計七十二字である。

これは従來の手本が六字教材ばかり十人枚あつたのに較べて著しい減少で、割合をとつて見ると従前のものの三分の二しかないことになる。かうしたことは、分量をなるべく少くして、一字々々をなるべく確實に練習することを可能ならしめようとする根本方針に基づいたものである。

たゞ第一學年用が従來のものに比べて漸く一割の字数を減じたのみであつたのを、第二學年用に至つて三割以上も減じたのは、比率からいふと不審も存しようけれども、二年の前期用としては、なほこの程度が適當であると信じたからである。

(二)章句

教材としての章句は、第一學年に引續いてなるべく兒童の環境に近く、且比較的興味のある、さうしてまた或まとまつた内容を有するものたらしめることを、原則

として選擇したつもりである。尤もこれには各種の制限があるので、この原則のみにより得ない場合もなかつたわけではない。が大體に於てこの原則は、具體的に實現されたことと信じてゐる。

たゞ茲に一應の説明を加へておきたいのは、小學國語讀本卷三の教材との關係である。恐らく新手本の章句を見て、これが讀本教材とどの程度に脈絡があるかに疑念を持たない人はあるまいと思ふ。事實新手本の章句は、讀本卷三の教材とは直接の連絡は有してゐない。見本が世間に出た時に、或人は私に向つて、今度の手本は多分「春が來た」「鳥が鳴く」といふやうな教材が巻頭に載るのだらうと思つてゐたのが、「山ザクラ」「日ノマル」などで始められたため、全然豫期に反して聊か面くらつたといふやうなことを語つたことがある。讀本卷三の教師との連絡からいへば、なるほど「春が來た」「鳥が鳴く」といつた調子で始まるだらうと想像するのも尤もな次第であるにちがひない。けれども書方手本が、どこまでも讀本の教材内容に即して、編纂されなければならぬ理由は發見されない筈である。手本は手本として、独自の立場から教材を選擇配列するのが、寧ろ書方科の機能を活



用するに都合のよい場合が多いのではないか。

また或人は、今度の手本は、一年の讀本教材に即せしめようとしたのではないかと尋ねたことがある。「山サクラ」「日ノマル」などと並べたところからすれば、かうした質問の出るのも理由のない事ではないであらう。殊に全巻が、假名は専ら片假名教材になつてゐるのであるから猶更のことと思はれる。しかし讀本卷三の教材との關係に就いて述べたことは、この卷一教材との關係にも當てはめ得るもので、繰返していふやうであるが、新手本は讀本の一年教材とも關係なしに章句を選んだのである。

例へば卷頭第一の「山サクラ」は、陽春四月の晴蕩たる四邊の風物を代表し、日出づる國の象徴のやうにも見られてゐる櫻、就中全國到る處の山野に咲亂れる山櫻を教材とすることによつて、兒童の朗らかなのびやかな、然も希望に輝く心情に觸れ、且その心情をこの四文字によつて象徴させようとして撰んだものである。讀本卷一の「サイタ、サイタ、サクラガサイタ。」と採擇の事由を殆ど同じうするものである。さればといつてこの故に、新手本が讀本卷一の教材に依據したとする論

據にはならない。要するに書方は書方である。

(三) 假名

新手本の假名は片假名を以てした。この點は從來の第二學年用上と大いに異なるところである。尤も尋常小學國語書キ方手本と並行して實施された、尋常小學書キ方手本は第二學年用上もなほ片假名を以て全巻を貫いてゐるのであるから、それに比べれば今度の手本必ずしも新しい試みといふことはできない。ただこの手本は一般に近來使用されてゐなかつたので、世間にはこの事もあまり多く知られてゐなかつたまでである。

そこで新手本を片假名で編纂した理由がどこにあるかといふことであるが、これは一言では盡くせない。根本になる理由は、一年用と二年用上とを以て、漢字楷書の基礎練習に資しようとしたことである。その目的のためには片假名教材が最も有益である。

第二の理由は、平假名を讀本に於てすつかり習得した後に、書學の系統を逐ふて易より難に及ぶやうに配列するのを至當と考へたことである。もとよりあらゆる



る平假名がこの理想通りに配列されることは、現實の問題としては殆どあり得ないであらうが、成るべくはさうした系統的な配列を試してみようと欲してゐるのである。この目的を達成するためには、二學年の後期の手本から平假名を提出するのが便宜である。

第三の理由は、片假名そのものは實用といふ點からいへば、將來あまり有用のものでないかも知れないけれども、片假名が假名の一種として存在する以上は、さうして多少に係らずともかく實用に供せられてゐる以上は、片假名そのものにも相當習熟せしめる必要がある。一學年用で授けた片假名は、その意味からいふとなほ十分ではない。これを引續いて課する事によつて、一學年用で及ばなかつたものを補はうとしたのである。

第四の理由は、平假名はこの頃の兒童の能力から見て、少からぬ困難を伴ふと考へたことである。十月から三月まで、僅か半年位毛筆を持つただけの者に、曲線美をたつとぶ平假名を授けても、徒に勞多くして効少き結果を招來するに過ぎないと思ふ。

かうした理由を主なるものとして、今度の手本には片假名教材を配當したのである。實際の取扱としては、一年は一年相應に、二年は二年相應に書くことを得しめるやうに指導すれば、教材の重複も無意義に終るとは考へない。

けれどもこれを一方から見ると、讀本が平假名の學習に全力を注いでゐる時期に、書方が平假名に無關心であるのは、同じ國定教科書の態度として不當だといふこともいへるであらう。事實私に向つてさういふ批難を加へた人もあるのである。けれども物は考へやうである。眞に書方としての平假名を考へる時は、この時期に平假名を授けないのが、むしろ平假名を尊重する所以でなければならぬ。讀本の平假名は主として目に訴へ、記憶に訴へようとするものである。書くことを本體とする手本は、讀本に縛られて効果のあまり多からぬことの豫想されるやうな道を歩まなければならぬ理由はない筈である。

(四) 漢 字

新手本の漢字は、第一學年用の方針を踏襲して字體を定めた。即ち原則として讀本に提出した字體に依ることとし、中に例外を設けて時に書寫體の書體を加味



することにしたのである。日・目・耳・風・白の如きがそれである。石も多少讀本の字體と異つたところがあるが、これは殆ど目にはつかないであらう。斯様に手本が讀本と字體の違ふものを時に採用したことに關しては、一年用を出した時とかくの批評を受けたのである。一々紹介する必要はないが、結局讀本と手本とで字體が違つては、兒童の記憶を混亂せしめるから、讀本の字體に揃へよといふ意見と、その反對に、讀本の字體を手本の字體に揃へよといふ意見とがあつたのである。

けれども讀本も手本もさうした點に無關心で編纂したのではない。十分考慮した結果出來たのであるから、僅かな批難があつたからとて、輕々しく變更するわけにはゆかない。殊に手本だけの立場からいへば、書寫體は學年の進むにつれて益多く取入れようとさへ思つてゐるのである。これは昨秋文部省から出した、小學書方手本編纂趣意書にも明言してあるところである。

くたくしく理由を述べるまでもなく、書學の方面からいへば、手本は書寫體に依據して編纂するのが理想である。たゞこれは理想であるが、この理想を小學兒童の書方と結びつけて、如何に實際化すべきかは相當省察を要する問題である。

新手本はかうした問題を考慮しつゝ、編纂したもので、まだ一二年の程度では、一方に讀本との關係もあるから、今の程度のもので我慢するより致し方のない事情にある。

(五) 新 字

第二學年用上に新しく提出した文字は、一學年用に提出しなかつた片假名の残り全部と、漢字若干とである。即ち片假名に於ては、ヨ・ム・ヘ・エ・ニ・キの六字、漢字に於ては、村・竹・長・目・耳・口・手・火・水・土・石・宮・雨・出・夕・秋・風・高・空・白・雲・三・四・五・七・八・九の二十七字、合計三十三字である。

他は何れも一學年用に既に提出したものであつた。尤も、ザ・ボ・グの三字は、一學年用には出てゐないものであるけれども、これは一學年用に出したサ・ホ・クに濁點を施しただけのものであるから、茲には便宜上新字には數へなかつたのである。若しこれを新字に數へるとすれば、二學年用上の新字は、三十六字になるわけである。

そこで、これらの新字を如何に配當したかといふと、實物に就いて見ていたゞけ



ば、一目明瞭なことであるが、第三頁以後の各教材に適宜割當てたのである。第一、二頁に新字を出さなかつたのは、學年の始であるから、既修のものを反覆練習することによつて、書寫能力を一段高めしめ、新教材に入る段階たらしめようとした爲である。

(六)種 類

新手本は小學書方手本編纂の根本方針に従つて、一學年用と同様に甲乙兩種を發行した。書風を異にするほか、それらの教材には異同がないことも一學年用と同じである。随つてこのことに關しては贅言を費す必要を認めないが、これが採用方に關聯する事項に就いては、今尙よく世間に知れてゐないやうに感ぜられる。

元來書方手本は、一種しか發行されない場合はともかく、二種以上發行された時は、その何れを採用するかは各小學校長の意見によつて決定されるものである。けれども、若し小學校令施行規則第五十三條に「又國語書キ方算術理科家事圖畫ノ教科用圖書及小學地理附圖ハ學校長ニ於テ之ヲ兒童ニ使用セシメサルコトヲ

得」とあるのに基づいて、國定の手本を兒童に持たさない場合もあるであらう。といつてもその場合、國定以外の手本を使用せしめてもよいといふことにはならない。例へば國定手本を忌避し、硬筆手本の如きものを使用せしめるやうなことである。

またこれとよく似て、或はこれと深い關係があるやうであるが、毛筆練習を低學年に課さない學校もあるやうである。文部省が毛筆手本を一學年用から發行してゐることは、一學年から毛筆を課するを至當と認めてゐるからである。低學年に毛筆を課することの可否は、文部省に於て決定するもので、各小學校長の權限に屬する事柄ではない。もとより高等師範學校始め、各府縣師範學校では、毛筆を課さないこともあり得る。それらの學校は法規の定めたとおりに従つて、これが可否を研究する責任を有してゐるのであるから、問題は各小學校と自ら別にならなければならぬ。にも係らず、師範學校がそうだからといつて各小學校が、師範學校類似の行爲に出ることは嚴に戒むべきことであらう。

尤も近來書道の振興するにつれて、毛筆練習の必要も相當痛切に感ぜられ出し



てゐるやうであるから、従來の惡風も日ならずして改善されることゝ信ずる。否  
さうした傾向は、昨年あたりから既に十分見え始めてゐるのである。私のいふこ  
とがその傾向の進展に何らかの意味で助けになるならば、幸甚これに越すものは  
ない。

## 第六章 書方指導者としての教養

近時書道の復興に伴ひて、一般に鑑識技術が向上し、殊に書方手本の改定により  
て其韻致を深め程度を高くしたから、之が指導の任に當る者は更に一段の修養を  
要する事となつた。

### 一、書方教育不振の原因

凡そ何れの教科でも教壇に立つ以上は、其科に對して見識を持ち、其教材に對し  
て自信を持つて臨まねばならぬ。若し之を缺けば教師としての權威を失ふと共  
に、嚴密な意味に於ける資格をも缺く事となるので、各學科とも平素から教材の調  
査は勿論、指導方法、學習過程等に就き、充分な研究を積み又準備を怠らない筈であ

るが、其中には著しい差異は無いだらうか。赤裸々に申述べると僅少數の特志家  
を除き、一般には書方科に對し必要な研究が、他教科同様に行はれてゐるかどうか、  
私は之に大なる疑問を抱く者である。

勿論教授者其人の趣味に相違もあり、各科研究の程度に遙庭ある事は認めねば  
ならぬが、國民教育者として全人陶冶の立前からすれば、其差は厚薄の程度にして  
必して等閑に附すなどいふ事は許さるべきでない。即ち書方科には手本がある  
ので書かせさへすればよいから誰でも指導出来ると思ひ、平素から教材に對し研  
究するでも無く、練習するでも無く、教授法を考へるでも無く、甚だしきは骨休めの  
時間位に考へてゐる者がありはしなかつたかといふ事である。若し斯様な者が  
あるとしたら、それは本科に對する態度の不眞面目を物語る事となり、其成績の不  
振は素より國民教育指導者として恥づべき事ではあるまいか。私は一般に従來  
の書方成績が不振であつた原因の一は、斯様な處にあるのでは無かつたかと考へ  
てゐる。

### 二、書方科研究の必要



顧ふに明治以前の舊教育では一般に習字に力を注いだ爲、學問をしたと稱する者は一様に書に對する練磨の功を積み、随つて自信もあつたので、此等の人々は書方の指導に特別の研究を要しなかつたであらうが、明治以後の教育では、書方はホンの其一部分に過ぎなくなり、中等教育、専門教育を卒へた者でも書に對する素養は特殊の者を除き一般に低下して來たので、指導者は豫め相當の準備を要する事となつた。

殊に技能科の性質を多分に持ち、獨特な手腕を要するので、本科に於ては他教科に劣らぬ努力を拂はねば、所期の目的を達成する事は到底望み得ないのである。然し其反面教師の努力が靦面に酬ひられ、熱心にして優秀なる指導者が受持てば、兒童の成績が顯著なる進歩を遂げる事は周知の事實である。斯様な立場からすれば、本科も亦圖畫、手工、唱歌乃至は體操等と同様、特殊な手腕を有する専科教員を以つて當らしめるのが最も有効な方法であるともいへる。

### 三、古法帖の研究

殊に改正手本は書風が古法帖を背景とした高級なものであるから、相當な準備

を怠るならば其指導は困難であらう。従つて手本の文字をよく研究せんとするには、勢其根底を爲す先覺者の傑作を學ばねばならぬ。反面から考へれば、書方手本のみを學んだのでは何時まで經つてもそれ以上にはなれぬ。更に其手本の手本たる古法帖を研究すれば、筆者と兄弟になれるわけで、更に一段の進境を見る事となるのである。尙古來の名蹟を研究すれば、自己の手腕を高めるのみならず、鑑力を養ふ事ともなるから、代表的のものに就いては出来るだけ目を通す様にしたいものである。尙一步進めて書道史の一般や書論や、代表的先哲の逸話等を調べれば、自己の學識を豊富にし、直接間接に教授上裨益する處が大となる。

### 四、學書の方法

世間に食はず嫌ひといふ事があるが、やつてみれば大抵のものは面白くなるものである。ここに字の下手な人があつて習字が嫌ひであるとしても、少し押して勉強すれば其内に上手になり、興味も出て好きになるものである。

人の趣味には色々あるが、習字などは古來士君子の技とされてゐて高尙であり、實用にも役立ち、そして弊害もないから皆さんにお奨めしたい。殊に相手が手本



であるから何時でも出来、又相手の感情を害する様な事のない清い遊びである。學書の方法は先づよい師を選ぶ事だ。そして師の風を會得する迄はあまり傍見をせぬがよい。練習は少し宛でも毎日がよい。これ程堅實で捷徑もない。

師の風を會得したら古法帖に入るがよい。實をいふと私は可なり長く現代人の書は師匠(海鶴先生)以外は見ぬ事にしてゐた。そして支那なら唐以前、日本なら平安朝のものばかり觀てゐた。其爲現代にどんな書家が居るのか一向知らないで過した。これの善悪は別として私の實際はそうであつた。

古法帖に興味が出るとうれしめたものだ。際限なく高く深いから、一生涯の仕事となり楽しみとなる。丁度高い山に登る様なもので、自己の手腕が進めば同時に鑑識力が高くなつて眼界が廣くなる。千古の傑作を見ても始めは一向上手に見えぬが、自分の力が進むにつれだん／＼其妙味が分つて来る。

練習は用筆法の研究から始めたい。そしてよく習ふ事、よく觀る事、よく聽く事が上達の秘訣である。

手本を習ふにも始は自己を空うしてかゝらねばならぬが、或程度迄進めば自己

の信念で押通してよい。然しこゝまで来るのは容易ではない。然しこの邊まで來たら書程面白いものはなくなるだらう。

目と手と耳の根底を養ふ方法として書道史が必要であるから第七章に略述した次第である。

### 五、手本とすべき代表的法帖

楷書 孟法師碑 褚遂良書

九成宮碑 歐陽詢書

皇甫君碑 同

孔子廟堂碑 虞世南書

行書 蘭亭序 王羲之書 褚遂良臨書

集字聖教序 王羲之書

草書 寶墨軒千字本 智永書

書譜 孫過庭書

十七帖 王羲之書 等



## 第七章 書道史概説

### 第一節 支那書道史

#### 一、太古時代

世界最古の文明が發祥した支那黄河の流域には、今から約五千年前、漢族が西北から移住して苗族を驅逐し、土着して次第に發展した。この時最も勢力あり徳望ありしものが天子となつた。即三皇（伏羲、神農、黃帝）五帝（少昊、顓頊、帝嚳、唐虞、虞舜）である。

この頃黃帝の史官蒼頡は神明に通じ、仰いで星辰を觀俯して龜文、鳥跡の象を察し、博く衆美を采つて始めて文字を作つたといふ。これが古文である。此時天粟を雨ふらし、鬼夜哭すといつて大變であつた事が想像される。

古文は漆にて竹簡に書かれたから、其狀おたまじやくしに似てゐるので、文字の事を蝌蚪、或は鳥跡ともいはれ、其後千數百年間周の宣王の頃まで行はれたが、現存

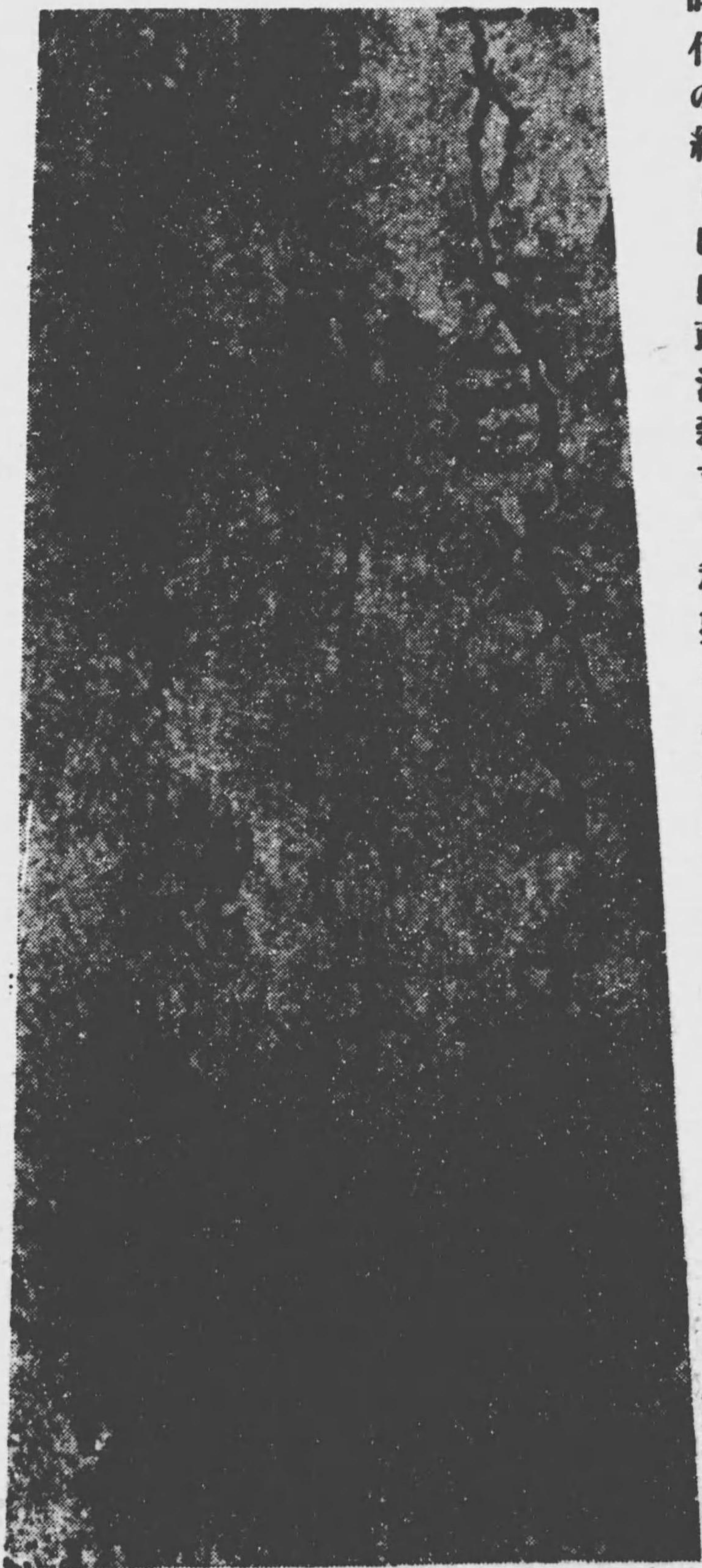
せるものは無い。

尙後人が文字成立の方法を研究して、象形指事、形勢、會意、轉注、假借の六義（一名六書）を説明してゐる。

#### 二、夏、殷、周時代

此時代の終りには政治、教育も稍整ひ、小學にては日用の事を授け、大學にては已

(文古) 文甲龜





を修め人を治める道を教へ、禮・樂・射・御・書の六藝を授けたといはれてゐる。

この頃のトに用ひられた文字が龜甲獸骨文として、近頃殷の古都河南省から澤山發掘された。

龜版文に次いでは鐘鼎等に殘る古銅器の銘が古い。これらも追々土中から發見されてゐる。

周の宣王の時(約二千七百年前)大史の籒ソウが古文を損益して大篆十五篇を著した。今北京の孔子廟に在る石鼓は彼の書といはれてゐる。

(篆大)文鼓石



### 三、秦時代

周亡びて秦起り始皇帝天下を統一するに及び、書道の上にも大變化を來した。即丞相李斯は大篆を省略して小篆を作り、始皇が名山大川に巡遊せし紀念碑に書した。其中秦山石碑は現存してゐる。

(篆小)碑石山秦



此頃程遑なる者罪を得て獄中に在りしが、此十年間に大小篆を改造して書寫に便なる隷書三千字を作りて上つた。始皇帝大いに喜び獄中の徒隸(小役人)に用ひさせた。

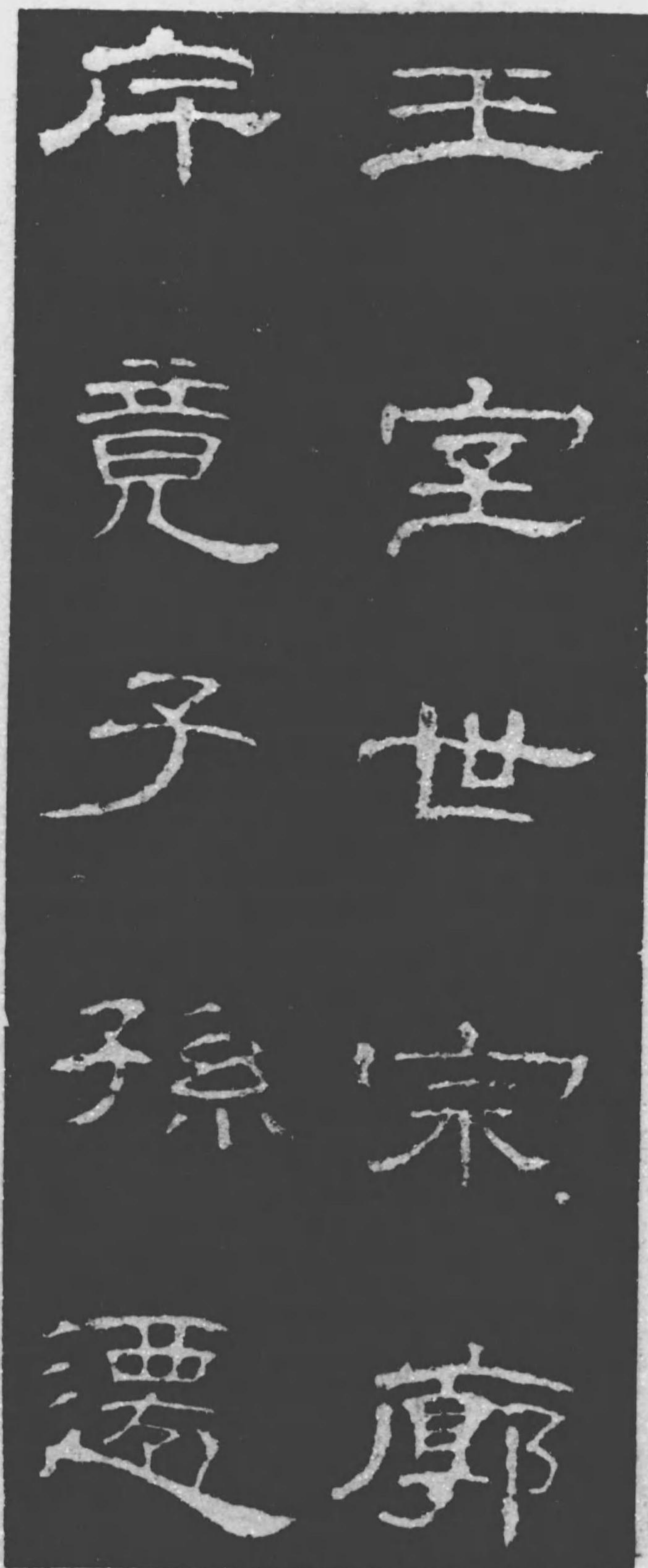


又王次仲は草書の源たる八分を創作したといはれてゐるが共に現存してゐない。秦は僅十五年にして滅んだけれども、書道史上には一新紀元を劃した大切な時代である。

#### 四、漢時代

漢時代とは西漢(前漢)東漢(後漢)を通じての四百二十六年間で、隸書の全盛時

(書隸)碑全曹



代である。殊に後漢二百年は建碑盛にして現存のものでも百に餘り、中でも石門頌乙瑛碑、禮器碑、孔宙碑、史晨碑、西狹頌、曹全碑、張遷碑等は代表的のものである。

この頃から字形が現代の楷書に著しく接近して來た。

又前漢の元帝の世に史游が速書に便な章草を案出した。この章草に巧な者に後漢の張芝があるが、現代の草書は張芝から出てゐるといはれてゐる。



書芝張



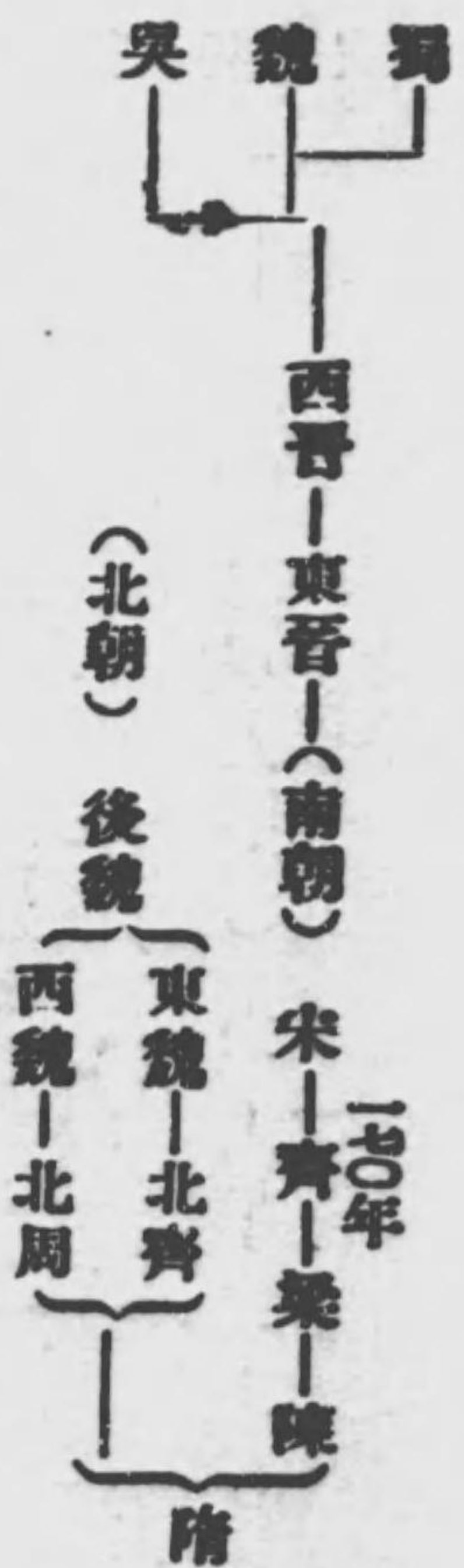
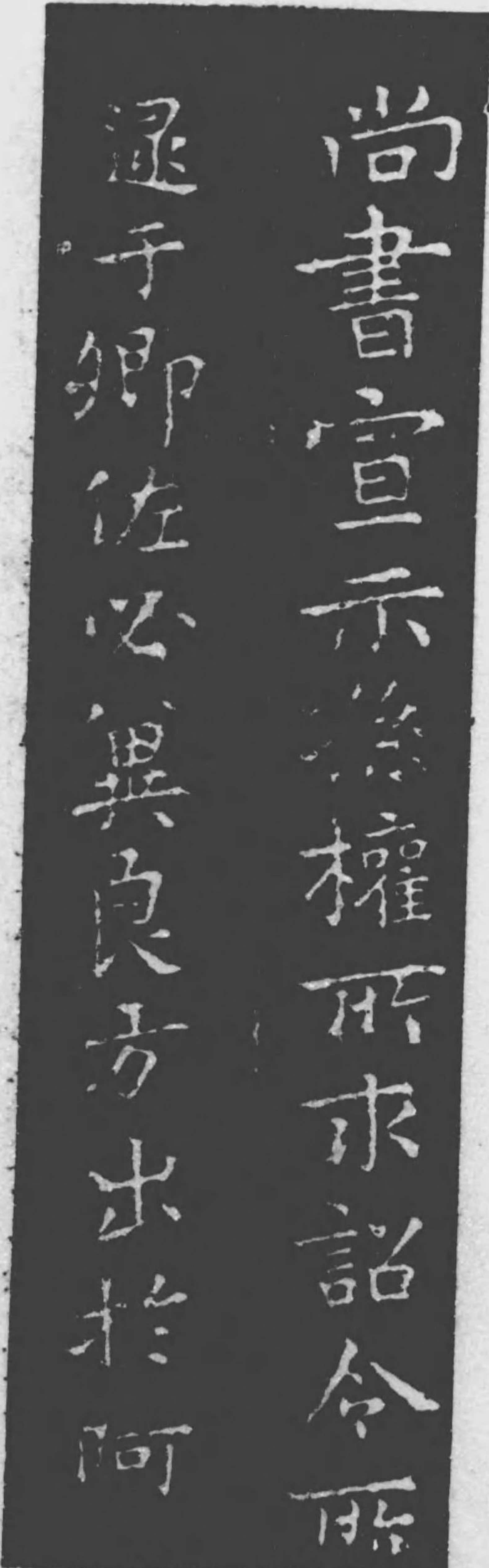


### 五、三國及六朝時代

この時代は戦亂絶えぬ時代であつたが、其間にありて獨り書道は異常な發達をなし、現代の楷・行草が大成した時代である。

先づ第一に擧ぐべきは魏の鍾繇である。其書は章程書といはれ、宣示帖、虞季直表等は、後世覆刻に覆刻を重ねたので、どの程度迄彼の眞面目を發揮してゐるか不明なれども、兎に角品位と情趣とありて楷書の基を爲すものである。

鍾繇書 宣示表



漢末蔡邕に發した書法は鍾繇・衛瓘・索靖・衛夫人等の大家を経て、この時代の東晉になると書聖王羲之が現れた。當時書は帝王・士大夫必修の學問であつたので、朝野擧げて隆盛に赴き、殊に南朝に於ては優雅にして秀麗なる書道藝術を展開し、其品位其妙趣實に古今獨歩の觀がある。

王羲之の子王獻之も父に繼ぎて書を善くし、併稱して二王といふ。其他王氏の一族には多數の名手を輩出した。此等の人々が書いたのは多く行・草書にして、法帖となりて傳來してゐる。

蘭亭序 晉王羲之書 永和九年 皇紀一〇一三年 仁德帝の頃

永和九年暮春の初(三月三日)、王羲之は當時の文人墨客四十餘人と、會稽山陰の蘭亭に會して、清遊を試み、曲水の宴を聚り、詩を吟じて、其序を羲之自ら書いた。山水の佳境に在りし爲か、興湧いて、神品と稱せらるゝ傑作が出来た。右軍も生涯これ以上のものが書けなかつたので、自ら極愛し子孫に傳へ



だが、七世の孫智永を経て、其弟子辨才之を梁上に秘藏せしを、唐太宗垂藻三尺、芭蕉を遣はし謀を以て手に入れた。太宗常に座右に置いて愛玩し、死に臨み命じて昭陵に共葬せしめた。今あるものは當時の大家歐陽詢、褚遂良等が臨摹せしものにして、開皇本、定武本、張金界奴本、神龍半印本、顧井本、賜瀋姫本、珍袖本等數十本あり、行書の代表的劇蹟である。

王羲之蘭亭序

永和九年歲在癸丑暮  
于會稽山陰之蘭亭  
也羣賢畢至少長咸

王羲之書集字聖教序

唐の僧懷仁が、則天武皇の命により、二十年の歲月を費して、王羲之の行書を其尺牘中より字せしものにして、右軍の神彩を窺ふに足るものである。只集字せし爲連續に不自然の處あれども、蘭亭と共に、行書の最高級のものであらう。

王羲之書集字聖教序

一 空 有 之 論 或 買  
非 大 小 之 乘 亦 以  
替 有 玄 奘 法 師 者



王羲之書 九月十七日帖

四〇

九月十七日 羲之報皇用  
孔侍中 信書 志必至不  
有領軍 疾後心

之は唐の頃羲之の眞蹟の上に紙を當て、笹字にとり、中に墨を入れた所謂雙鉤  
填墨で精妙なる書聖の用筆が實によく現れてゐる。即眞筆が一枚も現存しない  
今日では、最高級の羲之の手本である。日下部鳴鶴翁は硝子に入れて書齋に掲げ、  
日夕觀賞して居られたといふ事である。

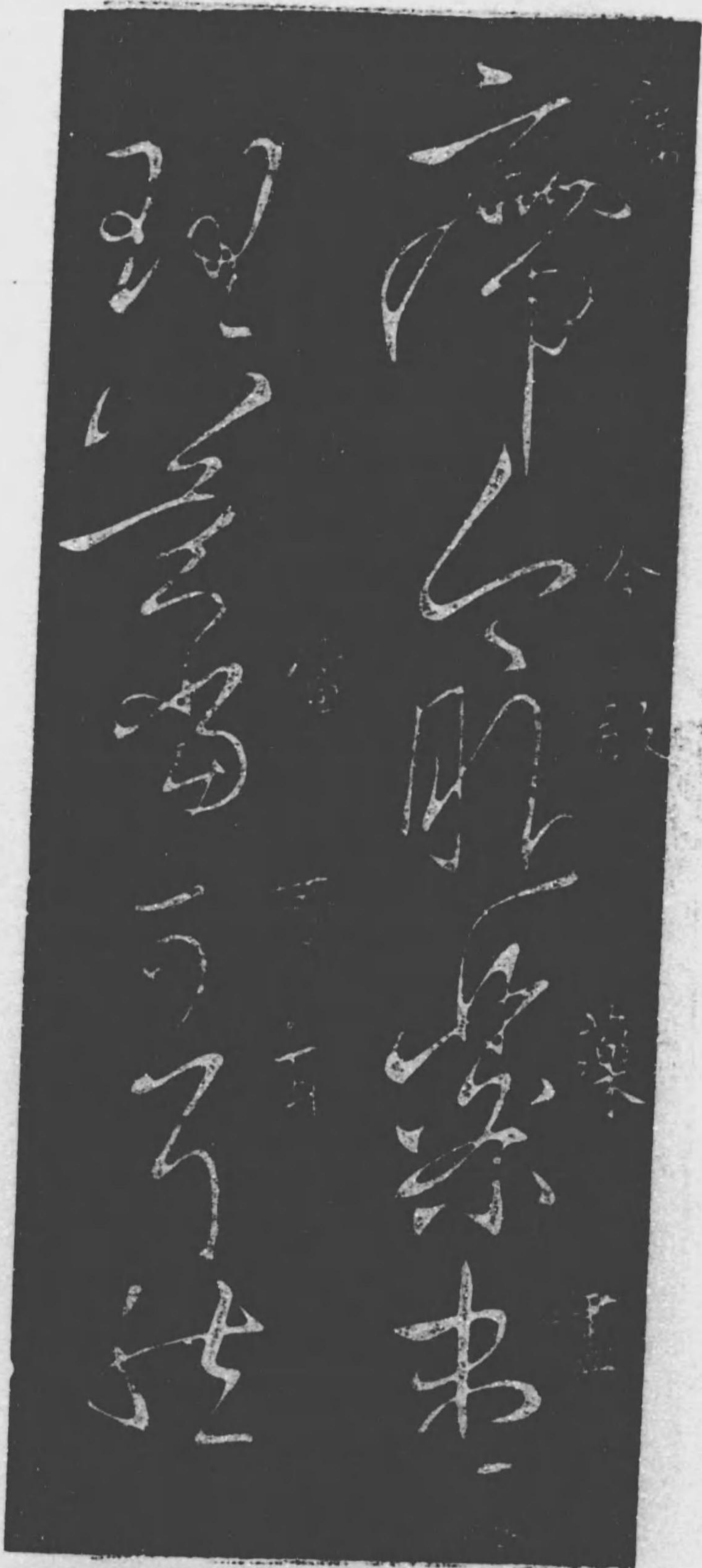
王羲之書 樂毅論

樂毅論は羲之が王家の書法を子献之に示す爲に書いた細楷で、筆力の盛なものである。我朝光明皇后が  
これを臨書遊ばされてゐるが、元本の面影の確如たる傑作である。

夫前齊以明燕王之 此其  
固城而害不加於百姓 此仁心  
是固不謀其功 樂毅不謀



王獻之書



此外王羲之のもではの細楷の東方朔畫贊・黃庭經・行草に興福寺斷碑・喪亂帖・奉橘帖・十七帖等が有名であり、王獻之のものでは細楷の洛神賦十三行・行草の辭中令帖・東山帖・地黃湯帖等が著名である。

二王以外では王珣の伯遠帖など傑作である。

北朝に於ては殺伐剛健の氣象をうけて、六朝風と稱する峻拔毫宕の書が尊ばれた。

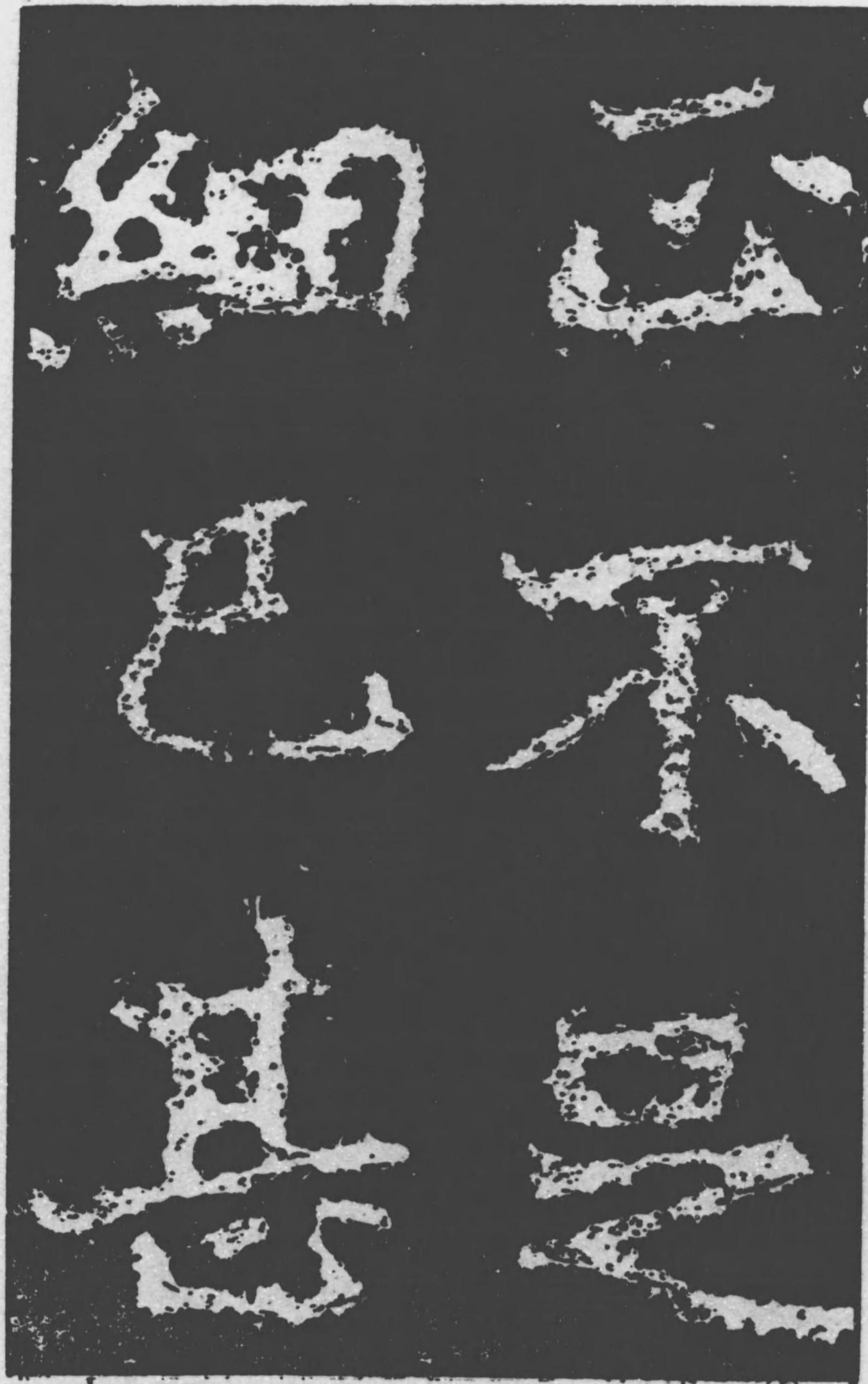
當時佛教の隆盛につれ、造像・刻經等流行したが、其頃の遺物が多數現存してゐる。其代表的のものに、北魏の鄭道昭が書いた鄭義下碑・雲峯山・天柱山等の摩崖碑（巖石に碑文を刻せしもの）、四十餘種を始め、牛橛造像記（約一四四〇年前）、張猛龍碑（約一四一〇年前）、高貞碑、張玄墓誌、敬使君碑、根法師碑、菩薩處胎經（欽明帝の頃）等がある。

六朝風とは此時代の書風をさすので、明治初年清國の金石學者楊守敬によりて傳へられ、日下部鳴鶴、嚴谷一六等の盛に提唱する處となり、當時迄我國の朝野を風靡せし軟弱なるお家流を一掃して、峻拔勁健なる唐様の時代を招來した。所謂鳴鶴流の根源は前記の北朝諸碑に發してゐるのである。





牛嶽造像記

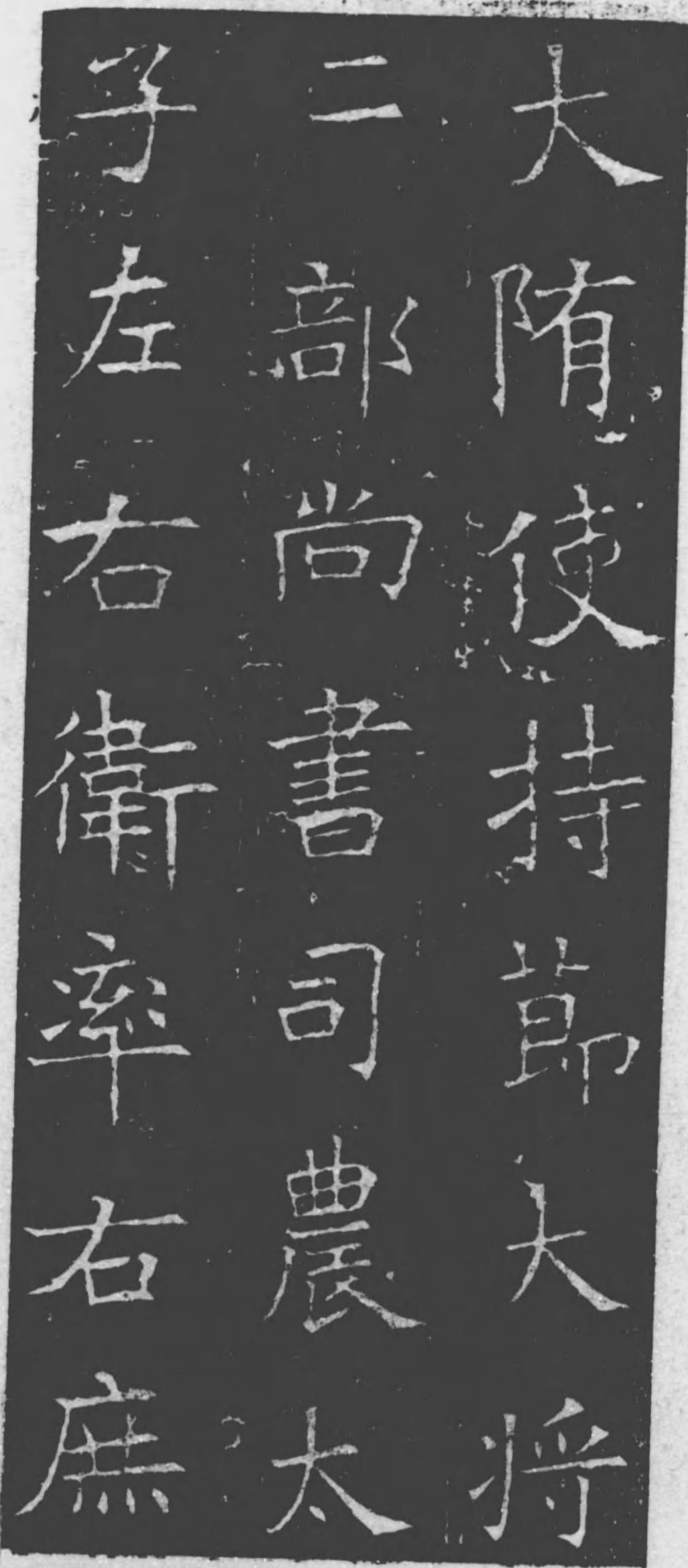




六、隋唐時代

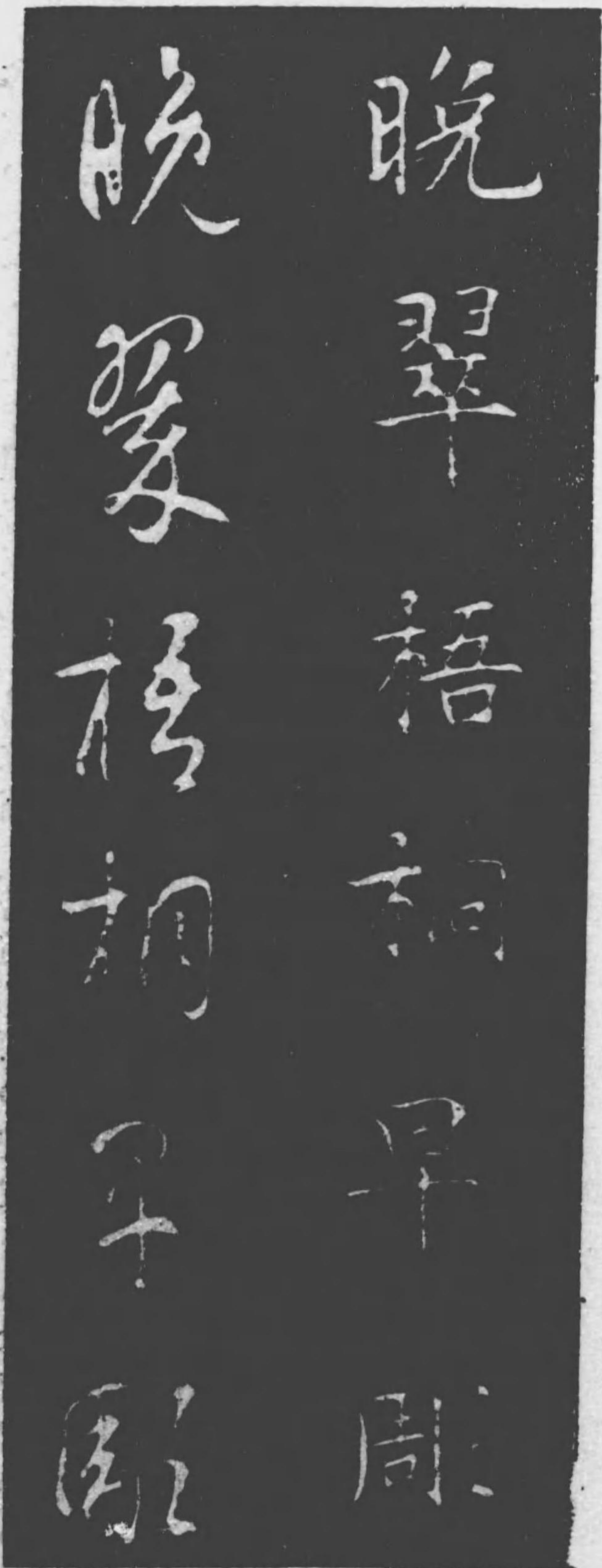
隋は三代三十七年で滅んだので偉大な人物は現れなかつたが、其間に六朝風の峻拔にして雄健なる北方刻石の楷書と、南方穩健にして秀麗な法帖の行草書とを統一し、整正雅健なる書風を形成した。即碑では龍藏寺碑、蘇孝慈墓誌銘、大侯卿夫人墓誌、啓法寺碑、寧馨碑等が著名である。

蘇孝慈墓誌



隋時代の代表的名手は王羲之七世の孫の智永である。彼は江南永欣寺に住し、永禪師と號した。智永樓上に籠りて手習する事三十年、秃筆が大竹籠に五杯も出来た。この間に真草千字文を八百本寫し、江東の諸寺へ一本宛施したといふ事である。業成りて樓を下るや書を求める者門前に市を爲し、穴を穿つて闖入するので鐵で塞いだから、時人之を鐵門限といつた。其書は羲之の美韻を得て品位高く、溫和な書風である。

智永真草千字文





唐は書道の黄金時代で規格正しく品位高く書道藝術の完成された時である。太宗は英邁にして房玄齡等の賢臣を用ひよく唐室二百九十年の基礎を固め政治・學問・藝術・宗教何れも未曾有の發達を遂げた。書も堪能で温泉銘・晉祠銘等の名作を残されてゐるが、生來王羲之の書を好み、天下に令して書畫の眞蹟三千紙を得たといふ程である。

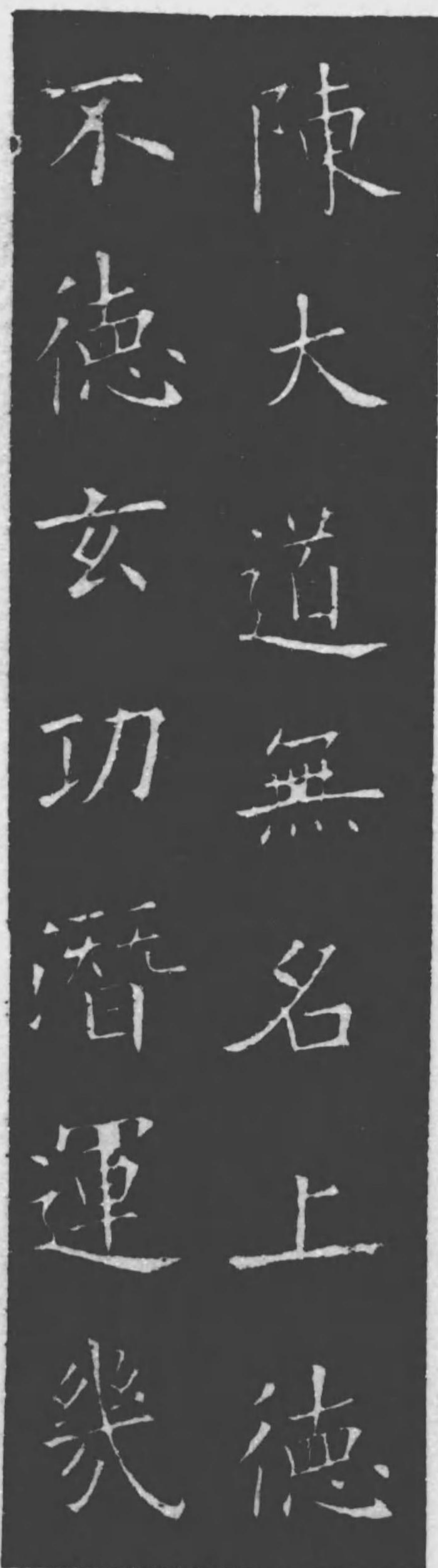
この明君の下には幾多の天才が孚くまれた。太宗の師の虞世南は書を智永に學び、典麗逾媚な書風を爲し、一代の傑作孔子廟堂碑は品位を以つて唐代に君臨し虞世南書 孔子廟堂碑



てゐる。太宗嘗て曰く「世南に五絶あり。一に德行、二に忠直、三に博學、四に文辭、五に書簡」と、以て其爲人を知る事が出来る。

歐陽詢は羲之の骨力を得峻拔な事は六朝の餘韻を帯びてゐるが、整然として規格正しき事は流石楷法の極則と稱せられるだけある。正書最も工にして、結體の作り方は彼の右に出づる者はあるまい。九成宮醴泉銘、皇甫府君碑、化度寺碑、虞恭公碑等の劇作を残し、行草に卜商帖、夢奠帖、草書千字文等がある。嘗て出遊中索靖の碑を見、傍に三日も宿したといふ逸話のある程書には熱心であつた。

歐陽詢書 九成宮醴泉銘





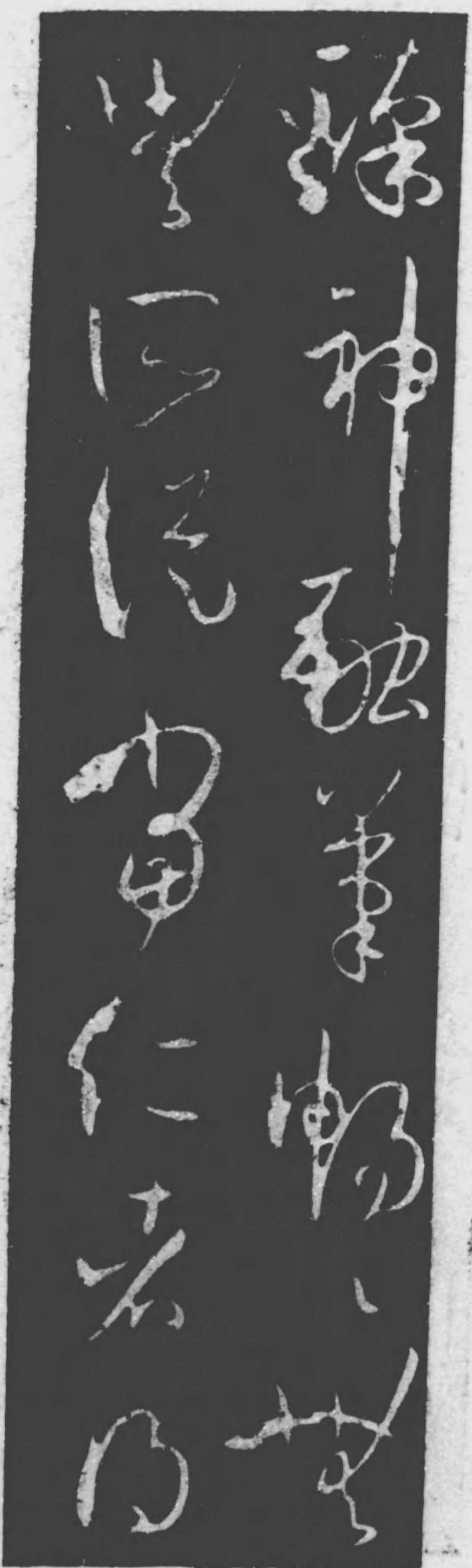
褚遂良字は登善河南郡公に封ぜらる。少にして書を虞世南に學び、後王右軍を研究して其意を得、用筆法の妙諦を會得した。後世彼の書を學ぶ者多く、殊に晩年の傑作雁塔聖教序は用筆法研究の指針である。同州聖教序、孟法師碑、倪寬贊、伊闕佛龕碑、房玄齡碑等は楷書、枯樹賦、哀冊文、千字文等は行書で、何れも名作たるを失はぬ。

褚遂良書 雁塔聖教序



孫過庭は草書を善くし、二王の真髓を得たといはれてゐる。其著「書譜」は草書にして彼の書道に關する意見を述べたものである。

孫過庭書 書譜



顏真卿は唐代隨一の大將軍にして、義兵を起し安祿山の亂を平げ、後魯郡開國公に封ぜられた。幼時家貧にして筆紙に乏しかつたので黄土に習字したといふ。王羲之より出でて別に一派を爲し、楷行草何れも妙趣を打開し、渾撲雄偉にして字體豐潤、氣象博大なる書風を大成した。多寶塔碑、麻姑仙壇碑、家廟碑、東方朔畫贊、元



次山碑・中興頌・李元靖碑・建中帖等は楷書・行草に争坐位帖・祭姪稿等あり、破體に變將軍詩がある。何れも風情を異にしてゐる。

顔真卿書 建中帖

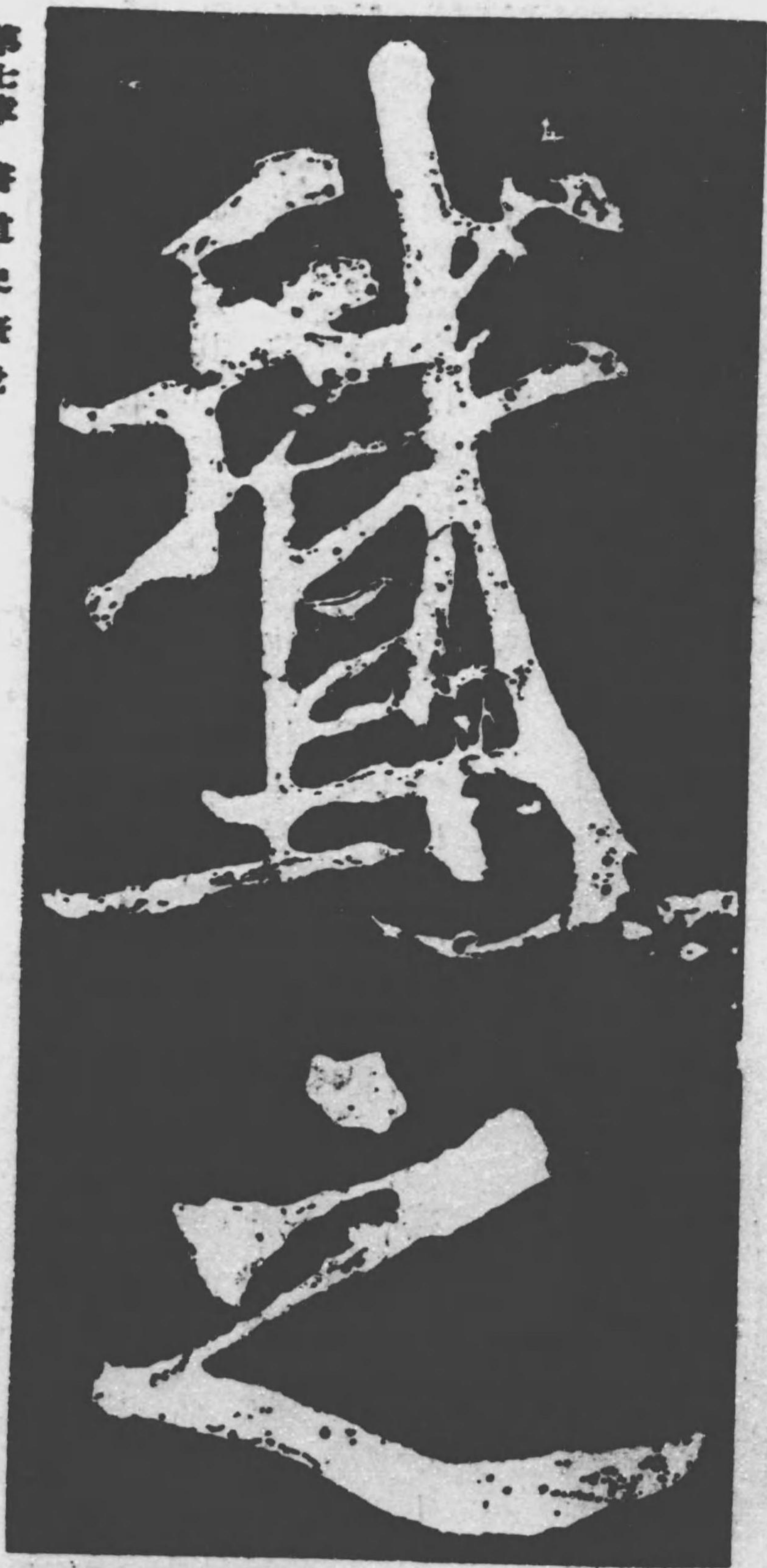


此外唐代の名作には殷令名の裴鏡民碑、李懷琳の絶交書、歐陽通の道因法師碑、王知敬の衛景武公碑、張旭の草書千字文、賀知章の孝經、李北海の雲麾將軍碑及杳思訓

碑、徐浩の不空三藏碑、柳公權の玄秘塔碑、懷素の自叙帖、千金帖、聖母帖等がある。  
七、宗以後

唐は書の極盛時代で其後は次第に格調が下つて來た。然し宋の時代は清新な氣分が横溢したので、晚唐の型に捉はれたものよりは爽快な感がある。即宋人は

蘇東坡書 羅池廟碑





法に捉はるゝ事無く自己の個性を思ふまゝに伸し自由の天地を求めて法を脱し型を破りて魂を打込んだ生々した書を作つた。當時の大家は蘇東坡、黃庭堅、蔡襄、米芾の四人であるが、其中文豪の蘇東坡と畫家の米元章が書に於ても著名である。又太宗の時古今の書を集めて淳化閣帖十卷の法帖を作り、徽宗の大觀年中大觀帖十二卷が出来た。

元時代の代表的書家は趙子昂である。彼は宋時代に亂れた書法を復古せしめて純正穩健な書を作つた。鮮于樞も亦よくした。

行書千字文趙子昂書



明時代では祝允明、文徵明、董其昌等著れ、何れも我國書道に影響を與へたが、然し格調は大分下る様である。

清朝で名高いのは、王鐸、劉石庵、伊墨卿、鄧石如、何紹基、潘存等で、揚守敬、吳昌碩等も近代の名手である。

## 第二節 日本書道史

### 一、上代

私は上代を大體奈良朝前と致したい。

我國の書道は要するに支那書道の延長であり傍系である。即後には日本獨特の書道藝術を展開したが、出發の當初は遺憾乍ら支那書道の模倣に過ぎなかつたといはねばなるまい。

我國に於ては國字は即漢字であつて、應神天皇の十六年（昭和九年より一千六百四十九年前）百濟の使者王仁が論語と千字文を献上した事に始ると考へるのが至當であらう。尤もそれ以前にも文字はあつたとは思ふが、恐らく鐘繇の千字



文であらうと思はるゝこの書道の傳來は、實に日本文化の一新紀元である。其後約四百年間はさしたる變化も無く、文字は只言語の符牒として實用に使用されたるに止まり、然も上流社會にのみ限られてゐた事であらう。

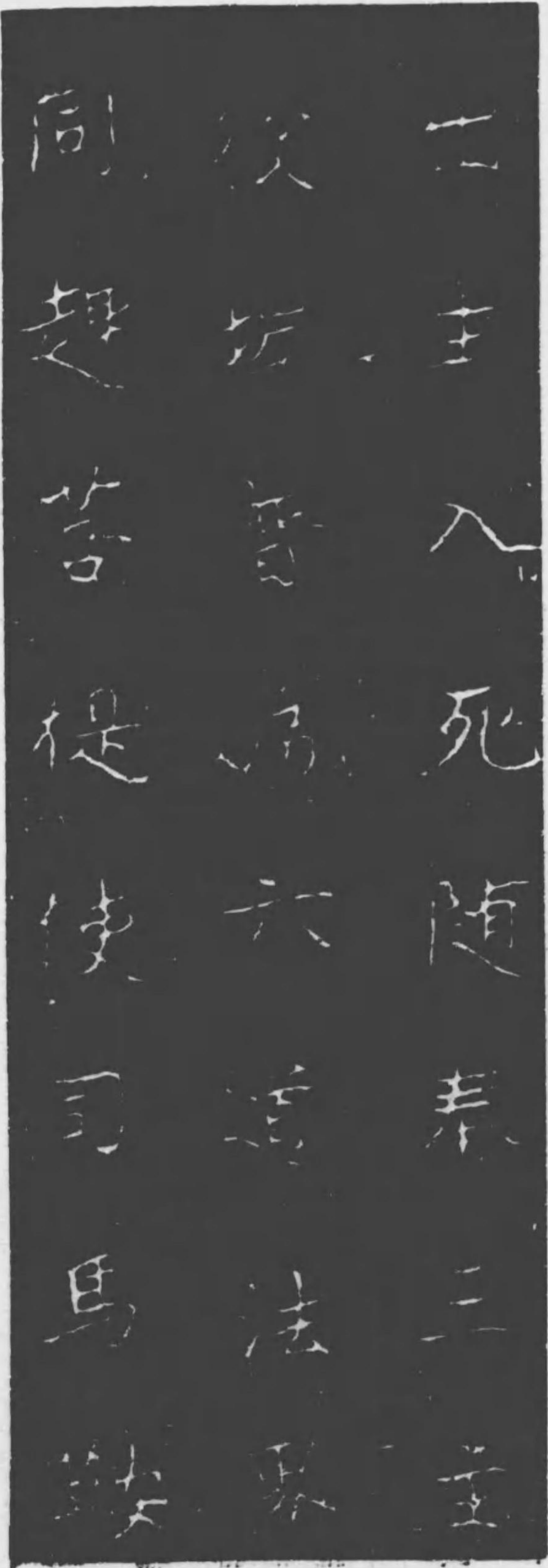
處が天智天皇の御代になるとぼつゝ、藝術としての書道が發展した。續日本記にも「淡海朝の書法一百卷を崇福寺に施入す」とあるから、此頃では書道が相當重んぜられたのであらう。續いて欽明天皇の十三年に佛教が傳來してからは、佛法華經義疏傳聖德太子御書



典經卷の書寫が盛になり、聖德太子は殊の外佛法を尊信し給ひ、御筆の法華經義疏は現存する我朝最初の眞跡であるばかりでなく、我國佛典註釋の嚆矢として貴重なるものである。

其後天武天皇の朝には、大和國川原寺で一切經を書生に寫させられた事があり、持統天皇の御代には、書博士百濟末子善信等に白銀二十兩を賜うた事が日本書記にあるから、大寶令以前既に書博士、書生を置かれし事がわかる。

釋迦佛光背銘





又文武天皇の大寶令には、書博士書生の外に寫書手の名も見え、當時の名蹟が正倉院に現存してゐる。

當時の金石文は少いが、造像に法隆寺の「藥師像光背銘」「釋迦佛光背銘」「藥師寺東塔櫓」等がある。何れも六朝風の剛健な用筆の中に瀟散な風趣があり、高古な含蓄が吾人の眼を引つける。

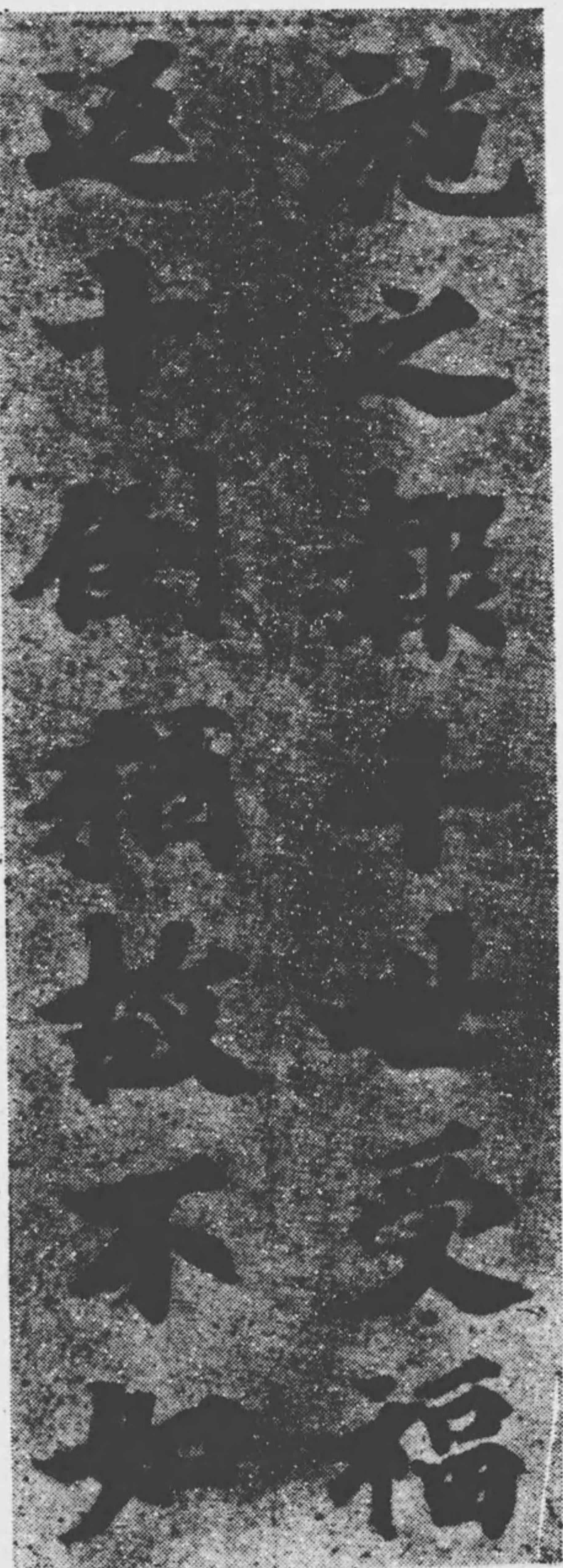
## 二、奈良朝

奈良時代の書道は佛教と共に隆盛に赴いた。當時は總て佛教中心で、書道も亦彫刻建築等の藝術と共に著しく進展した。上に聖武天皇・光明皇后等の名手を戴き、下に良辨僧正・紀古佐美・吉備眞備・惠美押勝中將姫等の能書家が輩出した。

寫經は奈良時代書道の特色であつて優秀なものが多い。聖武天皇御筆と稱せられる賢愚經など、實に筆力雄健で寫經中の白眉である。

此外に聖武天皇の御宸筆としては、正倉院に宸翰雜集一卷と銅板勅書がある。

傳聖武天皇宸翰賢愚經



光明皇后は藤原不比等の三女で才色兼備に渡らせられ、御歳十六にして聖武天皇の妃となられ、後臣下として始めて皇后に冊立遊ばされた方である。厚く佛教を信ぜられ、救恤の爲悲田院・施藥院を設けられた事は歴史に見えてゐるが、書道上より眺めても忘る可からざる偉大な存在である。

皇后の御書「樂毅論」は王羲之の臨書であるが、筆力遒勁にして用筆精妙な事は



古今獨歩で、恐らく書聖の劇蹟をこれ程巧に臨書せしものは支那にもあるまい。此外皇后の御筆に杜家立成雜書要略がある。

光明皇后御筆樂毅論 正倉院御物



奈良時代に於ける碑文には、山城に宇治橋斷碑、下野に那須碑、上野に多胡郡碑、陸

前に多賀城碑等あるが、皆六朝風の雅健にして風韻高き書である。

### 三、平安時代

平安朝は吾國書道の黄金時代で、漢字の傳來以來漸次に發達し奈良朝の頃に六朝書道に迄到達したのが、今や一大飛躍を爲し、花咲き鳥歌ふ爛漫の春に巡り遭へる如き心持さえする。即桓武帝が都を平安京に遷されてから、文物制度は更に整然し、遣唐留學の擧の頻繁するにつれ、彼土の書道はズン／＼直接に傳へられて一般の研究が盛となり、随つて大手腕家が續出した。

上には叡明なる桓武、嵯峨の兩帝の立たれるあり、下に空海、逸勢、最澄等の名手現れ、茲に我國書道の最高峯を形成したのである。今此時代を初期、中期、後期に分けて考察しよう。

初期に現れまし、嵯峨天皇は、親ら深い研鑽を積まれ、空海と共に我朝の二聖と尊ばれる程の大手腕家である。御筆李嶠詩は唐の歐陽詢の用筆法により、峻拔遒勁限り無く、行草の妙趣を打開されたものである。



嵯峨天皇宸翰李端詩

曹公之夢 律儀車  
有丹山霧 玲瓏素

この君にしてこの臣あり。かゝる明君の下に生くまれし僧空海は、實に我朝書道の最高峯たるのみならず、之を支那に求めても果して幾人あるであらうか。私は遙に王羲之に對してゐるのではあるまいかとも思ふ。幾多の傑作を残した中に、長友最澄に送りし手紙風信帖は、今猶三通東寺に現存してゐるが、高渾雅健、清麗、純正にして、行草の妙云ふべからず、王羲之の傑作喪亂帖、孔侍中帖等に雁行せるものと思はる。

風信帖 空海書

十日拂君 將多入  
留立 未待 是河見  
山城石川 雨大 德源

この風信帖と併稱される彼の傑作に灌頂記がある。之は大師が唐より歸りて六年後の弘仁三年十一月と十二月の兩度、京都郊外高雄山に於いて當時の名僧を集めて灌頂せし時の名簿で、卒意の間に書かれたものであるが、其渾朴にして韻致の高き事は、大唐の名手顔真卿の争坐位帖に相對してゐる。



弘仁三年十一月十五日於  
 寺文金剛多灌頂令  
 空海書

尙大師の傑作とすべきものに三十帖策子がある。之は大師の在唐時代の書で、歸朝に際し橋逸勢や寫經生等と共に、匆忙の間に金剛頂等の秘經を書寫せしもので、多く行草體で速書してあるが、金玉の如き點畫は一千年後の今日も猶煥然とし

て輝いてゐる。落筆輕妙で實用書としても絶好の手本であらう。

三十帖策子 空海書

翻引手信公器上...  
 七通...  
 中...  
 日月乳...

其他所謂大師流と稱する用筆の變幻極り無き藝術書に、益田池碑があり座右銘がある。之は偉大なる大師の一面にして、彼が其靈腕を揮ひて毛筆書道の極意を表現せしものといふべく、時に又かゝる大師の遊戯三昧の境地があつた事を窺ふ



書海空 銘右座



五六

事が出来る。其他大師の刺蹟を挙げれば七祖像賛がある。之も雄偉にして用筆の妙筆舌に絶するもので、惠果、阿闍梨、一行、阿闍梨、耶の賛の如きは、鐵柱の天より下り奔流の滔々たる如き筆勢である。之亦師の畫像に對し敬虔の情湧き起り、人間業とも思はれぬ劇作を生じたのであらう。

七祖像賛 空海書



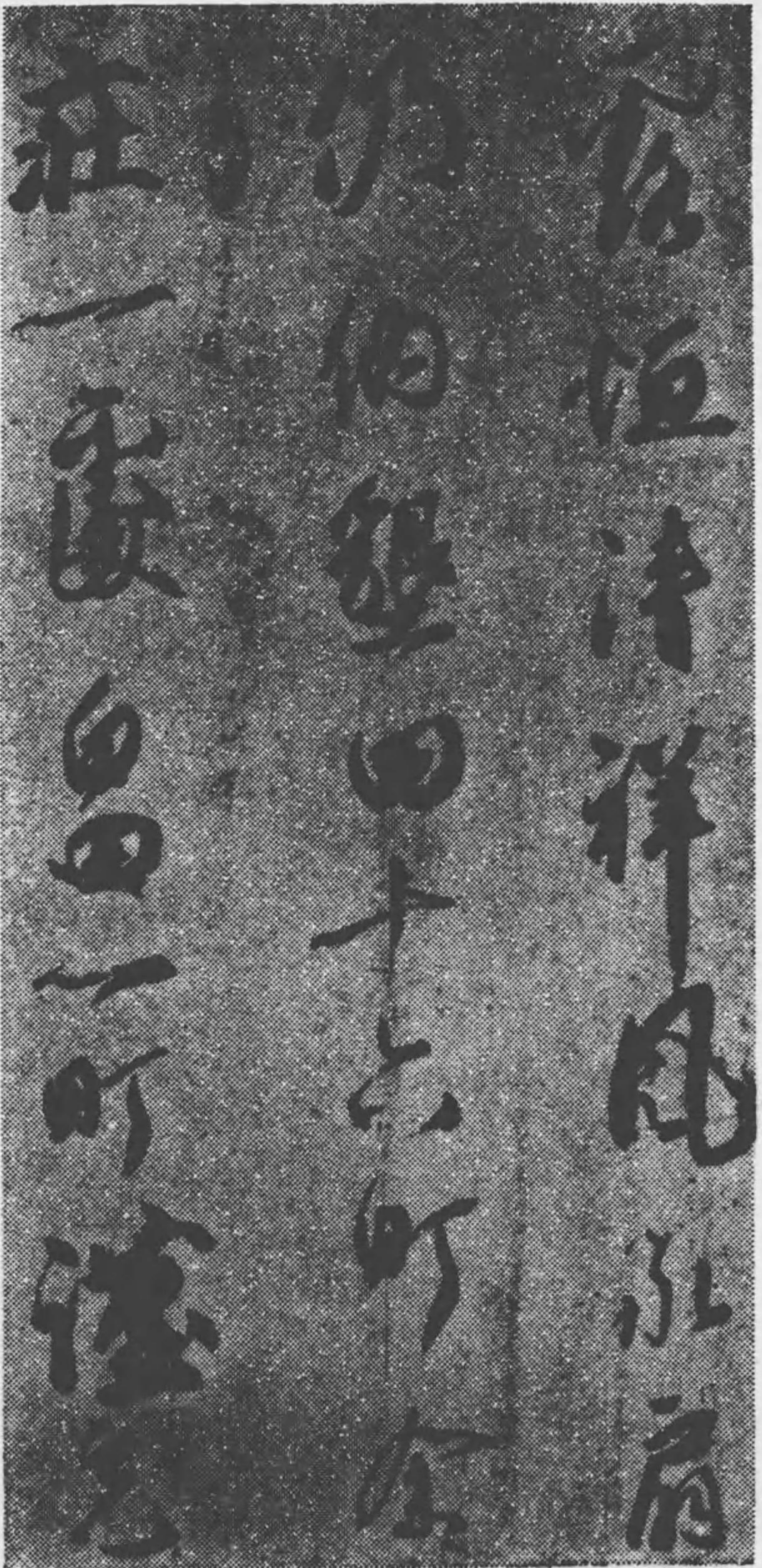
斯様に大師の書の現存せるものは一々趣を異にしてゐて、其變化極りなき藝術は、偉大なる才能を物語るに充分である。此他に著名なるものを挙げれば、孫過庭書譜、金剛般若經解題、雙臂指歸、狸毛筆奉獻表、請來目錄等がある。

三筆の一人の橘逸勢は、入唐中柳宗元から書法を受けたと稱せられてゐるが、書と共に文に秀で、唐人橘秀才と呼んだといふ程である。彼の代表的作品に伊都内



親王願文がある。全巻を貫ける精妙なる筆勢は沈着痛快にして筆端火を吐き、正宗の名刀にて亂麻を断つと思ひあらしむ。空海の風信帖、嵯峨帝の李嶠詩と共に、日本書道の三絶であらう。

伊都内親王願文 橋逸勢書



此他逸勢の書として傳はるものに興福寺南圓堂銅燈臺銘がある。謹嚴な楷書で雄逸且秀潤である。

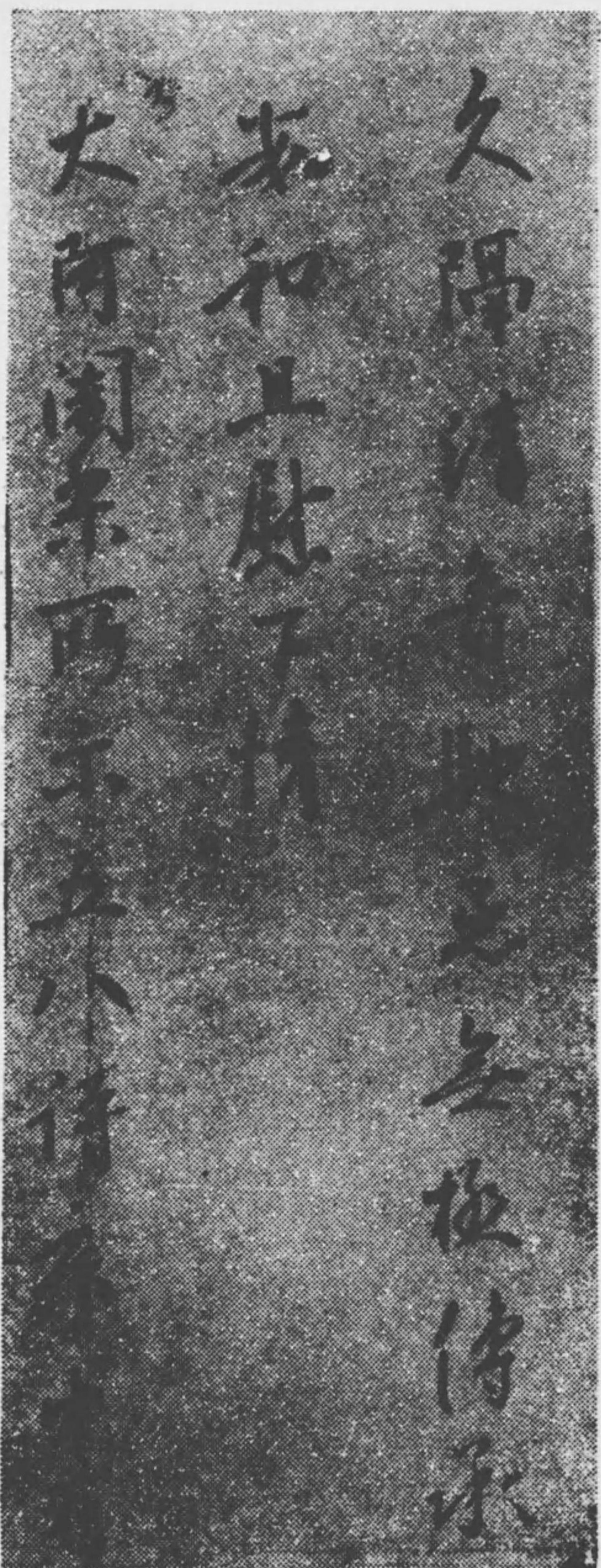
銅燈臺屏銘 橋逸勢書





平安朝初期に於て三筆に並ぶ名手は僧最澄であらう。事實最澄の書が空海と稱せられて傳はるものもある位である。次に掲げたのは空海に送りし尺牘の一部であるが閑雅にして上品な事は唐の虞世南の面影がある。又清純なる温容は高嶺の月を仰ぐ感がする。

尺牘 最澄書



最澄の書には此他に、請來目錄、入唐牒、天台法華宗年分緣起等がある。

此時代から平安朝の中期にかけて、三筆三蹟の中繼を爲すものに、藤原敏行の神護寺鐘銘と菅原道真卿の書と傳へられる百鍊鏡詩がある。漸次和様への特色が濃厚となつてゐる。

中期を代表する者は小野道風、藤原佐理、藤原行成の三蹟で、日本書道が唐様を脱して、純然たる和様を確立した時代である。當時廟堂に於ては藤原氏權を専らにし、大宮人を中心として絢爛たる文化が展開したのである。

三蹟は何れも晉唐を基調とし、王羲之を祖述してゐるけれども、時代の好尚は圭角稜々たる峻拔な六朝風よりも、豊圓にして優麗な書風を愛したので、三蹟の書は格調からいへば或は三筆に一步を譲るかも知れないが、繊細な技巧は勝るとも劣るなき典麗なる書道を形造つた。

殊に特筆すべきは平假名の完成で、支那に發祥せし漢字は彼土で古文より篆隸、楷行草と進化したのが、日本に於いて更に一段の進歩を爲し、草書よりも更に簡易にして優美なる平假名を創作したのである。平假名は空海の作といはれてゐるか



ら平安朝初期の頃に出來たと思はるゝが、此時代に至りて始めて大成した。

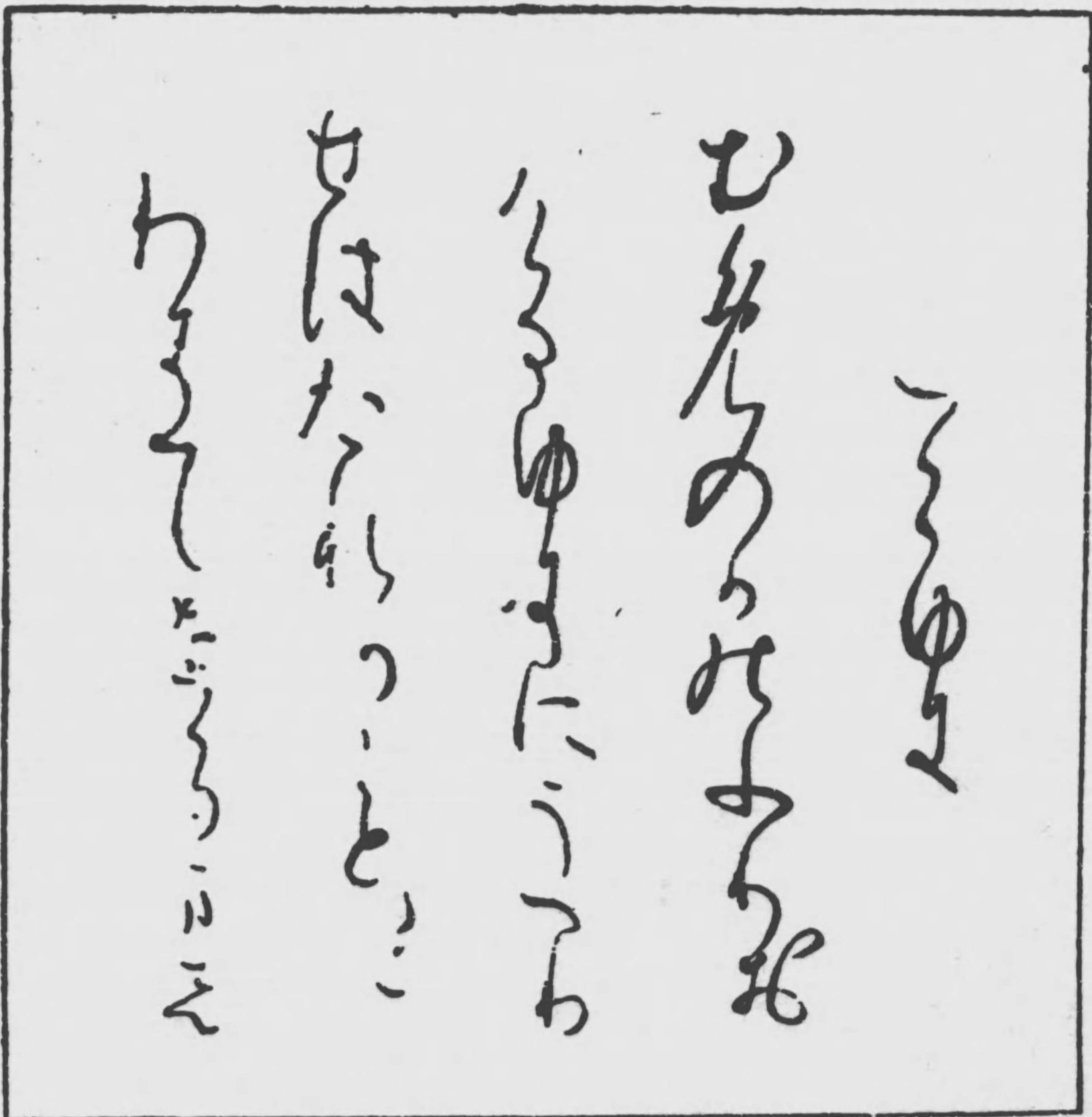
三蹟何れも漢字の大家であるから、非凡な手腕にて特色ある傑れた草假名を書いたが、行成は殊に名手で上代様假名の典型を作り上げた人である。

紀貫之は土佐日記の筆者として、又古今和歌集の撰者としてあまりにも有名であるが、假名書道に於ても亦當代の大家で、貫之書と稱せらるゝものが澤山に現存してゐる。これ等は或は其後の能書家の手に爲れるものではないかと思はれるが、兎に角假名書道として傑出せるものが多い。

高野切は一種二種三種とあり何れも趣を異にし、一種は才氣縦横して濃淡潤渴の變化あり、二種は練勁古厚、三種は流麗溫雅の名作である。

此外に色紙散し方の根源を爲す寸松庵色紙、桂宮萬葉集等の傑作がある。前者は雄健な筆致で一氣に貫注し且圓轉洒脫の妙趣も深い。

書之貫傳 紙色庵松寸

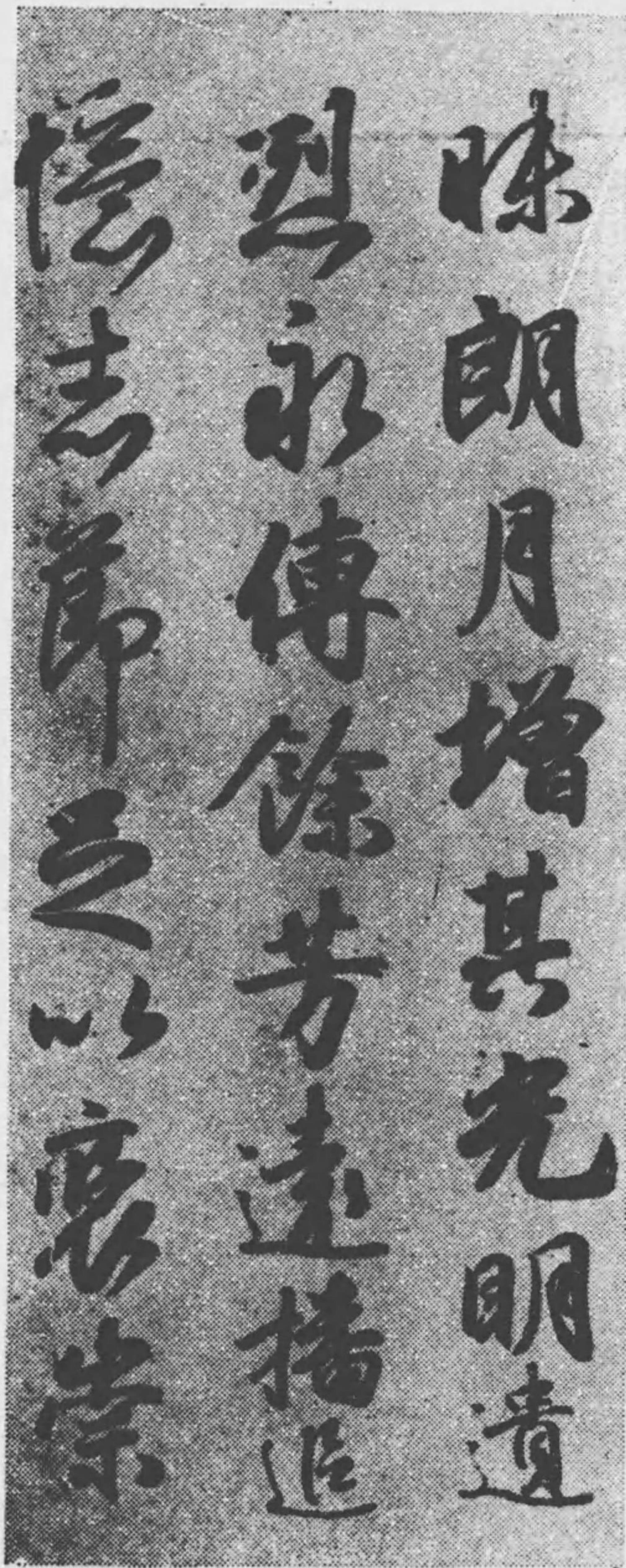




野蹟小野道風の能書家たる事は三歳の童兒も柳の枝に飛びつく蛙の傳説で知つてゐる。寛平六年尾張に生れ、醍醐朱雀村上の三帝の寵を受け、宮殿佛閣等に揮ひし名蹟が多い。道澄寺鐘銘玉泉帖智證大師賜號勅書屏風土代等は漢字としての代表作で、豊艶秀潤な本朝風の劇蹟である。

假名も亦一種の格調あり、老蒼古勁で、秋萩帖本阿彌切繼色紙等が名高い。

書風道野小 書勅號賜師大證智



書風道野小 帖泉玉



書風道野小傳 帖萩秋

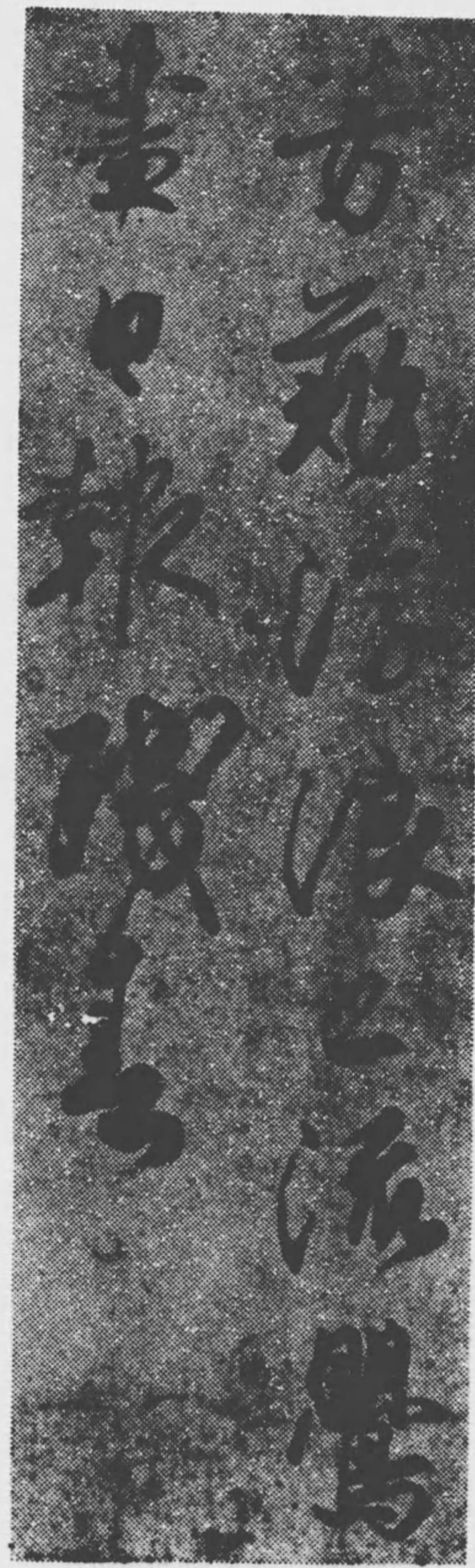


佐理卿の書は三蹟中最も三筆に近く、筆勢峻拔にして書品高古、其手紙の如きは大師の風信帖と共に我國尺牘の雙璧である。假名も亦老蒼にして、賀の歌筋切通



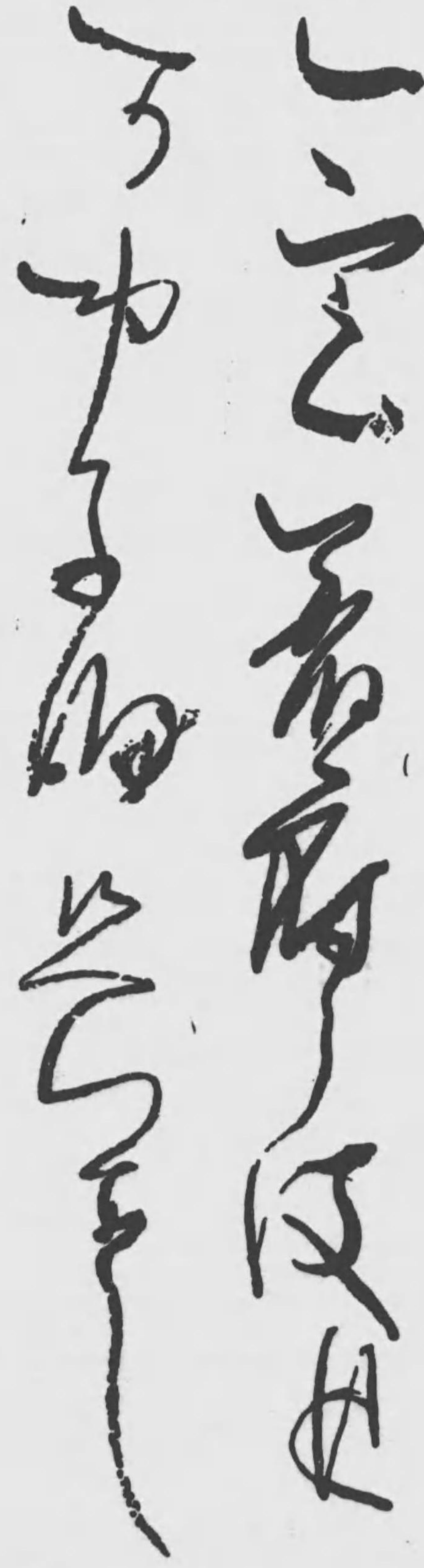
切紙然切等が名高い。

書理佐原藤 紙懷詩



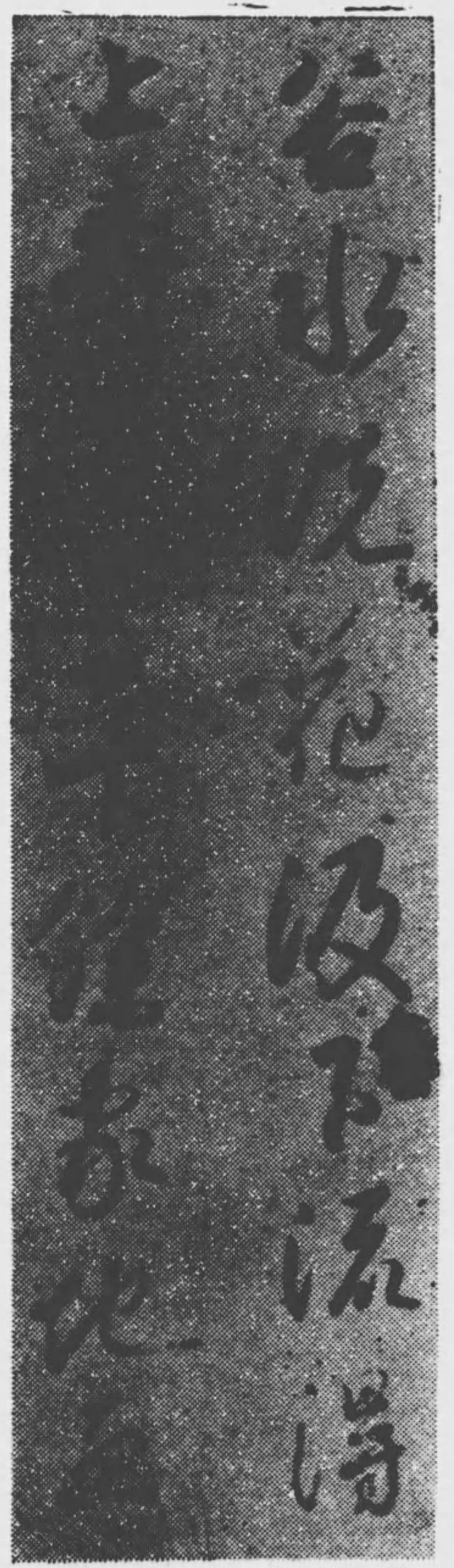
帖洛離

書理佐原藤



藤原行成は權門に生れ位正二位大納言迄進み、書は王羲之から出て和様を大成し、世尊寺流の始祖を爲した人である。漢字は温潤明朗にして、假名は典麗優雅である。共に大宮人の風貌を具へ貴公子の書たるを憶はしむ。  
本能寺切・白樂天詩卷和漢朗詠集古今集切・升色紙五首一首等著名なものが澤山ある。

本能寺切 藤原行成





御物和漢朗詠集 傳藤原行成書

荒籠見露林深洞同凡老檜出  
 向曉羞頰も露終書本底見青云  
 まふれそあわゆる年のいづれ  
 わつよのともよもあてはわれなり

朗詠切 傳藤原行成

ぶりのやまの  
 けり  
 まま  
 七別

尙行成と同時代に和漢朗詠集の撰者藤原公任（朗詠集・糟色紙・大色紙・小色紙・十  
 五番歌合・藍紙・萬葉・金澤・萬葉・北山抄）がある。和歌・詩文共に秀で書も又三蹟に次  
 ぐ名手で、数々の傑作を残してゐる。

平安朝の後期は、多年藤原氏が遊樂奢侈に耽り政治を怠つた結果、地方に動亂起



りて武士が擡頭し、人々は何時しか文を忘れて武を重んずる様になり、書も亦峻拔となりて品位が下つて來た。此時代の能乎は、源俊賴（古今集切元永古今集民部切朗詠繼色紙）を筆頭とし、藤原基俊・藤原忠通・藤原定信・西行等である。

#### 四、鎌倉時代以後

我國の書道が平安朝を最高として、漸次下り坂となつた事は、支那の唐以後格調が下つたと同様で、彼此對照して誠に面白い現象である。

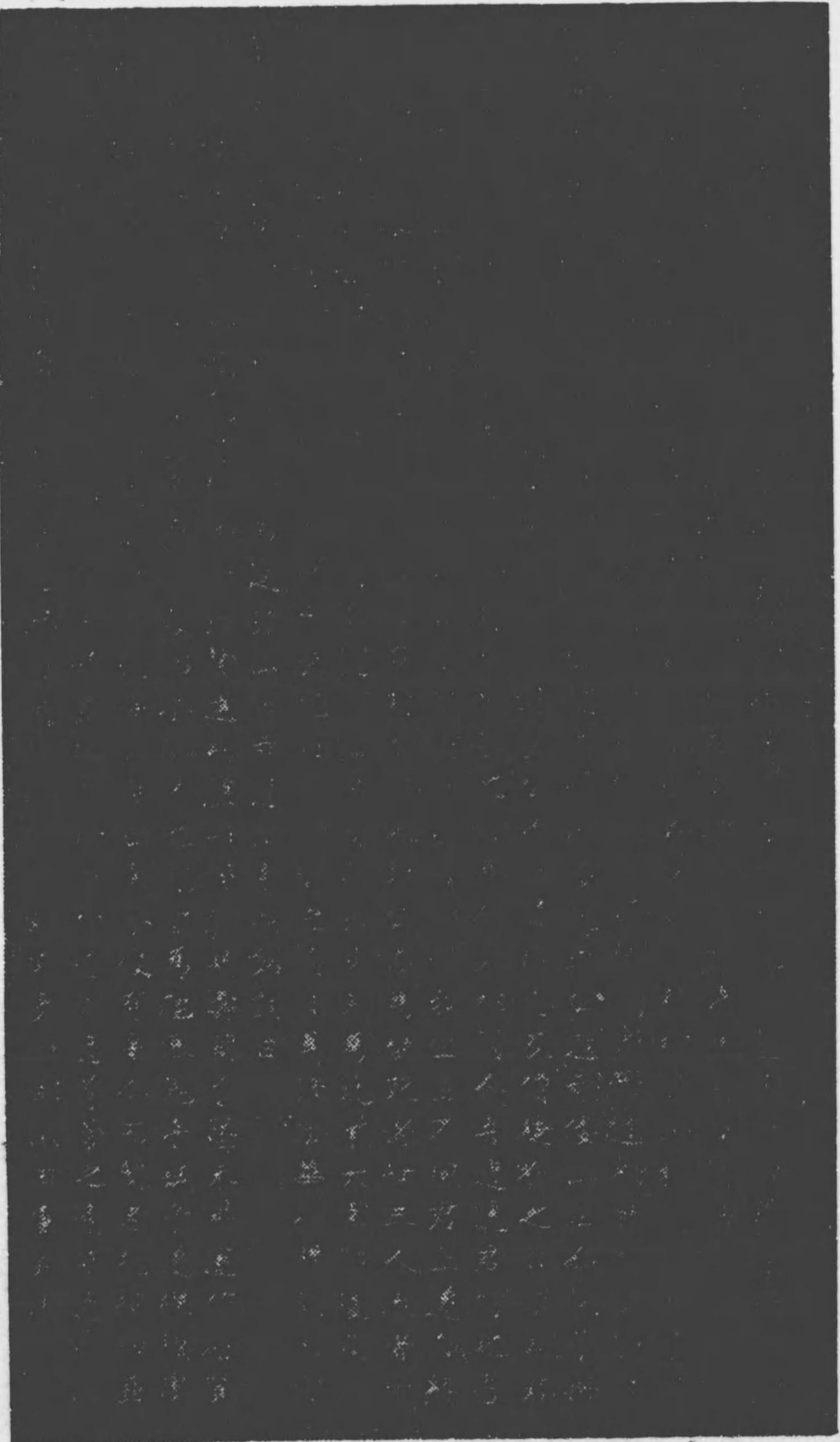
鎌倉以後には、三筆三蹟に比すべき大家は現れなかつたが、それでも鎌倉には藤原定家（小倉色紙・紀貫之土佐日記臨書）・宗尊親王（寛平歌合・深窓秘抄）・伏見天皇（讀漢詩書・新樂府・筑後切）等の純良なる大家があつた。

室町時代を代表する方は御家流の開祖尊圓親王（結夏衆名單・御消息）である。

江戸時代に入りては近衛信尹・本阿彌光悅・松花堂・烏丸光廣・隱元・北島雪山・疾生徂來・近衛家熙・細井廣澤・良寛・橋千蔭・頼山陽・市川米庵・卷菱湖・貫名菘翁等が輩出したが、私は漢字の貫名（松居遊見叟碑・山田公雪宛碑・左繡叙・白玉井銘・赤壁賦）と假名の近衛予樂院公（和歌大體・和歌萬代帖）とを推したい。この二人は確に上代に迫り純

正にして品位ある書を残してゐる。或は三蹟以來の人ではないかと思ふ。

山田公雪宛碑 貫名海屋書







明治以後の手腕ありし書家は、巖谷一六日下部鳴鶴・中林梧竹・渡邊沙歐・丹羽海鶴等であらう。

其他長三洲・金井之恭・村田海石・西川春洞・前田點鳳・小野鷲堂等も著名である。

## 第八章 書法

### 一、書法の價值

書法とは書道に於ける法則であつて書の根本生命である。されば書法に叶つてゐる字は立派な字であつて、之に叶はぬ字はよい字とはいへない。例へば第七章中に現れた字を見ても、皆一樣によい字である所以は書法に叶つてゐるからである。書法上から眺めれば支那では唐以前、日本では平安朝以前は正しく、それ以後は概して亂れてゐる。(勿論例外はあるが) 斯様な意味から私は書道史を説くに支那は唐以前、日本は平安朝迄を細説し、以下を略述した次第である。

然らば書法とは何であるかと問はるゝと簡明に説明する事は出来ない。恐らく之は誰にも出来ないであらう。よいものを澤山観て自ら悟る事が何よりである。さればこそ本書中に名蹟を澤山出して讀者諸氏の御参考に供したのである。これらのものをよく御覧なさい。そして御悟り下さい。

書法を説明したものは古來澤山ある。然しどれも漠然としてゐて幾何學の定



理の様に説明したものはない。然し其中で一番やかましいのは永字八法であらう。之は東漢の蔡邕が石室の中で神人から授かり、魏の鍾繇、晋の王羲之、隋の智永等を経て唐の四大家に傳はり、今も猶書を口にする時は必ず擧げる程の問題のものである。

卷頭に手本筆者書風の永字を掲げてをいたが、ぼんやり観ると何でもないつまらないものゝ様に見える。然し古來「永字は書法の綱目なり萬字俱に全し」とか「古人筆を用ふるの術、多く永字に求めて法を取る。其八法の勢能く一切の字に通ずるを以てなり」とかいはれて大切な字とされてゐる。

そして永字八法を基として各變化を考へ、二十四法とか三十六法とか七十二法とかいふが斯様な數は何でもよいと思ふ。早く其根本を悟る事が要諦である。殊に小學兒童に色々複雑な名稱等授ける必要は無い。知らず識らずの内に其意を得て法則に叶ふ様になればそれでよいと思ふ。

## 二、用筆法と結構法

書法を大別すると用筆法と結構法とになると思ふ。永字八法は用筆を主とし

て説明してゐるが、毛筆書方の根底は用筆であるからこれを第一とし、次に結構法を指導せねばならぬ。文字は點と畫とから出來てゐて、之を揮運するに當りては、第一に正しき用筆に従ひ、第二に美しき結構に據らねばよい字は出來ぬわけである。然し始の間は上に露れたる形に目がつき易く、内に潛みたる用筆に及ばぬ事が多いから、この點を注意して手本文字の眞髓に觸れる様にしたいものである。尙用筆法は大體卷頭の永字八法につき御研究を願ひ、次に結構法の大要を列記してみる事とする。

### 一、間 架 (分位法)

- (一) 縦分位法   豎畫の間隔を等しくするもの   川明則
- (二) 横分位法   横畫の間隔を等しくするもの   三書高
- (三) 斜分位法   斜畫の間隔を等しくするもの   多勿杉
- (四) 一般分位法   各點畫の間隔を等しくするもの   必雪赤

### 二、結 構 (對位法)

- (一) 向 勢   左右を向ひ合ひに作るもの   俗湯・飴



- (二) 背 勢 左右を反して作るもの 洗院城
- (三) 直 勢 左右を直く作るもの 則淡洲
- (四) 圓 形 字形を圓く作るもの 永寺尋
- (五) 方 形 字形を四角に作るもの 閑剛始
- (六) 三角形 字形を三角に作るもの 威品直
- (七) 菱 形 字形を菱形に作るもの 帝市南
- (八) 梯 形 字形を梯形に作るもの 絶風茂

### 第九章 毛筆書方の指導

#### 一、姿 勢

「心正則筆正」と唐の柳公權が言つた様に、立派な字を書くには先づ心を落着けねばならぬ。心を落着けるには體則姿勢を正しくせねばならぬ。姿勢が崩れると進歩の遅いのは勿論、やがて不良の習慣が出来るから始から注意して、正しい姿勢堂々たる態度の良習慣を養ひたい。

學校で行ふ毛筆書方は大抵腰掛の姿勢であるが、この場合私の経験ではあまり深く腰を掛けぬ様にし、稍胸を張り下腹に少し力を入れ、兩足を少し開きて足先に體重を移す様にすると、上體は自然に少し前に倒れる様になるが之が一番よいと思つてゐる。

坐した時の姿勢は、先づ正座して下腹部に少し力を入れ、上體を正して少し前に倒す様にすれば、眼と紙面との距離が三、四十糎となり、精神も自ら集中されて習字に適した姿勢となる。然し一般には上體を眞直にし、頭だけ前に屈けるのが多いやうであるから、此點は各自の好きにしたらよいと思ふ。唯机はなるべく低いのがよくて、膝よりあまり高いのは書方としては適當でない。

#### 二、毛筆の執筆法

執筆法は大體毛質の剛柔によりて異なる。新手本は共に稍剛鋒に屬し、舊來の手本は軟毫に屬してゐる。白い毛は、大抵羊毛で軟いが、之は明の董其昌以後の事で、それ以前の元、宋、唐、隋、晉等は多く狸や鹿や馬等の剛毛が用ひられ、日本でも維新以前は卷心のシツカリした筆が使用されてゐた。日下部鳴鶴翁の様に純羊毛長鋒



筆を用ひられた方は、廻腕法と稱して四本の指を揃へ母指とで圓形を作り、筆の軸を垂直に指先に支へて揮運する様な不自然な方法を用ひられたが、之は鋒が軟である爲に逆筆により筆力を出すに都合よくする爲で古法ではない。又一般に懸腕直筆と稱し、軸を垂直にすべき様に言はれてゐるが、之も軟毛の爲の執筆法で古法では無い。

古來多く用ひられた方法であり、新手本の筆者も爲されてゐるのは單鉤又は雙鉤と稱し、食指又は中指と中指を前に出し、他の指は後に廻して筆を支へ、鋒を稍左前に傾け、掌を空にし、指先でしつかりと筆管を持つ方法である。總じて執筆法には古來定則無く、不自然な方法でも慣れれば上手に書けるものであるが、兒童の指導に際しては成るべく模式的な方法によらしめよい習慣を作らしめたい。管を持つ位置は楷書では穂から約三四分、行草書は更に少し上部を持つのが普通である。

### 三、毛筆と腕法

腕法とは右腕の働き方の事で、懸腕、提腕、枕腕、着腕と前記の廻腕等がある。懸腕

は臂を舉げ、腕を空に懸けて書く仕方であり、尋常一年の如き大字の學習に於ては之によらねば勢ある字は書けない。之は又速書に適してゐるので、練習して小字に迄及ぼすと實用書に便利である。名前等の細字を書く場合は枕腕により、左手を机上に横へ之を枕として書いてもよいが、私は着腕法により、鉛筆書の様に右腕や手頭を机上に固定せぬ程度に軽く置き揮洒せしめたらよいと思ふ。

### 四、潤筆

墨を穂先に含ませるのに鋒の元迄潤す者と、半分位固めて先の半分位に含ませるものがあるが、一般に前者は後世に屬し、後者は古法の様である。新らしき手本も後者である。兒童も半ば固めて用ひさせると、鋒の腰が強くなり使用が容易で筆力も得易く、硬筆書方にも近くなりて運筆が平易となる。

此爲には、筆は使用後一々穂の元迄洗はさないで、墨を雑布又は練習用紙等で拭ひ置かしめ、あまり固くなつた時は穂先だけ水で洗はせる様にさせたい。

### 五、運筆

書方の時は先づ心を落着け、正しき用筆法に従ひて一點一畫を疎にせず、焦らず



喉かす緩急宜しきを得させ、自然にして筆脈が切れぬ様筆と手と心が一如になつて揮運する様に指導せねばならぬ。

### 六、手本の學習方法

手本の學習は臨書が普通で、これは手本を傍に置いて見て習ふ方法で、筆力を練り用筆法を學ぶに都合がよい。本學年に於ては大體之により文字の骨力を作り暢達を計りたい。其他摹書と稱し、手本の上から紙を載せて寫して習ふのや、骨書と稱して骨法を示せる上を習ふのもある。

背臨は、臨書や摹書の後に手本を見ないで揮灑する事で、この爲には手本の字をよく暗記せねばならないので、練習の際實が入り、實力を養ふのに都合がよいから時々行ふのもよい事である。

上達の捷徑は、廣く淺く習ふよりも狭く深く勉強する事であるから、手本の教材を全部を濟まさねばならぬと考へて素通りせず、少々残るとも習ふ字は反覆練習して徹底さす方がよい。同一教材を繰返す事は兒童の學習興味を減じ易いが、指導目的を明にして一步々それに近よらす事になれば進歩の過程に興味を持ち

同一の教材でも飽かずに熱心に習ふものである。要は其方法である。

### 七、指導方法と批正

兒童に書方學習は面白いものだといふ印象を與へる事は、生涯にどれだけ良い影響を及ぼす事か知れない。本科では常に兒童の長所を認めて賞讃してやる事が必要だ。下手な字でも全部拙では無く、何處かに美點があるから其所を賞してやり、缺點は成るべく叱らぬ様に寛大にみて、一步づつ正してゆくのがよい。

批正に於ても、指導した要點に對する結果を重んじて二・三に止め、且部分添削とし、採點の標準も指導事項を重んじ、成績の評語にあまり優劣をつけず、努力も認めて失望自棄させぬ様に留意せねばならぬ。常に優秀な兒童のみ讚めて他を顧みぬと、一は天性上手と思つて努めず、一は生來人に及ばずと思つて自暴する様になる。

### 八、示範と練習

書方は規範的教科であるから模倣を基調とし、示範と練習とを交互に重ねてゆべきである。勿論間架結構等は兒童に工夫させてよいが、用筆法は書の本質に



して根柢を爲すものであるから、正しいものを反覆練習し、應用出来る迄導かねばならぬ。且決して一派の筆癖を用筆法と誤解させてはならぬ。

示範説明では要點を簡明に指導し、主要點畫は大筆、チヨーク等で大書し、明瞭丁寧に示範して急所を會得させねばならぬ。總じて説明を簡にして練習を多くし、練習も目的を認識せる自覺練習であらしめたい。

### 九、書方指導目標の段階

始は運筆の暢達を計りたい。暢達な揮運には性情が流露して兒童に快感を興へ興味を起させるものである。次第に用筆法を正し、大切な處は教師の示範につれ兒童も一緒に空間に大きく揮運せしめ、起筆、終筆、轉折、跳ね等の具合や、緩急、停頓の要領を會得させ、以つて筆力を養ひたい。筆力を得れば興味が湧くので、これは上達の秘鍵である。一般に間架、結構に就いては行届いた指導が行はれてゐるが、肝心な筆力に及ばぬ者が多い。成績物も先づ剛健俊拔な處を賞する様にしたい。

### 十、基本練習と初書

教材中大切な點畫の基本練習を先に行ふ事は効果が多い。又初書を行ひ、之に

より第一指導を爲して第一練習に移り、之を材料として第二指導を加へ、更に第二練習に入るといふ様な順序正しい指導を行ふのがよい。

### 十一、毛筆書方と用具

筆は毛筆書方で一番大切な用具であるが、之に就きては既に詳述した通りである。大體稍剛目の筆を半分程下して用ひるのがよい。

硯は古來文房四寶中の隨一に數へられてゐるが、之は専門書家の用ゐる端溪硯や歙州硯キョウジウケンの事で、兒童用のものは安價な粗末なものであるから、磨墨に時間を要し却つて氣分を損ひ、又練習時間を縮少せしむるので私は寧ろ墨汁がよいと思ふ。其爲には硯は石でも瓦でも筆の穂を揃へるのに都合よきものであれば何でもよい。只罐や瓶は穂先を揃へ難く、毛筆書方の氣分を害するのでよくない。

墨も墨汁によれば便利であらう。

文鎮は紙を押へる爲是非必要である。要は重くて細長いものであれば、金屬製のものでも石でも何でも宜い。

下敷も是非欲しい。一番よいのは羅紗であるから、半紙判より少し大きい形の



ものを古洋服の廢物利用でも何でもよい使用したい。羅紗の上には紙がよく落着き、且滲み出た墨が着かない爲に次の紙を織す事が無い。一度作れば長く用ひられるから成るべくこれが欲しい。よく厚紙など敷いたのがあるがこれはよくない。寧ろ「ネル」の布の方がましである。

筆巻も用意したい。筆は使用後はよく拭つて竹製の筆巻に包み置きたい。竹の鞘に入れるのは穂を損し易いからよくない。

紙は一般には白色のツルツルした半紙が用ゐられてゐるが之は筆が沁りてよくない。殊に剛目の筆は一層沁るから、ルーラーをあまり當てない和唐紙の類がよいと思ふ。値段も普通の半紙より高くないものが出来てゐる。之を學級なり學校なりで仕入れて、適當に四字なり六字なりの罫を入れ、或は練習前に兒童に折らして使ふ様にしたい。

## 第十章 硬筆書方の指導

### 一、鉛筆書方の手本と指導時間

兒童の各種學習作業中鉛筆の使用は絶えず行はれてゐるから、其使用方法を會得し且習熟する事は勿論必要な筈である。然し文部省から發行された書方手本中には鉛筆書方は加へてない。されば鉛筆書方は全然等閑に附してもよいといふ意圖であるかといふにそうでも無い。鉛筆を使用する以上は、読み易く、速く、且美しく書寫するに越した事は無く、又是非かくあらしめたい。

然らば何故鉛筆の手本が無いかといへば其必要が無いからである。即鉛筆書方は必要であるが、鉛筆手本を出す程の必要が無いからである。これは鉛筆の使用は毛筆の如く困難でなく、且讀本を中心として適宜行ひ得るからである。

斯様な意味から、私は小學校下學年に於ける硬筆書方は特定の書方時間を設けなくとも、國語の讀方綴方等の時間に併せて行ふ考へで進みたいと思ふ。然し鉛筆の使用方の説明や基礎的練習位は、書方の時間を一部割愛して行つたらよいと思ふ。

以上の見地から本書には文部省の手本通り毛筆書方の指導を解説し、鉛筆書方の方は讀方綴方等の時間に特に其つもりで注意し、或は書方の一部を割きて行ふ



考へから、特定の時間を設けて指導する事は豫定しなかつた。只これ等の場合に行ふ参考として、大體の注意を次に附加した次第である。

## 二、硬筆の種類と其特質

硬筆とは毛筆の軟なるに對して云ふ名稱で、一般に用ゐられてゐるのは鉛筆、ペン、硝子ペン、萬年筆等である。各々特徴はあるが何れも先が硬いから使用が輕便で、實用には最も多く用ゐられてゐる。元來硬筆は西洋に發達した書寫器具で、圓形な横文字を揮運するに適し、平面的運動を爲すべき様に造られてゐる。之に反し漢字は概して方形で、毛筆にて立體的に縦書する様に發達した文字である。されば硬筆で漢字、假名等を揮洒する時、毛筆の如くなし點畫の起筆部、終筆部或は轉折の部分に特に筆壓を加へると、紙面に凹凸を作つたり破れたりし、又文字の鮮明さも失ひ美觀を殺ぐ事となるから、硬筆獨自な平面的運筆法に據らねばならぬ。

## 三、鉛筆細字の目的

筆寫器具中最も輕便で簡易な鉛筆は、又最も普及せる文明の利器であるから、この使用に習熟せしむる事は實用として價值あるばかりでなく、ペン細字の基礎を

作るものである。而して讀方の書取、綴方の記述、其他各種の學校に於ける鉛筆書方總ての向上を目的とせねばならぬ。

## 四、硬筆書方の姿勢

兒童學習中絶えず起る鉛筆書寫の姿勢であるから、身體養護の上からも充分注意して、正しい姿勢の基礎を作らねばならぬ。

腰掛けた姿勢は毛筆書方の時と略々同じで、膝から下を垂直にして前後左右に屈伸したり組合せたりせず、足先は平に床に着け、上體は姿勢を正して其儘少し前に倒し、腹部を机から少し離し、頸を引く様にし、眼は紙面から約三十厘米位に保つのがよい。

## 五、鉛筆の選定と其取扱

使用の目的により軟硬種々あるが、筆記鉛筆は大體中庸を得たH或はそれより少し軟なものを選ぶべきである。則ち軟に過ぎれば線が太くなり易く、硬に失すれば不鮮明となる。鉛筆は二、三本削れるものを用意せしめ、心が折れ又は太くなれば直に取替へ、時間中には成るべく削らぬ様にした。又鉛筆を落したり打



つたりすると、内部で心が折れるから其取扱にも注意せしめたい。

### 六、鉛筆の執筆法及腕法

單鉤着腕の毛筆細字と略々同一でよいと思ふ。即ち食指を軸頭の上部に當て、拇指の腹の先と中指の爪根の左側で持ち、他の二指は軽く屈けて中指に着けるのである。

軸は左前約四十五度に傾け、右腕は机面に軽く支へて固定せぬ様にし、左掌面で用紙を軽く押へるのがよい。

### 七、鉛筆書方の用筆法と練習方法

用筆法は平面運動を骨子としてゐるから力が大體平均して運動する爲に、毛筆の如き筆意を失ひて性情は乏しくなるが、間架結構は毛筆の場合と全然同一である。

次に鉛筆書方では配字に注意して全體としての美を保たしめ、読み易い様に揮洒させる事に留意せねばならぬ。教材は國語讀本中より選び、始は草書によりて指導し、次に方眼の罫ある用紙に臨書させて練習するのがよい。

### 八、鉛筆書方指導上の注意

硬筆書方の目的は、一字々々を美しく書くよりも全體としての美麗さ、整然さ、明瞭さを目標とするものである以上、鉛筆書方に於ても同様、第一にキチント読み易く、次に美しくあるべき事を目標とせねばならぬ。

其方法として、第一目標では個々の文字の鮮明さを冀求し、第二次には全體としての整然さを企圖すべきであると思ふ。此意味から、私は鉛筆書方の指導を草書より入らしめたいと思ふ。即讀本を手本とし且教材として、讀本中の適當な場所を選び先づ草書せしめたい。草書とは敷寫しの事で、薄手の半紙或はパラフィン紙等を、直接讀本の教材の上に載せ、上から丁寧に間架結構を寫させるのであるが、之によれば各文字の形體を學ぶのに最も便利である。唯考ふべきは其爲に讀本に凹凸を作る患ある事で、それを防ぐ方法として、私は讀方帳などに用ふる丈夫な硬い下敷を讀本の頁の下にシツカリ當てさせてゐる。この草書は毛筆書方の學習に於いても随分古くから行はれてゐる方法で、唐時代に既に爲されてゐた事が當時の雙鉤廓填の現存によりて立派に證據立てられてゐる。



第二次の練習には方眼の罫紙に臨書させ、これの習熟を待ちて漸次白紙の指導に移るのである。尤も尋常二年としては罫紙の練習のみで充分であるが、學年の進むにつれ白紙に練習させて鉛筆書方の指導を徹底させねばならぬ。

白紙に練習させる時は、上下の文字をつめ、漢字は假名より稍大に作り、各行の頭を揃へて通りを直くし、行と行との間を広く開けさすと、全體が整然として読み易く且美しくなる。私は追々斯様な方面に迄導きたいと思ふ。勿論かゝる指導は、特定の鉛筆書方の場合以外、課外に宿題として課しても相當な成績を擧げるものである。

## 第二篇 細 説

### 〔甲〕 甲種手本による指導案

#### 第一學期

(豫定凡十四週 一週二時 約二十八時間)

#### 第一週 第一時

- 一、題目 本學年書方學習につきての諸注意と書話
- 二、要旨 本學年に於ける書方學習の第一時であるから、用具の取扱方や姿勢執筆腕法等の基本的訓練につき復習し、更に本學年書方學習の大要と其目的を話し、尙書話を爲して學習心を喚起せしむ。

〔甲〕 甲種手本による指導案



三、時限 一時間

四、準備 兒童 書方手本、硯、墨汁、入小罐（或は墨）、筆（大小二本）、紙、文鎮、下敷筆卷、  
雑布等

教師 執筆姿勢圖、示範用大筆、墨汁及硯、示範用紙（新聞紙）、書方手本等

五、指導過程

1. 第一學年に於ける書方學習の回顧
2. 書方の好きな者を舉手せしむ。
3. 今年も引續き毛筆書方を實施する事を話す。
4. 毛筆書方の楽しみを語り其目的を話す。
5. 書方用具の點檢

（教師が豫め全級兒童の使用すべき書方用具を取揃へ置きて配布するもよ  
50）

書方手本、硯、墨汁又は墨筆（大、小）、紙、文鎮、下敷筆卷、雑布、  
不足の品あれば次の書方の時間迄に用意すべきを命ず。

用具の配置は右端に雑布、其上に硯、其内側に筆卷を置き、其上に筆を二本載す。  
硯の向ふに墨汁の罐或は墨、中央に下敷、其上に紙を置き、上端を文鎮で押へる。  
手本は左端に置く。

6. 書方用具の使用方法及並に取扱上の諸注意につき問答す。  
特に大切丁寧清潔の三點につき留意すべき事を話す。

硯の持方は海を向ふにして低くなし、上から丘の部分をシツカリ握る。宿墨  
の出来ぬ様にする事。机の右端の雑布の上に置く。

墨汁は小罐から必要なだけ硯に出して用ふる事。

墨を用ふる場合は磨墨の方法と、落して折らぬ様に氣をつける事を注意す。  
筆の穂の下し方は、先づ指先で穂先を半分程ほぐし、其部分だけ海に入れてよ  
く浸し、丘で毛並を揃へ、墨汁が付き過ぎぬ程度に含ませる。使用後はよく墨  
を拭ひ、穂先を揃へて筆卷に巻いて置く。穂先があまり堅くなつた時は先だ  
け水で洗ふ。

7. 正しき姿勢の必要を話し、其要領の指導、



執筆姿勢圖の提出

姿勢正しければ心正し。

「心正しければ筆正し」唐柳公權

8. 執筆法並に腕法の指導

9. 書話 日本第一の書家弘法大師の話を書す。

三筆の隨一應天門の故事、嵯峨天皇が空海の手本を知らずして大師に示された事、入唐中口及兩手兩足にて一度に別々の事を書いたといふ五筆和尚の逸話等を話す。

10. 手本下敷雜布等名前の入れられるものには入れ置く事、

11. 後片附

12. 次の時間から愈々毛筆書方の學習を爲すから書方道具を忘れぬ様にする事。

第一週 第二時

一、教材 山ザクラ

二、要旨 本學年毛筆書方の第一歩であるから、前時に續き姿勢、執筆、腕法、潤筆等の指導を爲すと共に、尋一に於て既に學習せし漢字山、及片假名ザ、ク、ラの指導を爲し、これ等の教材の用筆結構に習熟せしむ。

三、教材觀 此頃になると全國到る處の山野に咲き亂れる國花山櫻が、其儘教材となつてゐる。

毛筆書方の指導は楷書の練習から始むべきである。此意味から書方學習の初歩たる本學年の手本は、漢字の楷書並に其範圍を出でざる片假名の學習を爲すべく編纂されてある。

本教材を用筆上より眺める時は、左撇即掠筆と、豎畫即努筆、横畫即勒筆等が骨子を爲してゐる。其中最も主力を注ぐべきは山の第二畫の轉折と、ク、ラ等の横畫と掠筆の連絡である。

四、教材解説 「山」は尋一、十頁日月山川の處に出でし既習教材である。

此字は地平線上に聳える連峰に象りし古文凶より出でし象形文字である。

用筆上、第一畫の豎畫は所謂鐵柱にて、起筆がグット紙に入り落着いてから直





結構上、全體が山の形を爲し、左右の間隔を略々等しく作る。

白字は唐楷遂良孟法師中の字で、用筆結構共に手本文字の根底を爲してゐる。

「ザ」は新出文字なれども「サ」は尋一、十四頁「花ヲサカセル」の處に現はれし既習文字である。散の左旁上部であるといはれてゐる。



用筆 第一畫は長く大きく覆勅に作り、落着いてから左上に抜く。第二畫は右下に稍倒して短く引き上に抜く。第三畫は起筆をグット落着けてから、二畫と向勢になる

様左下に運び、懐が廣くなる様にしてスート左に抜くのである。右肩の點は小さく打つ。

結構 横畫の兩端を等しく作り、稍堅長の菱形を爲すつもりで書けばよい。



「ク」は尋一、三頁ソラクモの條に出でし既習教材である。

漢字久より出す、

白字は唐の王知敬書、衛景武公碑中の字である。

用筆 手本文字は白字によく似てゐる。第一畫は短くして啄筆を爲し、左上に抜きて第二筆に入り、小横畫は上から置く様にして次第に力を加へて短く引き、右角でガツチリ受けて一轉し、懐を廣くする様な氣持でグングン引き稍圓く左に抜くのである。

結構 第一畫は短く第二畫は長く、且平行せぬ様にし、下部を上部よりも廣く爲す。





「ラ」は前と同様尋一ソラクモの條に出でし既習教材である。

此字は良の上部より取つたものだといはれてゐる。

用筆 第一畫並に第二畫の横畫は「ニ」の用筆で仰覆に作る。手本の字は起筆がどこもシツカリ入れてあるから、二畫の轉折もよく締り、穂先が僅に左上に露出し、其儘強い力で掠筆を爲す。此時心を籠めて腕で引き、收筆が綺麗に揃ひて一點に集る様に抜くのである。

結構 二横畫は梯形に作り、第二畫の内部を廣くする様に爲す。

### 五、教材区分 第一時 山ザの指導(本時)

第二時 クラの指導

第三時 全體練習後清書

### 六、準備 兒童 手本、硯、墨汁、筆、筆巻、下敷紙、文鎮、雑布等

教師 手本教材を清書せるもの、示範用大筆、示範用紙(新聞紙五六枚)

ピン、朱筆及朱墨(瓶入)、色チヨーク、執筆姿勢圖

### 七、指導過程

#### 一、豫備

1. 正しき姿勢をとらしめ心を落着けさす。
2. 用具の準備と整頓。之は前時間の終りに行はしむる様に習慣づけなければならぬが、始は用具の取扱方を指導する意味から時間の初に行ふ。  
雑布、硯、墨汁、筆、下敷紙、文鎮、手本と順序正しく出さしめ、正しき場所にキチンと置かす。其間教師は黒板に示範用紙を貼布す。
3. 雙鉤懸腕で筆の持方並に腕の構へ方を指導す。(執筆姿勢圖提出)
4. 墨汁を少し罐から出さしめ潤筆につき指導す。

#### 二、學習

1. 目的指示 示範用手本の提示、各字共一年の教材にありしことを想起せしむ。
2. 読み及意味の取扱

〔甲〕 甲種手本による指導案



3. 手本を開きて「山」の字を熟視せしむ。
4. 「山」の試書 二人指名して、黒板にチョークで大きく書かしめ、他の兒童に批評させて共同批評す。
5. 「山」の示範 運筆につき説明し乍ら大筆にて示範用紙に大書して示し、朱筆にて更に用筆法を説明す。
6. 運腕練習 右腕を挙げさせ、教師と共に二三回運腕練習を行ひ、用筆の急所特に第二畫の轉折の部分の要領を會得さす。
7. 潤筆に注意せしめ、姿勢執筆を正して、練習用紙右上に大きく一字書かしむ。此時用紙に四字の罫がいて無き時は、先づ四つに折らしてから書かしむ。以下皆同じ。
8. 成績物を上に挙げさせて講評し、優れたるものを二人程選びて取り、朱筆にて美點に圓を付け、缺點を批評し、更に大筆にて二三回示範す。此時兒童は手を舉げて教師と一緒に空間に運腕せしめ、運筆の緩急の具合を會得せしむ。

9. 各自練習 此間机間を巡視し、姿勢執筆を正し、朱筆にて用筆につき個別指導す。

10. 「ザ」の字につき手本を觀察せしむ。

11. 「ザ」の試書 各自半紙に一字宛書かしめ、挙げさせて講評し、其中一二枚共通缺點あるものを選び取りて、結構用筆につき批評せしめ共同批評す。

12. 示範説明 兒童も一緒に運腕練習を行ふ。

13. 各自練習 此間机間巡視個別指導す。

14. 共通缺點の批評 缺點の著しきものを一般に示して批評せしめ、朱筆にて批評す。

15. 最後に全紙に「山ザ」を二回通り練習させ、之を挙げさせて批評す。尙優秀なる成績を選びて鑑賞さす。

### 三. 整理

1. 後片付 靜に丁寧に且順序正しく用具を片付さす。残りの墨汁は當番に命じてバケツに集めさす。

〔甲〕 甲種手本による指導案



### 八、指導上の注意

#### 2. 学習事項の反省と次の豫告

1. 始めからあまり難かしい注文をすると書方は難かしいものだと思ひて嫌ふ様になるから、なるべく美點を賞揚して氣分を引立て、興味を感じしむる様に導きたい。

2. 鑑賞の方法は、筆使が正しいかどうか。力があるかどうか。形はどうか。墨のつけ方はどうか。等の事を標準としたい。

## 第二週 第一時

### 一、教材 クラ

二、要旨 前時の教材「山ザ」の復習を爲すと共に、新教材「クラ」の指導を爲す。本教材に於ては用筆上左撇即啄筆及掠筆に就き特に指導し、又横畫から掠筆に移る轉折の要領を會得せしむ。尙「ク」及「ラ」の第二畫の起筆に付、「ク」は軽く「ラ」は強く入れてある事に留意せしむ。

### 三、準備 前時に同じ。

### 四、指導過程

#### 一、豫備

1. 姿勢 着椅の正しき姿勢を執らしめ、暫時精神を落着かす。
2. 用具の準備と整頓 此間に教師は示範用紙を黒板に貼る。
3. 執筆法及腕法の指導
4. 潤筆の指導

#### 二、學習

1. 前時に學習せし教材「山ザ」を手本を見て各自一度書かしめ、上げさせて講評し、優れたるものと共通缺點あるものとを二三點選びて批評せしむ。
2. 山の用筆結構に付問答してから大筆にて示範す。  
此時兒童は一緒に運腕練習を爲す。

#### 3 「山」の字二字練習

- 4 「ザ」の用筆結構に付問答してから大筆にて示範す。

〔甲〕 甲種手本による指導案



此時兒童は一緒に運腕練習を爲す。

- 5 「ザ」の字二字練習
- 6 新教材の指示
- 7 手本の観察
- 8 「ク」の試書 二名程黑板にチョークにて書かせ共同批正す。
- 10 「ク」の示範 運筆につき説明し乍ら大筆にて示範し、朱筆にて用筆結構を解説す。
- 11 運腕練習 教師と一緒に兒童も右腕を挙げ、空間に大きく運腕練習を爲す。
- 12 潤筆に注意せしめ、「ク」を一字書かしむ。
- 13 成績物を挙げさせて講評す。  
二・三點優秀なものを取り、美點に圓を入れ、又缺點を朱筆にて批正す。
- 14 各自練習 机間巡視し乍ら、姿勢、執筆を正し、朱筆にて個別指導す。
- 15 「ラ」の手本観察
- 16 「ラ」を一字試書せしむ。

17 試書せしものを上に挙げさせて講評し、二三人共通缺點あるものを取り朱筆にて批正す。

18 示範説明 大筆にて教師が揮運する際、兒童も一緒に空間に運腕練習を爲さしむ。

19 各自練習 机間巡視個別指導

20 共通缺點の批正 共通缺點と認める成績を一般に示して批評せしめ、之に朱筆を加へる。

21 各自練習

22 最後に「クラ」の二字を續けて一度書かしめ、優秀なものを取りて鑑賞さす。

### 三、整理

1 後片付

2 學習事項の反省と次の豫告

### 五、指導上の注意

1 無味單調に流れぬ様成るべく變化をつけて、兒童の注意が常に學習事項に集



中する様に細心の注意を拂ひ、又管理訓練に特に留意して、静肅清潔等の良習慣を養はねばならん。

2. 成るべく早く自治的訓練を施し、用紙を配布したり、墨汁を集めたりする事は當番にさせる様にした。

## 第二週 第二時

一、教材 山ザクラ

二、要旨 第一時第二時に指導したる本教材の四文字を、練習してから全體の清書をさせる。

三、準備 同前

四、指導過程

一、豫備

1. 用具の準備と整頓

2. 姿勢・執筆及腕法の指導

二、學習

1. 前二時に學習せし事項の喚起

2. 目的指示 示範用の手本を示して本時の目的を指示す。

3. 「山」の字を示範して一字書かせる。

4. 兒童の作品を挙げさせて其中から二三點を選び、相互批評を爲さしめ、共通缺點につき朱筆にて批正す。

5. 更に二字「山」を練習せしむ。

6. ザ・クラにつき同様の方法にて指導し、三枚練習せしむ。

7. 第四枚目に小筆で落款を入れさす。

例、四月二十日 ジンニ 氏名、

注意1. 細楷は總て着腕單鉤にて記さしむ。

2. 潤筆は小筆を約半分程下し、穂先を揃へ墨をよく取りてから書かすむ。

3. 名前の位置があまり下らぬ様にする。



4. 配字は縦に直くして間隔を同じにする。
5. 姿勢が著しく前屈みにならぬ様注意す。
8. 一字宛示範してから手本を視て清書せしむ。

三、整理

1. 後片付
2. 清書を蒐む。
3. 優秀なる作品二三枚鑑賞さす。
4. 次の時間の豫告

第三週 第一時

- 一、教材 日ノマル
- 二、要旨 本教材も前教材と同様、尋一に於て既に學習せし文字のみであるから復習教材であるが、此度は更に精習せしめ用筆結構に付習熟せしめたい。
- 三、教材觀 大日本帝國の象徴である國旗を教材としてあるので、如何にも心持

よい句である。

日は尋一十頁に出で、ノは同七頁、マは同八頁、ルは同十四頁に新出せし教材である。

用筆上留意すべきはマの第一畫の左撇ひ則殊筆と、ルの第二畫右跳ね即勾筆とである。

結構上は日を長方形に作りて上下の空間を等しくし、マの第二畫の點が中心にある様にし、ルの第一畫は小さく第二畫を大きく作る事である。

四、教材解説

「日」は古文⊙⊙⊙等より出でし象形文字である。

結構 他の字に比し比較的小さく書くべきである。緊密な結體の外廓は、終畫が第一畫の下を受け、第二畫の下端より稍高く接してゐる。第三畫は左に接して右を開



〔甲〕 甲種手本による指導案



き、内部を上下に等分してゐる。  
 用筆 穂先を左前に傾け、用筆自然にして隅々まで行届き、リンとした力が籠つてゐる。筆脈は続き、第一畫の收筆は落着いてから上に反へり、第二畫、第三畫、第四畫と少も切れてゐない。尙第二畫は曲尺で、右角が沈着してから其まき引き下つてゐる。三横畫は二豎畫の堂々たるに比し何れも輕快にサツト引いてある。

白字は唐の褚遂良孟法師碑中の字で、用筆正しく、力と品と情趣とがある。



「ノ」は漢字乃の一部で、左下に大きく撇ふ掠筆である。起筆に十二分の力が入らないと途中で筆勢が鈍るから、其方向即筆を入れる角度に留意し、よく落着いてから腕でグングン斜下に稍弧を描き乍ら引き下し、先を左方に抜くのである。

「マ」は漢字末或は萬の草體の一部分をとりて出来たといはれてゐる。  
 用筆 第一畫の起筆をシツカリ入れ、稍右上りに且少し浮かせて運び、右角で



グツト力を入れ、一轉して左に撇ひ啄筆を爲す。其時○の部分と強く中心に止める。

結構 大體倒立せる二等邊三角形に作り、點は其頂點を爲す。「ル」は流の右旁の下部より作られたといはれてゐる。

用筆 左の掠筆は短く小さく作り、左上に抜きて右の豎畫に打込む。豎畫は掠筆と背勢を爲して反對に反り、下端で右下にグツト轉じ、力を得て右上に腕と共に跳る。此時筆管を少し右上に倒す様にする、穂先が揃ひて綺麗に抜く事が出来る。

結構 左旁を小さく作り大體圓形を爲す。尙右旁の角の内部分を廣く作る。

五、教材区分 第一時 日ノの指導(本時)

第二時 マルの指導

第三時 全體練習後清書

〔甲〕 甲種手本による指導案



六、準備 同前並に日の丸の旗  
七、指導過程

一、豫備

1. 用具の準備と整頓
2. 前時の清書につき概評を爲し、優れたるもの五・六點を鑑賞せしむ。美點並に缺點につき相互に批評さす。
3. 評語(甲乙或は美良可)並に評號(◎○)を入れたるものを返却し、特に優秀なもの五・六點を掲示す。
4. 姿勢、執筆及腕法の指導

二、學習

1. 目的指示 國旗を示し問答す
2. 試書 手本を視て「日」の字を初書さす。
3. 初書せしものを上に擧げさせて批評し、共通缺點あるもの二三を取り朱筆にて批評す。

4. 示範と一齊運腕練習
5. 各自練習 机間巡視個別指導
6. 「ノ」につきても同様の方法にて指導す。
7. 最後に「日ノ」と二回練習させ、之を擧げさせて講評し、特に優秀なもの數點につき鑑賞せしむ。

三、整理

1. 後片付
2. 次の時間の豫告
- 四、指導上の注意 筆の下し方を適當にする事は中々困難であるから、常に注意して半分位下さしめ、穂先を稍左前にして揮運せしむる様に習慣づけたい。穂が全部下りるとグニャ／＼して書き難い。

第三週 第二時

一、教材 マル

〔甲〕 甲種手本による指導案



三、要旨 前時に続き「マ」及「ル」の二字を指導し、「マ」の第一畫の横畫から左に撤ふ用筆並に側點の打方、「ル」の第一畫の短い掠筆並に第二畫の豎畫と跳ねに付指導す。

三、準備 同前

四、指導過程 前時に準ず

### 第四週 第一時

一、教材 日ノマル

二、要旨 本時は前二時間に指導せし「日ノマル」の教材を、總練習してから清書を書かすむ。個々の字に留意さすと共に、手本文字の様に、全體を位置よく納めたい。

落款の書方は、前の清書の時一度指導したが中々難かしいから、此度も大さ位置等につきて指導し綺麗に記させたい。

三、準備 同前

### 四、指導大要

1. 用具の準備と整頓
2. 姿勢を正し心を落着かしむ。
3. 目的指示 既習教材「日ノマル」を練習後清書を爲さしむ事を告ぐ。
4. 「日」より順次用筆結構につき大切な點を問答し乍ら示範し、一字練習させては共通批評を爲し、更に二字練習せしむる様にして一回通り復習す。
5. 清書を爲す事を告げ、名前の書方につき指導してから位置よく丁寧に書かすむ。
6. 清書の提出  
次に一字づゝ示範しては手本を見て清書せしむ。
7. 後片付
8. 本時の學習事項反省と、優秀作品の鑑賞

### 第四週 第二時



一、教材 タテヨコ

二、要旨 四角なものにはつきもの、縦と横とを片假名で表して教材としてある。此中ヨは新出文字であるが他の三字は嘗て一年に出てきた字である。

三、教材観 用筆上本教材に於ては勅筆即横畫と掠筆則斜畫との練習が主眼にして特に「ヨ」並に「コ」の第一畫の轉折の部分に留意せしむ。

結構上「タ」は「山ザクラ」の「ク」に「日ノマル」の「マ」の點を打ちたるものであるが、其位置に注意せしむ。「テ」はニの中央下部に一部かゝる様にして第三畫を打込む事。「ヨ」「コ」の終畫は豎畫の下を承けてシツカリ止まり、殊に

ヨの上下の空間を等しく作る事を忘れてはならぬ。

四、教材解説

「タ」は漢字「多」の半分である。

用筆上は第一畫は短く第二畫は長く作るのであるが、この際○印の部分の部分を廣くする様に注意す。又第二畫の起筆は軽く入れてグツト強く引き、第三畫の點を長く打つ。



結構上側點があまり上になると懐が狭くなつて窮屈な字になる。又下がると間が抜けるから手本の位置に注意せしむ。

「テ」は天の一部である。

用筆 二横畫を仰覆に作り長さをあまり遠へぬ。三畫は二畫に軽く接して強く打込み、腕を揮ひて左下に稍圓く引く。且各畫の筆脈が切れぬ様に留意せしむ。

結構 第三畫が横畫の中央下部に接するとき、○印の部分が開くと窮屈にならない。

「ヨ」は與の一部である。

用筆 横畫豎畫共に沈着しシツカリしてゐる。第一畫の右角はグツト落着いてから其まゝ下に引いてある。終畫の最後をキチンと止めて、豎畫の右下に少し出さぬと字に締りが出来ない。又横畫の打込みの方向に注意せしむ。





結構 方形を少しかしげた形で、平行四邊形を爲す。中央の横畫は上下の二横畫より少し短く、上下の空間は等しい。



「コ」は漢字己の一部である。用筆は「ヨ」と同一でよい。只第一畫の横畫が稍覆勒の形を爲し、穩さと落着がある。結構は「ヨ」よりも稍扁くして正方形に近い。且中間を寬に作る。

五、教材區分 第一時 タテの指導(本時)

第二時 ヨコの指導

第三時 全體練習後清書

六、準備 同前

七、指導大要

1. 用具の準備
2. 前時の清書につき、優秀なるものゝ鑑賞と批評、

3. 優れたるもの五・六點を揭示し、其他は返却

4. 本時の目的指示

5. 教材の讀と意義の取扱

書方手本により縦横の名稱並に意義を明確にす。

6. 手本文字の觀察

7. 「タ」の試書と共同批正

8. 「タ」の示範と朱筆による解説

9. 「タ」の練習と共通缺點の批正

10. 「テ」も同様の方法にて指導す。

11. 最後に「タテ」と二回通り練習させて講評し、佳作二・三點につき鑑賞並に批評を爲さしむ。

12. 後片付

13. 本時の學習事項の反省と次の學習豫告



### 第五週 第一時

- 一、教材 ヨコ
- 二、要旨 前時の「タテ」に続き本時は「ヨコ」を指導し、横畫の引方並に豎畫への轉折の具合、横畫が重なる場合は間隔を等しく爲すべき事等を指導す。  
尙字の締が終畫の筆の止め方によつて決する事も知らしむ。
- 三、準備 同前
- 四、指導方法 前時に準ず、

### 第五週 第二時

- 一、教材 タテヨコ
- 二、要旨 前二時間に指導したタテ・ヨコの四文字につき、用筆結構を復習してから清書を書かす。清書に際しては潤筆につき特に注意し、尙文字の大きさ位置等に留意して作らせたい。

### 三、準備 同前

### 四、指導大要

- 1、用具の準備と整頓
- 2、目的指示
- 3、「タ」より要點を問答し乍ら示範し、二字宛手本を見て一回通り練習さす。
- 4、名前の書方につき指導し、丁寧に落款を書かせる。
- 5、一字宛示範せし後手本を見て清書を作らしむ。
- 6、各自手本を見て更に清書を作らしむ。
- 7、よい方を一枚出さす。
- 8、優秀な作品二・三につき鑑賞と批評を行ふ。

### 第六週 第一時

- 一、教材 ムシハネ
- 二、要旨 虫と羽を教材とした片假名である。ムは新教材であるが、シ・ハ・ネは尋

【甲】 甲種手本による指導案



一に於て既に學習せし字であるから、ムの用筆結構を指導すると同時に、シ・ハ  
ネの既習文字を練習せしむ。

三、

教材観 片假名のみ四字教材はこれで終である。  
用筆 新出文字「ム」は用筆法に於ても特に留意すべき字で、第一畫の勾は既  
習「ル」の第二畫に似て更に倒れてゐる。點の打方はムとハは同一でよいが  
シは普通の側點である。ネには兩方とも含まれてゐる。  
結構上ムは字形三角をなす様、シは左端が圓くなる様、ハは中を廣くして右が  
下らぬ様、ネは大體楕圓形である。

四、  
教材解説



「ム」は漢字「牟」の上部であるといはれてゐる。  
用筆は始の者には中々難かしく、第一畫を斜左上からシツカ  
リ入れ、左下に扶る様にスツト引き、トンと打込んで力を得、右  
稍上に腕と共に揮運し、先を軽く抜いて最後の點を少し長く  
シツカリ打つのである。

結構は大體三角形になる様にし、若し點が右によると口が開いて字に締りが  
無くなる。



「シ」は氏の一部或は之の草體より生れたといはれてゐる。  
用筆 側點は何れも斜左より入りて左に出で、終畫虎牙は  
シツカリ落着いて力を得てから、右上に稍圓く臂を掲げて  
グ・グ・グと引き、スツト抜くのである。  
結構 二番目の點を稍左に寄せて左端を圓く作り、下の間  
隔を少し廣くす。尙○印の處を廣く作る。  
「ハ」はハの草體或は半の上部であるといはれてゐる。  
用筆 第一畫はシツカリ落着いてから左に卷上げる様に強く跳  
ねて上に抜き、空間を貫きて勢よく第二畫へ斜に打込み、更に稍下  
にグツト引いて沈着してから左に抜くのである。  
結構 右を左よりも稍高く作り、中間を廣くすれば字が裕つたり  
して来る。



〔甲〕 甲種手本による指導案





「ネ」は福の扁である。

用筆 第一畫の側點は模式的の形で、左上から打込んで稍下に引く。第二畫は起筆が沈着したら右上にグツト強く引き止まる處に筆力が溢れて左上に穂先をのぞけたまゝ、左下に掠筆を爲す。之をうけて第三畫はシツカリ掠筆の中から打込み、直下した

ら上に抜いて終畫の點となり、稍長く打つのである。

結構 第一畫と終畫の點は何れも離す。中心の位置に注意して、第三畫が字心をはづれぬ様にする。全體は卵形である。

五、教材区分 第一時 ムシの指導(本時)

第二時 ハネの指導

第三時 全體練習後清書

六、準備 同前

七、指導大要

1. 用具の準備と正しき姿勢の指導
2. 前時の清書中優秀なる作品を提出して鑑賞せしむ。
3. 優れたるもの五・六點を揭示し其他は返却す。
4. 本時の目的指示
5. 讀方及意義の取扱
6. 手本文字の觀察
7. 「ム」の試書と共同批正
8. 「ム」の示範と、朱筆による用筆結構の指導
9. 「ム」の練習と共通缺點の批正
10. 「シ」も同様の方法にて指導す。
11. 「ムシ」と二回通り練習させ、擧げさせて講評を行ひ、更に優秀なる作品二・三につき特に鑑賞と批評を行ふ。
12. 後片付
13. 本時の學習事項の反省と次の學習の豫告

〔甲〕 甲種手本による指導案



## 第六週 第二時

- 一、教材 ハネ
- 二、要旨 前の教材「ムシ」の復習を爲すと共にハネの教材を指導し、用筆結構に付會得せしむ。
- 三、準備 同前
- 四、指導方法
  - 1、用具の準備
  - 2、前時の教材「ムシ」の用筆結構につき問答し乍ら示範し、且練習せしむ。
  - 3、本時の目的指示
  - 4、手本文字の観察と「ハ」の試書
  - 5、一・二點につき共同批正を爲す。
  - 6、「ハ」の示範と練習
  - 7、共通缺點の批正と練習

- 8、「ネ」も同様の方法にて指導す。
- 9、「ハネ」と二回通り練習させて講評し、更に優秀作品の鑑賞と批評を行ふ。
- 10、後片付
- 11、本時の學習事項の反省と次の學習事項豫告

## 第七週 第一時

- 一、教材 ムシハネ
- 二、要旨 前二時間に指導せし本教材四字につき、用筆結構を復習してから清書せしむ。清書に際しては字が大小不揃にならぬ様又位置にも留意せしむ。名前も丁寧に記さす。特に清書に墨をつけぬ様清潔に作らしむ。
- 三、準備 同前
- 四、指導大要
  - 1、用具の準備と整頓
  - 2、目的指示

〔甲〕 甲種手本による指導案



- 3 「ム」より要點を問答し乍ら示範し、二字宛練習さす。
- 4 名前を書かす。
- 5 一字宛示範せし後手本を見て清書を作らしむ。
- 6 時間あれば手本を臨書して、更に一枚清書をさす。
- 7 清書の提出と後片付
- 8 優秀なる作品二・三につき鑑賞批評せしむ。

### 第七週 第二時

- 一、教材 村マツリ
- 二、要旨 祭禮はたいてい春秋二回あるが、これは春の鎮守の祭りを教材とせるものである。此中「マ」は「日ノマル」の處で既に學習せし字である。此處では漢字「村」の用筆結構を指導するのが主で、ツ及びリを併せて練習せしむ。
- 三、教材觀 村では木扁の書方を授け、且旁の寸の用筆をも指導す。「ツ」の側點は「シ」と反對に右に抜き、掠筆と共に反對であるから試に裏返して横から見

- ると「シ」になつてゐる。「リ」は兩畫が向勢を爲し中を寬に作る。
- 漢字と假名とある場合は、普通漢字を大きく假名を小さく作るのであるが、手本は四字の教材で、野の中に入れる爲に何れも大體同じ大きさに書いてある。

#### 四、教材解説

# 村



「村」は扁旁のある本格的な漢字であるから、こゝで其名稱を授けると共に木扁の用筆結構を指導したい。

用筆 第一畫は短く右上りに稍仰ぎ、上に抜きて第二畫の起筆を下から運んでシツカリ打つ。豎畫は直下すれども稍弓なりに反り、上に抜きて第三畫の掠筆を深く交へて打ち、左下にサット撒ふ。第四畫の點は上らぬ様にし、右旁寸の横畫は、扁の横畫より少し下げて入れ、豎畫は右に寄せて弓なりにシツカリ引き下げ、落着いてから強く左上に押出す。側點は稍高く打

〔甲〕 甲種手本による指導案



つ。

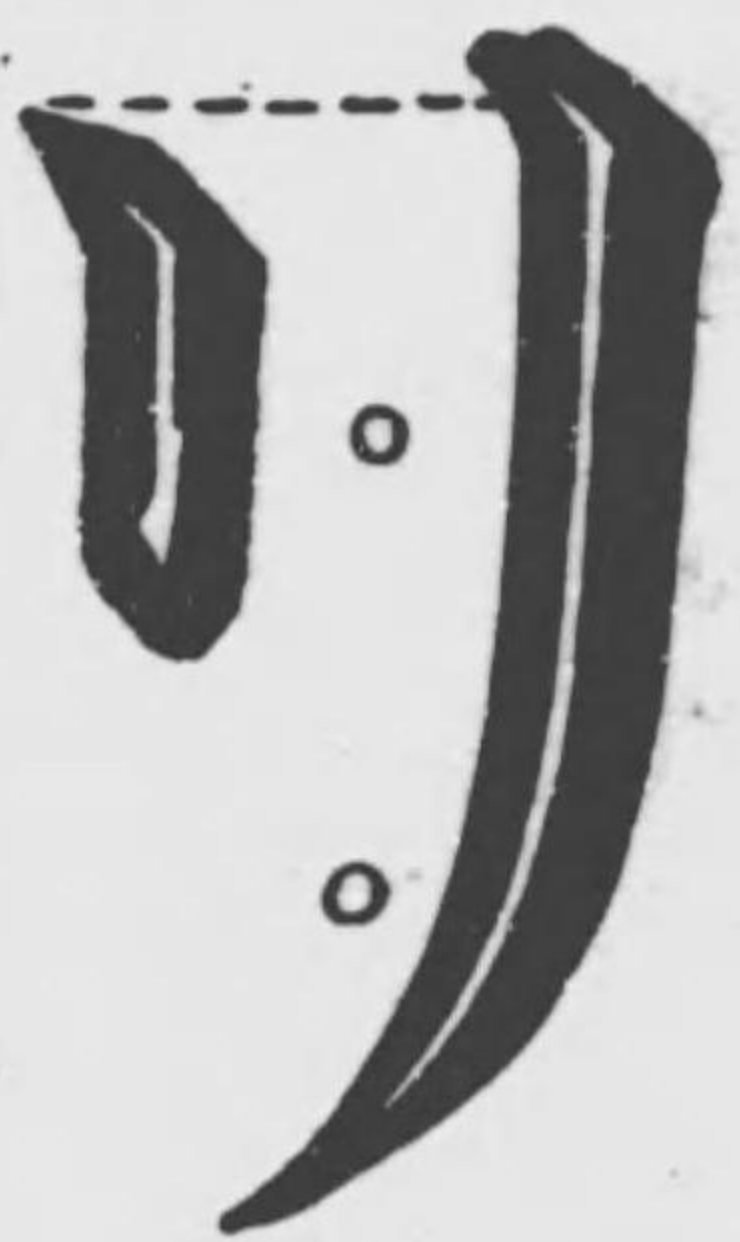
結構 字形稍圓味あれども、兩豎畫の上下は高さ略等しく、旁の方が心持長し、白字は近代の名手貫名菘翁の書である。此字は古來多く邨に作りし爲、晉唐にはない。貫名の字をよく觀れば用筆正しく筆勢峻拔にして、然も懷の廣いよい字である。尙木扁豎畫の下部を跳ねてあるが、この方が普通で且自然である。手本の字は教科書に據り、教科書は字引に従ひ、字引は篆書に捉はれてゐて、書學上は感心しない。

「ツ」は圓の構の草體から出來たといはれてゐる。

用筆上側點は左上より入れて右上に抜き、第三畫の掠筆は起筆がシツカリしてゐる爲に先迄リンと力が充ちてゐる。之も腕を掲げてグン／＼引くのである。穂先がよく揃ひ一點に集つてゐるのは、筆管を稍左に倒して順筆にした爲である。



結構 上部は高さを揃へ間隔は右が少し廣い。尙○印の處を廣く作る。



「リ」は利の右旁である。

用筆 兩畫は一は鐵柱に似て短く、一は掠勢を帯びて長い。第一畫は收筆を上を抜いて筆意が右畫の起筆に連つてゐる。第二畫は圓味を帯びて直下し、途中から左に

抜くのであるが穂先よく揃ひて品がよい。

結構 上右畫稍高く、左右向勢を爲して照應し、間を寬く作る。

五、教材區分 第一時 村の指導(本時)

第二時 マツリの指導

第三時 全體練習後清書

六、準備 同前

七、指導大要

1. 用具の準備
2. 前時の清書中優秀なる作品の鑑賞と批評
3. 優れたるものを掲示し、其他は返却す

〔甲〕 甲種手本による指導案



4. 本時の目的指示
5. 教材の讀方及意義の取扱
6. 木扁及旁の名稱を授く
7. 手本文字の觀察
8. 「村」の試書と共同批正
9. 「村」の示範と朱筆による解説
10. 「村」の練習と個別指導
11. 「村」の共通缺點批正と練習
12. 優秀なる作品の鑑賞と批評
13. 後片付
14. 本時の學習事項の反省と次の學習事項の豫告

## 第八週 第一時

### 一、教材 マツリ

二、要旨 前時の教材「村」につき練習し、本時の教材「マツリ」を指導す。「マ」は「日ノマル」の「マ」で復習、「ツ」では側點及掠筆、リは二畫の引方を特に指導す。結構上「マ」と「ツ」は三角「リ」は彈丸の形を爲す。

### 三、準備 同前

### 四、指導大要

1. 「村」の用筆結構の復習と示範
2. 「村」の練習と共通缺點の批正
3. 「マ」の示範と練習
4. 「マ」の練習と批正
5. 「ツ」の手本觀察と試書
6. 「ツ」の共同批正と示範
7. 「ツ」の練習と個別指導
8. 「リ」も「ツ」と同様の方法にて指導す。
9. 全體練習後優秀な作品二・三につき鑑賞と批評を行ふ。

「甲」 甲種手本による指導案



10. 後片付

11. 本時の学習事項の反省と次の学習事項の豫告

## 第八週 第二時

一、教材 村マツリ

二、要旨 前二時間に指導した「村マツリ」の四文字につき、用筆結構を復習してから清書せしむ。清書を汚さぬ様綺麗にして出す事を特に注意す。

三、準備 同前

四、指導大要

1. 用具の準備と整頓
2. 目的指示
3. 「村」より順次要點を問答し乍ら示範し、二字宛手本を見て一回通り練習さす。
4. 落款の書方につき問答してから丁寧に記さしむ。
5. 一字宛示範せし後、手本を觀て清書を作らしむ。

6. 各自手本を見て、更に一枚清書を作らしむ。
7. よい方を一枚提出さす。
8. 優秀な作品二・三につき、鑑賞と批評を行ふ。

## 第九週 第一時

一、教材 竹トンボ

二、要旨 男兒の興味を持つ「竹トンボ」の四字を學習する漢字と片假名の教材である。「竹」は新出文字であるが他は尋一の既習教材である。従つて「竹」の用筆結構を主眼とすべきである。

三、教材觀 尋常二年生には「竹トンボ」を作らす事は無理であるが、出來上りしものを見せるのはよい事だ。

「竹」は用筆結構共に漢字中でも難しい方である。然し手本は虞世南の字を基として上手に書いてあるから、之によりて其書方を充分指導したい。「トンボ」も既習教材であるが、「ン」の勾即金錐の用筆や「ボ」の豎畫の跳及左右の

〔甲〕 甲種手本による指導案